

浮穴・西石井荒神堂
東本II・III・桑原高井遺跡



1980

松山市教育委員会

序

当市の人団は現在40万人におよび、四国の雄都として日夜発展の一途をたどっており、その増加数は著しいものがあります。人口増加数と正比例して、宅地造成あるいは生活基盤としての道路建設等の諸開発によってめまぐるしく地域社会の変貌をとげているのが現状であり、これらの要因によって、埋蔵文化財の調査も必然的に多く実施され貴重な多種の遺構、遺物の発見に至っておりますのもご案内のとおりであります。

本報告書もその一例であり、南海道古代人の確かなあかしの一端が解明されたものでありますて、4地域の遺跡をここにまとめたものであります。

私どもは、最大の責務としてこれら祖先の残した貴重な文化遺産を多くの人達の御理解と御協力を得て保護顕彰し、後世に継承するものであります。本市において、あたかも本年は国際観光温泉文化都市の施行30周年を迎、つとに健やかな教育文化の振興をめざしているものであります、特にその中でも白鳳期の寺院跡として発掘調査を行ってきました来往廃寺跡は、中央と地方の関連を証明する上でまさに貴重なものでありますて現在は順次買収、保存整備を行っており、今後の活用についての研究及び出土品の保存施設等についても順次検討を行い、文化財の保護について万全を期す所存であります。

最後に、本遺跡の調査にあたって御協力下さいました関係各位の皆様に厚くお礼を申し上げます。

昭和56年3月31日

松山市教育委員会

教育長 西原 多喜男

例　　言

1. 本報告書は、浮穴遺跡、西石井荒神堂遺跡、東本II・III遺跡、桑原高井遺跡の発掘調査報告書である。

発掘調査担当者は森 光晴指導主事(旧任)があたり、浮穴遺跡は池田 学、桑原高井は西尾幸則・松村 淳、東本II・IIIは松村 淳・池田 学、荒神堂遺跡は池田 学・松村 淳がそれぞれ発掘主任として調査を実施した。

2. 発掘調査組織

調査主体者　松山市教育委員会

教　育　長	西　原　多喜男	
〃	関　谷　勝　良	(前　任)
教　育　次　長	森　田　富士弥	
〃	小　林　義　春	
〃	竹　田　恵	(前　任)
文化教育課長	藤　原　渉	
〃　課長補佐	坪　内　晃　幸	
〃　〃	岸　都　男	(前　任)
〃　第2係長	大　西　輝　昭	
〃　〃	西　伸　二	(前　任)
〃　主　任	西　尾　幸　則	
調査担当者	森　光　晴	(指導主事 現、勝山中教諭)
調　査　員	池　田　学	(非常勤嘱託)
〃	松　村　淳	(　〃　)
補　助　員	越　智　武　志	
〃	沖　野　新　一	

3. 調査協力者

末光祐之・栗林光男・田中勝海・池田 勝・仙波扶容子・海稻邦子・
仙波みどり・仙波一二三・重松孝子・仙波千春・東るみ子

4. 調査における造構測量は、池田・松村・西尾・越智・沖野があたり、造構写真撮影は森・池田・西尾が主に行い、遺物整理及び復原は松村・池田が行う。本書の作成にあたっては、遺物の整理・実測、写真撮影、製図をはじめ執筆は主に森が行った。本書の文責は森 光晴にある。
5. 発掘調査にあたっては、株式会社松山電気ビル及び永井興産株式会社、エヒメコープの積極的な協力を得たことを付記し、感謝したい。
6. 出土遺物は、古照資料館にすべて収蔵し、遺物は復原され一般に公開されている。

本文目次

I 浮穴遺跡

1 行政的位置と発掘経過	1
2 地理的環境	1
3 歴史的環境	3
4 検出された遺構	5
(1) 柱穴列遺構	5
(2) 構状遺構	6
(3) 土壙墓遺構	7
5 遺物	8

II 西石井荒神堂遺跡

1 行政的位置と発掘経過	11
2 発掘日誌の概要	11
3 環境	15
自然的環境	15
歴史的環境	16
4 検出された主な遺構	17
(1) 竪穴式住居址(SB01)	18
(2) 土壙状遺構と土壙墓遺構	21
1号土壙墓	21
2号 "	23
3号 "	26
(3) 壺棺の様相と埋設	27
(4) 土壙状遺構	30
5 出土遺物	30
(1) 土壙状遺構出土遺物	30
A 支脚形土器	30
B 壺形土器	30
C 变形土器	31
D 土壙墓出土の土器	31
6 結語	

浮穴遺跡と西石井遺跡の類似点と 相違点についての若干の考察	34
----------------------------------	----

III 東本遺跡

1 東本II次の調査位置と経過	37
2 検出された遺構	37
(1) 1号・2号竪穴式住居址遺構	38
(2) 構築についての小考	43
(3) 土括状遺構	44
(4) 墓立柱建物址	44
3 東本II次に見る炉址の遺構	45
4 東本III次における遺構と遺物	46
(1) 遺構	46
5 遺物の出土状況	48
(1) 東本II次における出土遺物	48
(2) 東本III次における出土遺物	49
6 小結	50

IV 桑原高井遺跡

1 行政的位置と発掘経過	53
2 地理的環境(東本を含む)	53
3 歴史的環境(東本を含む)	55
4 発掘日誌	56
5 遺構の概要	61
6 検出された竪穴式住居址遺構	64
(1) 1号竪穴式住居址	64
(2) 2号 " "	65
(3) 4号 " "	65
(4) 5号 " "	67
(倉庫状遺構)	67
7 土壙状遺構と土壙墓遺構	67
(1) 土壙墓遺構	67

(2) 土壙墓遺構と火葬墓遺構	68
(3) その他の遺構(粘土採集遺構)	75
8 検出された遺物	75
(1) SB01の出土遺物	75
(2) SB02の出土遺物	79
(3) SB03の出土遺物	82
(4) SB04の出土遺物	83
(5) 土壙状遺構出土遺物	83
9 若干の考察	85

挿 図 目 次

第1図	浮穴遺跡発掘区全測図	3
第2図	発掘区土壤断面図 1	4
第3図	E W走向の土壤断面図	5
第4図	1号土壤墓実測図及び断面図	6
第5図 A	TPs(土壤墓)断面図及び平面実測図	7
B	3号土壤墓平面断面実測図	9
第6図	荒神堂遺跡発掘区全測図	17
第7図	発掘区地山面(遺構)の地形実測図	18
第8図	1号竪穴住居址平断面実測図	19
第9図	土壤墓遺構の遺物出土状況と平断面実測図	20
第10図	土壤墓1号E-W断面図	22
第11図	土壤墓1号の上部遺構実測図	22
第12図	土壤墓2号の遺物出土状況実測図	23
第13図	2号土壤墓断面実測図	24
第14図	2号土壤墓平面実測図	24
第15図	3号土壤墓の遺物出土状況実測図	25
第16図	3号土壤墓の遺物出土状況と平断面実測図	26
第17図	土壤状遺構内の出土状況と断面実測図	28
第18図	出土遺物実測図 ①	29
第19図	" " " ②	32
第20図	東本II次発掘区全測図	38
第21図 A	1号竪穴式住居址平断面実測図	39
第21図 B	1号竪穴式住居址 A-A'断面図	39
第22図 A	E-W地層断面図	41
第22図 B	" " " B-B'断面図	41
第23図	2号竪穴式住居址平断面実測図	42
第24図	土壤状遺構平断面図	44
第25図	出土遺物実測図	45
第26図	東本III次竪穴式住居址平断面図	47
第27図	住居址内の土壤状遺構断面図	48
第28図	桑原高井遺跡発掘区遺構全測図	61
第29図	1号竪穴式住居址の平断面実測図	62

第30図	2号竪穴式住居址の実測図	63
第31図	2号竪穴式住居址の断面実測図	64
第32図	4・5号竪穴式住居址の平面実測図	66
第33図	溝・土壙状遺構の実測図と遺物出土状況図	68
第34図	H・I区の土壙墓遺構実測図	69
第35図	溝状遺構と土壙状遺構の実測図	70
第36図	土壙墓・土壙状遺構の断面実測図	71
第37図	土壙墓・土壙状遺構の平面実測図	72
第38図	A・焼土遺構と小規模な掘り穴遺構、B・TPsと火葬墓断面図	73
第39図	土器実測図 ①	74
第40図	" ②	76
第41図	" ③	78
第42図	" ④	80

図版目次

Map I	波賀部前方後円墳付近の地形図と遺跡				
Map II	天山遺跡周辺の地形図と遺跡				
Map III	三島神社前方後円墳付近の地形図と遺跡				
図版1図	発掘状況 1		浮 穴 遺 跡 1	全景と構造遺構	
図版2図	遺物出土状況	" 2		合口壺棺の出土状況、他	
図版3図	発掘状況 2	" 3		全景と合口壺棺採集後の状況	
図版4図	土壤墓 その 1	" 4		合口壺棺の状況 1	
図版5図	" その 2	" 5		" "	2
図版6図	" その 3	" 6		" "	3
図版7図	" その 4	" 7		" "	4
図版8図	柱穴の出土状況 1	" 8		柱穴No.1～No.3とその他	
図版9図	" " 2	" 9		柱穴No.4～No.9の状況	
図版10図	遺構検出状況		荒 神 堂 遺 跡 1	グリッドと遺構検出状況	
図版11図	土壤墓出土状況	" 2		土壤墓No.2・No.3の状況	
図版12図	土壤状遺構の出土状況	" 3		1号土壤と土壤状遺構と土器	
図版13図	土壤内の遺物	" 4		1号土壤での出土遺物	
図版14図	土壤墓の上部遺構	" 5		土壤墓No.1・No.2の状況	
図版15図	粘土桶の状況	" 6		土壤墓No.1の粘土桶	
図版16図	土壤墓内の遺物(1)	" 7		土壤墓No.1の下部遺構の状況	
図版17図	" " (2)	" 8		土壤墓No.2の壺棺出土状況	
図版18図	" " (3)	" 9		土壤墓No.3の遺物	
図版19図	住居址と出土遺物	" 10		竪穴住居址No.1と遺物状況	
図版20図	遺 物 1	" 11		土壤No.1・土壤墓の遺物	
図版21図	" 2	" 12	" "		
図版22図	" 3	" 13	" "		
図版23図	発掘区全景		東 本 遺 跡 1	1号・2号住居址	
図版24図	1号竪穴式住居址 1	" 2		1号の周溝と遺物の状況	
図版25図	" " 2	" 3		1号住居の細分の状況	
図版26図	炉址の状況	" 4		特殊な炉址遺構	
図版27図	柱穴の状況	" 5		柱穴の状況	
図版28図	1号住居址の柱穴状況 1	" 6		"	
図版29図	" " 2	" 7		周溝と柱穴	

図版30図	"	"	3	"	8	柱穴と出土遺物
図版31図	竪穴式住居址の出土状況	東	本	遺	跡	9 竪穴式住居No.3の状況
図版32図	遺物出土状況			"	10	住居址No.3の遺物出土状況
図版33図	遺 物			"	11	塊形・壺形・甕形土器
図版34図	発掘区全景			桑原高井遺跡	1	全景と1号・2号住居址
図版35図	発掘状況			"	2	住居址と溝遺構
図版36図	遺構の状況			"	3	溝遺構と土壙墓
図版37図	遺構と遺物1			"	4	住居址と遺物
図版38図	"	"	2	"	5	2号床面の遺物と2号住居
図版39図	遺構の出土状況と遺物			"	6	1号住居址と遺物
図版40図	遺物の出土状況			"	7	2号住居周辺部の遺物
図版41図	遺構と遺物の状況			"	8	土壙墓と溝・遺物の出土状況
図版42図	土壙墓と遺物			"	9	土壙墓と遺物
図版43図	遺構の出土状況			"	10	3・4号住居址
図版44図	粘土採集遺構			"	11	瓦粘土採集地の採集痕遺構
図版45図	遺 物 1			"	12	支脚形・浅鉢形土器
図版46図	"	2		"	13	浅鉢・壺形・支脚形・香炉形土器
図版47図	"	3		"	14	塊形・壺形・甕形土器
図版48図	"	4		"	15	" "

浮 穴 遺 跡

I 浮穴遺跡

1 行政的位置と発掘経過

本遺跡における行政的位置は、松山市森松町832番地であり、北緯33度47分44秒と東經132度47分13秒の交差する位置にある。地域は松山市立浮穴小学校敷地内である。同校の給食センターの改良拡張工事に伴う緊急調査を実施したものである。

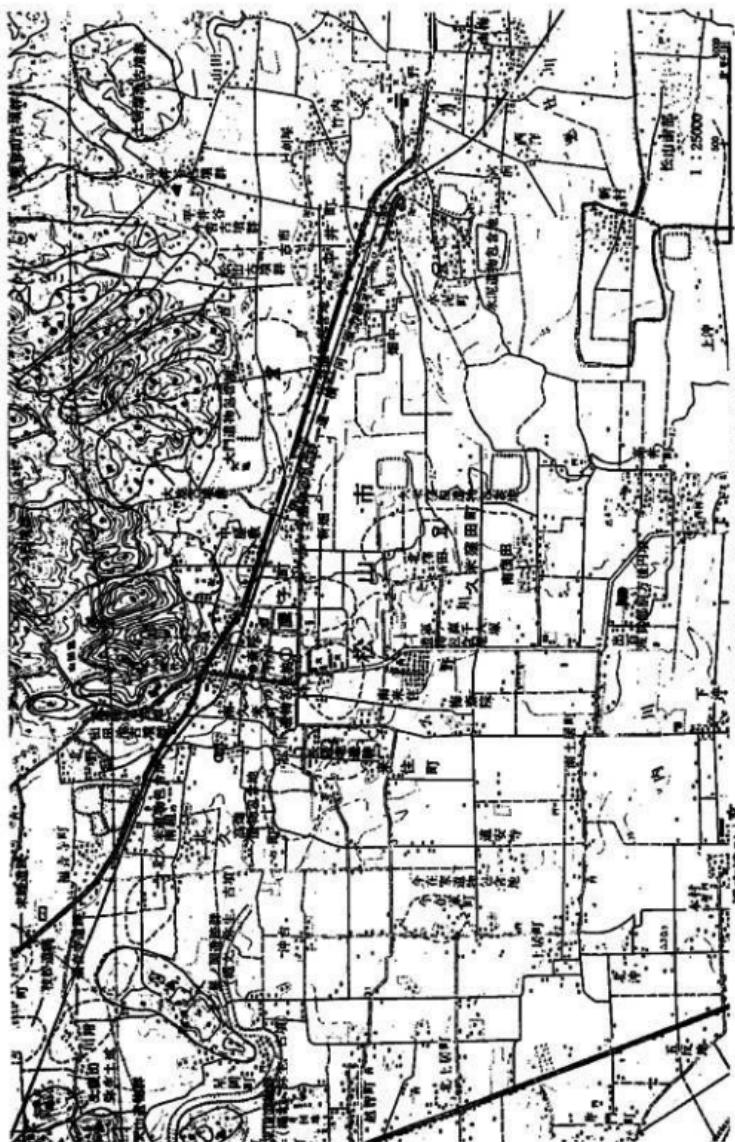
調査は、昭和52年7月27日より8月7日までの12日間で実施したものである。

調査対象面積は15m×20mの300m²である。調査対象地域が運動場であるために、小学校の夏期休暇と平行して実施され、作業の安全と工事の日程から、センターの拡張面積部分において調査を実施した。

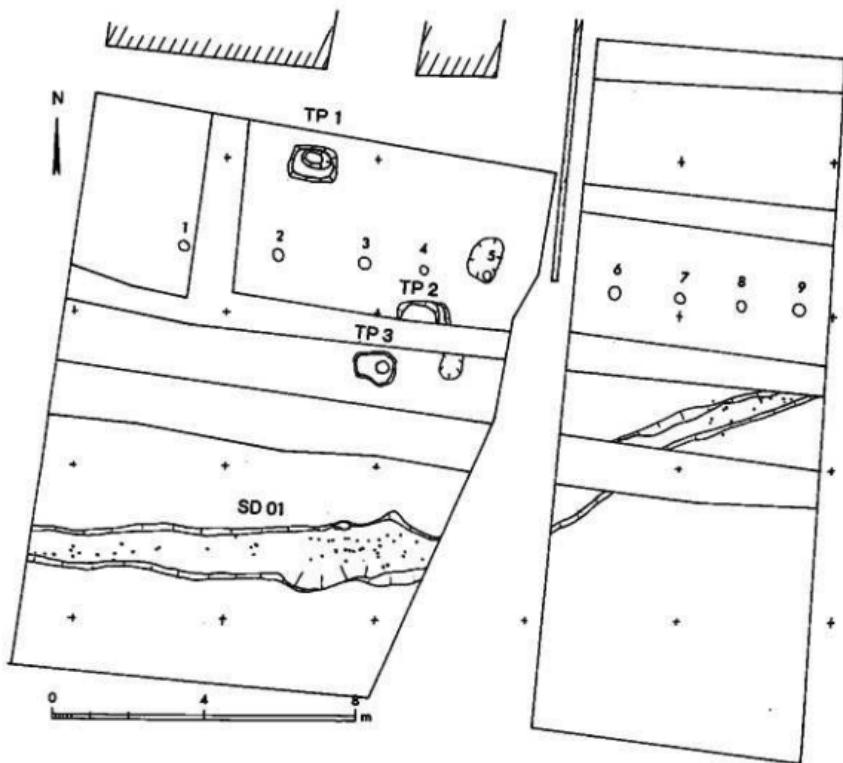
2 地理的環境

浮穴遺跡は、重信川を主流とする右岸にあり、北面には内川をはじめ、小野川及び堀越川が、重信川に平行して西流する地域に所在する。小野川の源流である小野谷の山麓部から、鷹ノ子及び来住町一帯に広がる洪積台地は、西延して星ノ岡独立丘陵(75.0m)へと続き、この洪積台地の南端部を大きく右回しながら、星ノ岡独立丘陵の南麓部を西流したのち、天山独立丘陵の南麓部で、東野谷に源流をもつ川付川と合流したのち、石手川と和泉・市坪で再び合流する。これら四国山脈より分岐した丘陵は、観音山(518.3m)から桧皮岬を経て芝ヶ岬(282.2m)へと起伏を減じたのち、起伏は急激に減じ洪積台地の北久米を経て星ノ岡丘陵に及ぶ。この丘陵部の山麓一帯に広がる洪積台地端部には、数多くの泉が扇状に点在する。

洪積台地の南端部を右回する小野川より、重信川に至る地域は両河川による氾濫源であり、最近までは毎年の如く冠水状態になることも多く、また数年に一度は洪水の憂き目を見ている地域もある。昨今では堤防の工事も進み洪水の恐怖はなくなったものの、内川そのもの



浮穴遺跡 Map I 波賀部前方後円墳付近の地形図と遺跡



第1図 浮穴遺跡発掘区全剖面図

は、重信川の河床より低く一雨増水の河川である。これらの地域内に点在する島状の微高地に、現在、弥生後期以降の集落及び祭祀址・墳墓地等の遺構が発見されるようになり、沖積平野部における遺跡の広がりが把握されるに至った。

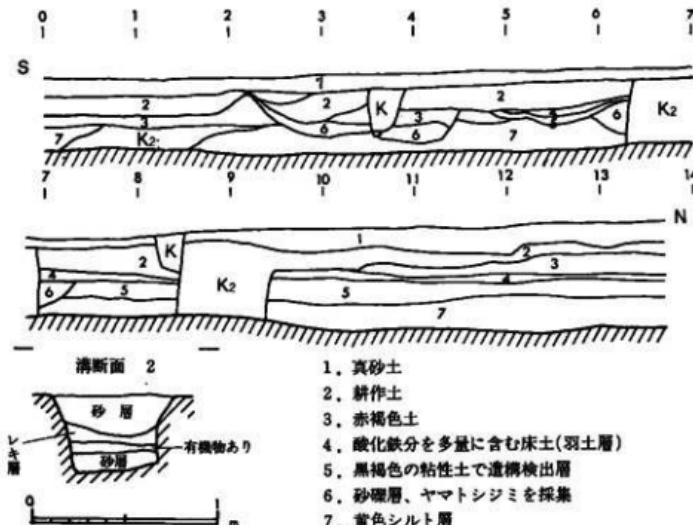
3 歴史的環境

浮穴遺跡は、重信川(伊予川)の右岸に広がる遺跡である。重信川右岸に平行して西流する内川との間に発達した遺跡であるが、高井の波賀部前方後円古墳(波賀部の大塚)を中心とする。周辺部には、かつては小規模な円墳が造られていたが、現在はそのすべてが耕地整理等の土地改良により、その姿を消している。耕地の片隅に点在する小祠は、いずれもこれらの塚が縮小されたものである。また、同遺跡の北方約100mには中ノ子廐寺がある。中ノ子廐

寺には数個の礎石を残す以外には、その痕跡を残さない程に地面は削平され耕地化している。僅かに神社が建立され、方50mが社内として残されている。

この庵寺を取り囲む形で數多くの塚が存在していたものと推察される。数年前に農道と灌漑用水路拡張工事中に発見された遺構によれば、木棺直葬による土壙墓で、幅70cmと長160cmのもの、幅50cmと長140cmの小規模な遺構であり、副葬品としては、二個の須恵器の环が出土しているが、いずれも8世紀初頭頃に同等される奈良期の遺物であった。

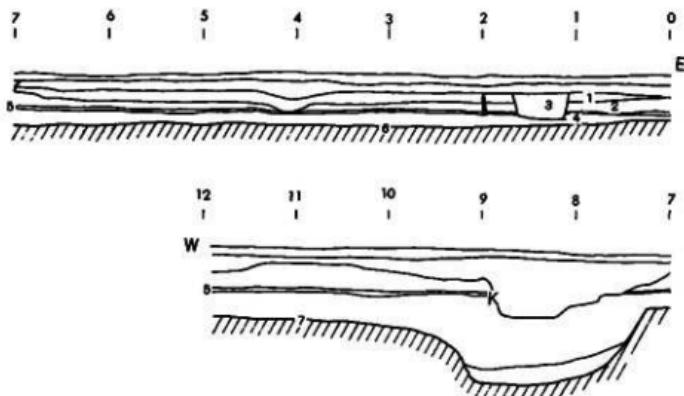
以上、周辺部の遺跡について記述したのであるが、浮穴遺跡は極めて小範囲に、しかも重信川と内川の両河川に挟まれた、帯状に長くしかも、分断された微高地形に残る遺構であり、また周辺部に広がる遺構は、いずれも弥生時代後期以降に営まれたものが中心となつておらず、この地域における文化遺物からして、沖積地への開発経過を知る貴重な遺跡であり、松山平野の発展推移を察知する遺跡でもありうる。



第2図 発掘区土壤断面図1

4 検出された遺構(第1図)

- 調査対象区内で検出された遺構は、大きく3区分される遺構であった。
1. 弥生後期の時期に同等される、複合口縁の大型の壺形土器を埋設した土壙墓
 2. 調査区内を東より西に流路を上る、溝状遺構を検出
 3. 旧校舎の柱列並びにそれに付属する廊下の一部を検出したが、3の遺構については、明治以後の遺構であるため、本報告書では3の遺構についての詳細は割愛し、1の遺構と2の遺構についてのみ記述するにとどめたい。



第3図 EW走向の土壤断面図

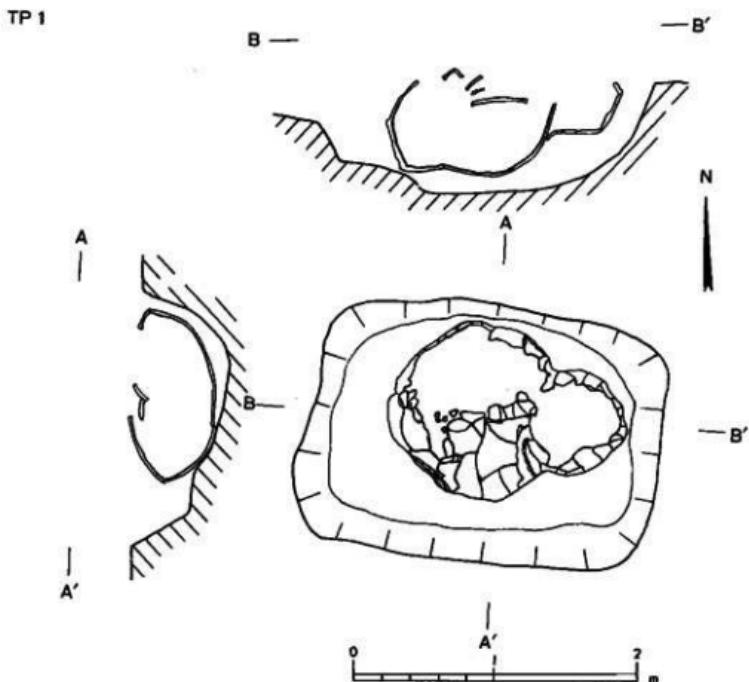
(1) 柱穴列遺構

発掘区は、浮穴小学校校庭の南西の隅で約南北15m、東西20mの約300m²である。検出された遺構は第2図の土壤断面図に見られる第5層で検出されたものである。遺構の基盤面である第7層は、黄色粘土層であるが、所々にシマ状に乳白色のシルト層を含む。シルトの層は厚い所で70cmを計測した。溝状遺構及び土壙墓は、このシルト層内で検出された。

発掘区内を東西に4条の擾乱層が検出されたが、これらの擾乱層は第2、3図にみられるK地点であるが、内にはK₂で示す地点で、第7層のシルト層に掘り込まれており、明らかに後世における遺構に関連のある掘り方と見られP₁～P₉の柱穴に関係するものと推察された。P₁～P₉の素掘の柱穴は、図版第8図及び第9図に見られるもので、柱穴の周囲には、粘土と礫岩でもって叩きしめが見られ、柱穴は見事に造存していた。

(2) 溝状遺構

溝断面図2で見られる堆積土であった。堆積土の上部層である砂層には、図版第2図の3に見られるヤマトシジミが検出された。貝殻は実にしっかりとおり、前述の柱穴を穿った時期まで、清流が見られたものであろう。溝幅は最大1mで、上流部では狭まった流路である。溝の両岸(法面)には、第1図に見られる群杭が打ち込まれている。流路を東北東より西流する曲折点付近では、西岸の開析が大きく、柱列よりはるかに広い川幅となっている。溝(小川)の床面よりの堆積層は図に示す堆積層序であるが、検出されたヤマトシジミは、いずれも川の堆積砂層の上部第1層中より検出され、他の層序からは貝殻を検出することはできなかった。このことにより、これらのヤマトシジミは生きた状態で埋蔵されたことが推察される一方、小川には清水が流れていたものであろう。



第4図 1号土墳墓実測図及び断面図

(3) 土壙墓遺構

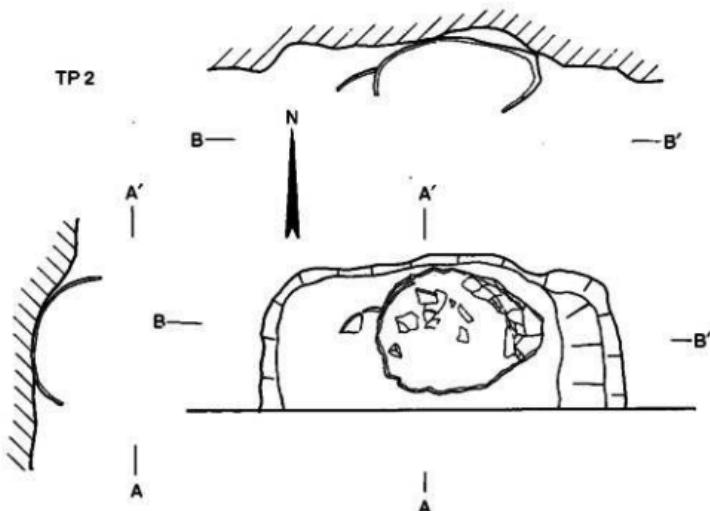
本遺跡で検出された遺構中最大のものである。土壙墓は3基検出されたが、いずれも大型の壺形土器と壺形・深鉢形の土器で蓋をするという、合せ口の壺棺埋葬方法を探るものである。

1号土壙墓 (TP1)～第4図

第4図に示すTP1は、主軸方向を東西に採った、合せ口の壺棺埋葬墓である。長径125cm、短径90cmの長方形の掘り方を持つ。掘り方の床面は断面図B-B'に見る有段を持つ床面となっている。また、短径部の断面A-A'においても有段の掘り方となっている。壺棺の埋葬位置と掘り方の位置関係から推察して、壺棺埋葬時における第二次的な掘り方で、壺棺を安定させる目的と補足的な掘り込みとみられる。

2号土壙墓 (TP2)～第5図A

第5図Aに示すTP2は、主軸方向を東西に採った、合せ口の壺棺埋葬墓である。第5図Aに示す遺構は、長径130cm・短径約70~60cmと推定される。遺構の南面位置が、前述の後世での搅乱により切られ不明である。TP2での壺棺の埋葬方位は、土壙墓の掘り方長軸方向と一致しているが、壺棺の頭部位置方向は、TP1とは逆の方位に埋葬されて、W面を頭部位置としている。土壙の掘り方においても、TP1とは若干異なり、第二次的な掘



第5図A TP2 (土壙墓) 断面図及び平面実測図

り込みはみられない。わずかに底部位置を座掘りする程度の掘り方を部分的に行っている。本遺構は攪乱のため、上部半部はすでに削平されており不明の部分が多く、遺構そのものが半裁された状態である。遺構断面図に見える如く、TP3の掘り方断面図より浅い掘り方になっている。

3号土壙墓(TP3)～第5図B

3号土壙墓TP3は、主軸方向はTP2と同一方向であるが、僅かに北に偏した掘り方となっている。掘り方の平面プランは、直口壺を想定させる掘り方である。掘り方の全長は、115cmと97cmとなっている。掘り方の直口の頸部を思わせる付近では、67cmと-20cmの狭まりが見られる。また長辺部側においても、壺棺の底部付近は壺の底部に合せる掘り込みが見られ、前述の壺棺に形取った掘り方となっている。床面の掘り方は水平に保たれ、わずかに棺の側部の部分を掘り込み、棺全体の安定を保つ掘り方となっていた。

5 遺 物

遺物の内、文化的な遺物は第1号～第3号土壙墓出土の大型の壺形土器と、壺棺の蓋に使用された深鉢形土器と壺形土器である。

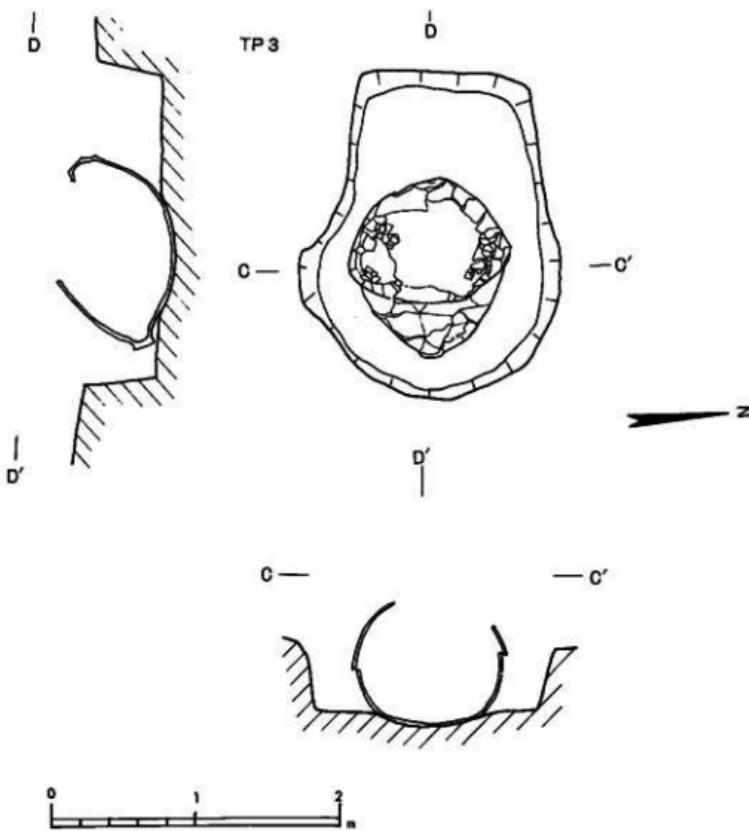
TP1の壺棺では、壺棺部をなす壺形土器は、口縁部は欠失しているため不明であるが、頸部径20cm、胴部での最大幅59cm、平底の底部径14cmで器高50cmである。全体の器形からみて底部は小さい。2.5cmと肥厚な底部より大きく外寄して立ち上がり、胴部最大径は、頸部と底部の器高に対して約6位付近にあり、すんぐりと安定感を感じる器種である。表面は櫛描きによる成形の後、へらによる磨研仕上げとなっている。内壁面は黒褐色を呈し、斜行の櫛描きによる成形で仕上げとしている。胎土中には0.5cm以内の角礫を含んでいる。壺部である深鉢形土器は口径31.5cm、器高27cmで、わずかに6cmの平底を有する土器である。内壁部は、指頭によるナデ仕上げである。器表面は、縱指向の櫛描による成形となっている。口縁部は外反し、くの字状口縁をもっている。

TP2の壺棺は、すでに蓋部は蓋部の痕跡を残すのみほどに攪乱をうけ、わずかに棺部のみ以下の中土を見ただけである。棺部をなす壺形土器は、TP1と同様の技法によるものであり、図版第5図の3に見る如く、器壁には櫛状施文具による仕上げとなっている。TP1の棺と同様に内部色は黒褐色である。

TP3の壺棺はTP2より2mと離れない位置にあり、被葬者の頭部位置も同方向に埋葬されていた3号墓である。

だが、棺の蓋部はTP1とTP2が共通しており、TP3は他の2基とは異なる蓋部であった。図版第5図に見られる如く、棺部である壺形土器に対して、蓋部である土器も同様に同器種の壺形土器を使用する点は、TP1～2と異なった埋葬方法である。

棺部は1～3号共に共通して頸部でカットをした大型の壺形土器である。蓋部は、同様の



第5図B 3号土壙墓平断面実測図

壺形土器を、胴部の最大幅を有する付近で切り、蓋部として活用したものである。

棺部をなす土器は、平底9cm、頸部径30~25cm、胴部最大径54cm、現在器高55cm

蓋部をなす土器は、平底7cm、頸部径不明、胴部最大径52cm、現在器高30cm

2号墓は上部欠失した遺構であり不明であるが、1号・3号墓に棺部の壺形土器の基底部付近に外部より打ち抜いたと見られる小穴が穿たれている。(図版第7図の3参照) 出土時に見る小穴の位置は、横転させた棺の上部位置に穿たれた状態での埋葬位置を取っている。ち

なみに、内部に充填した土壤からは、穿たれた小穴位置の小片を発見しない所から、埋葬以前に小穴は穿たれ、埋葬時に上部に小穴が位置するよう配慮された埋葬と考えられる。

底部径9.3cm、洞最大44cm、器高60cm

この土器は、内側に充填した土壤から、穿たれた小穴位置の小片を発見しない所から、埋葬以前に小穴は穿たれ、埋葬時に上部に小穴が位置するよう配慮された埋葬と考えられる。

浮図穴版遺跡

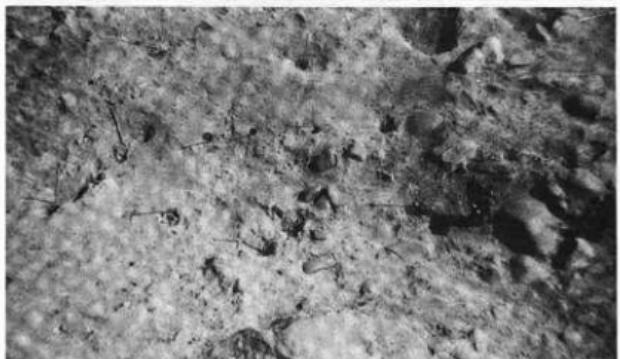
発掘前の校庭



表土下に検出された溝と後世に掘り込まれた擾乱層



溝の両面に打ち込まれた群杭と後世につきかためられた礫岩（擾乱部のつきかため）

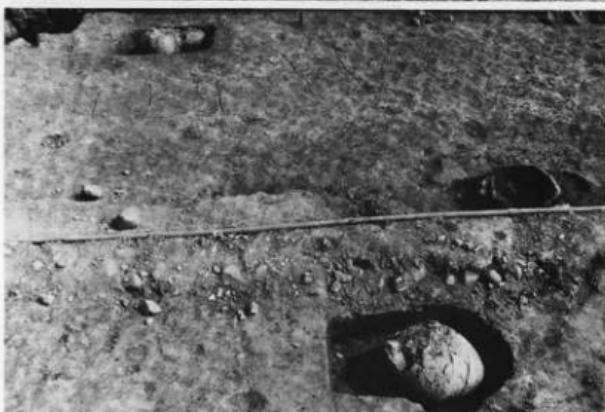


(浮穴遺跡！)

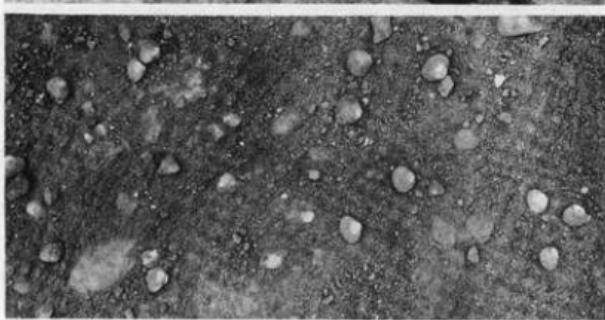
図版第1図 発掘状況1



合口壺の出土状況
W面より写す。



同遺構を S 面より
写す。
手前 TP 1
中央 TP 2
奥 TP 3



SD01 の溝状遺構
出土のシジミ貝

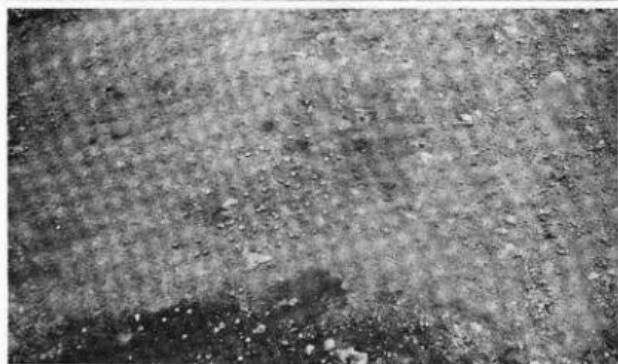
(浮穴遺跡 2)

図版第 2 図 遺物出土状況

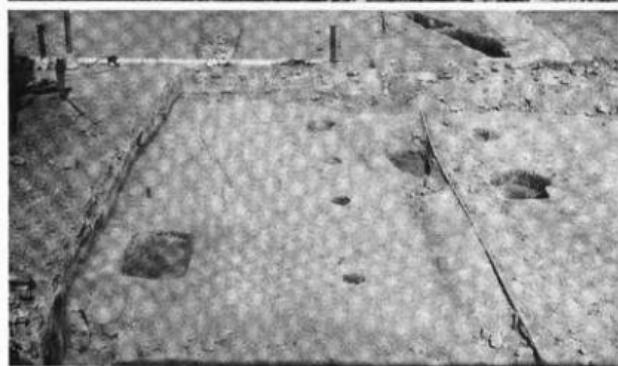
発掘区全景



溝状遺構



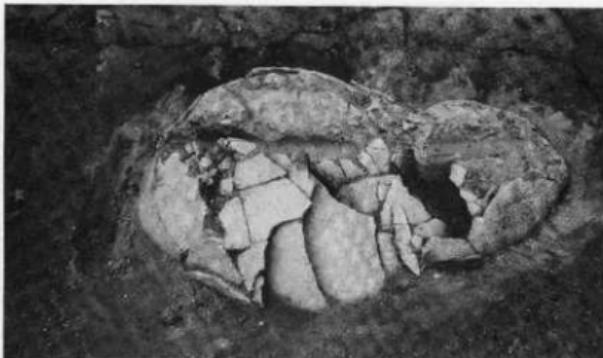
合口壺棺の採集後の遺構



(浮穴遺跡 3)

図版第3図 発掘状況 2

土壙墓(TP) No.1
の壺棺出土状況



壺棺墓の「ほりかた」
部分を掘り下
げた状況



W面より壺棺の底
部とほりかたの床
面状況



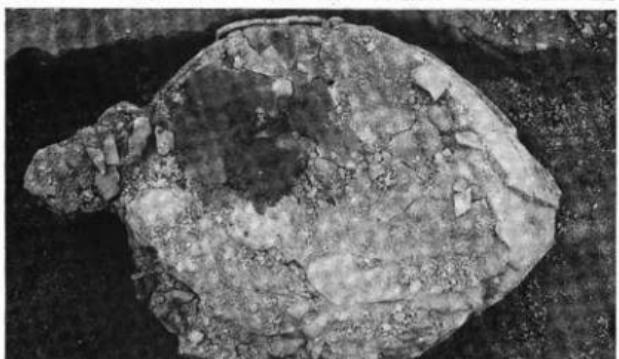
(浮穴遺跡 4)

図版第4図 土壙墓 その1

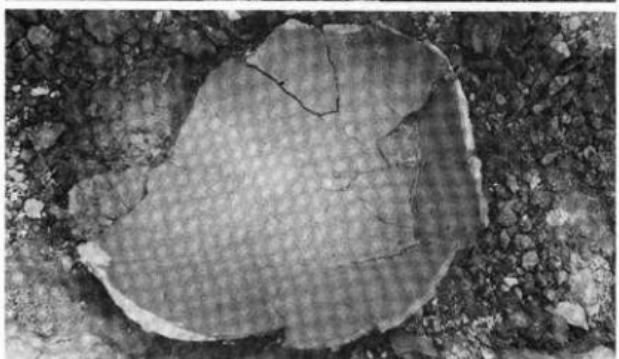
2号土壙墓
水道管埋設のため
に多少程度の造構及
び壺棺の欠損が認められた。



N面より写す。
合せ口である蓋部
は、その痕跡を残
すのみに欠失して
いる。



土器内壁面に明瞭
に残された柄によ
る成形痕がある。

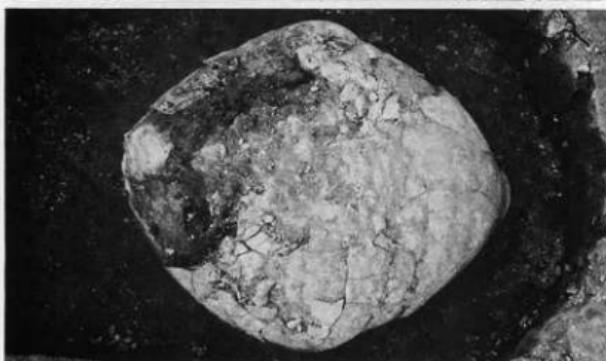


(浮穴遺跡 5)

図版第5図 土壙墓 その2



3号土塚墓
合口壺棺蓋、蓋部
である。
W面より写す。



S面より写す。
合せ口付近が遺構
のほりかた(擺方)
が最大幅となって
いる。

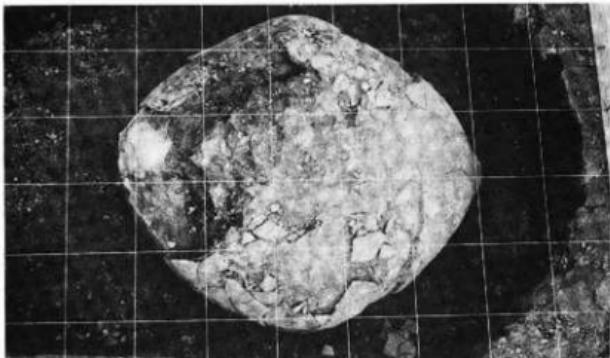


E面より写す。
蓋部が大型の壺形
土器を胴部でカッ
トした転用器物で
ある。

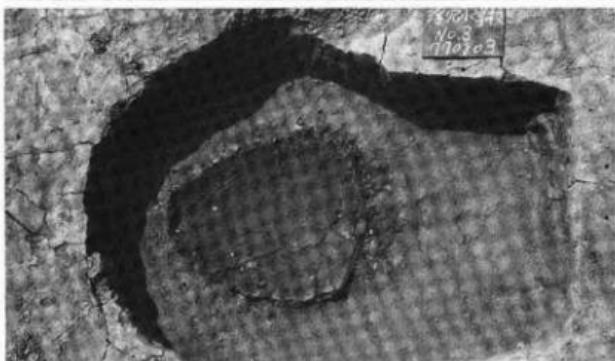
(浮穴遺跡 6)

図版第6図 土塚墓 その3

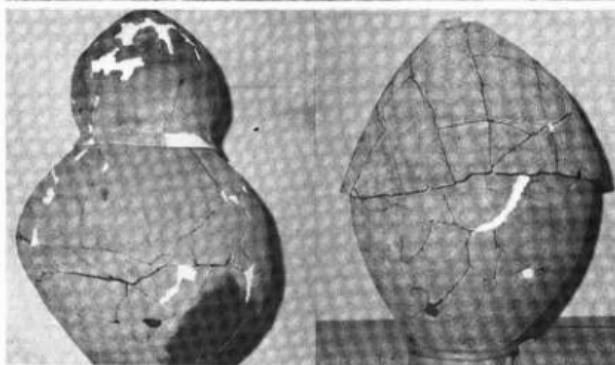
土壙墓 3 号の遠方
測量
(水糸は10cm)



底部は円形に、蓋
部(頭部)は直線的
な掘り方となって
いる。



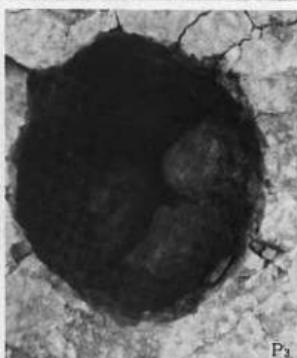
右 3号
左 1号
復元された壺棺



(浮穴遺跡 7)

図版第 7 図 土壙墓 その 4

P₁～P₉はいずれも
掘立柱建物の柱穴
である。掘り方と
柱穴、柱穴と掘り
方間の礫石、粘土、
礫岩のようすがみ
える。

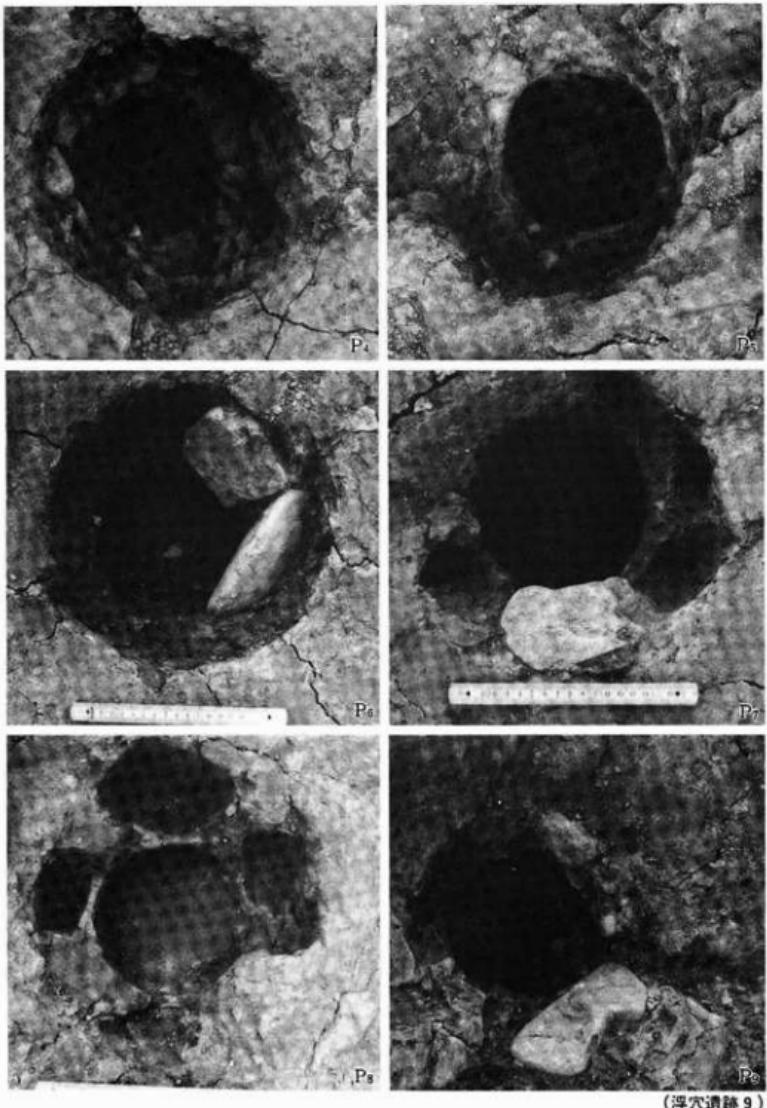


左は土壙墓1号の
遺物採集後の土壙
墓の掘方状況



(浮穴遺跡 8)

図版第8図 柱穴の出土状況1



図版第9図 柱穴の出土状況2

(浮穴遺跡9)

西石井荒神堂遺跡

II 西石井荒神堂遺跡

1 行政的位置と発掘経過

永井マンション建設に伴う発掘調査を実施したものである。行政的な位置は、松山市西石井町244番地の1で地目は水田である。絶対的位置は、北緯33度48分35秒と東経132度46分40秒の交差する地点付近である。永井社長の埋蔵文化財への关心も高く、発掘調査に際して、耕作土の排除作業をはじめ、作業小屋を建設するなどの御協力をえたことを深く感謝する。同時に記録保存についても多大の御協力をいただいたことを重ねて感謝したい。

発掘は昭和51年11月25日から12月16日の延21日間に実施された。

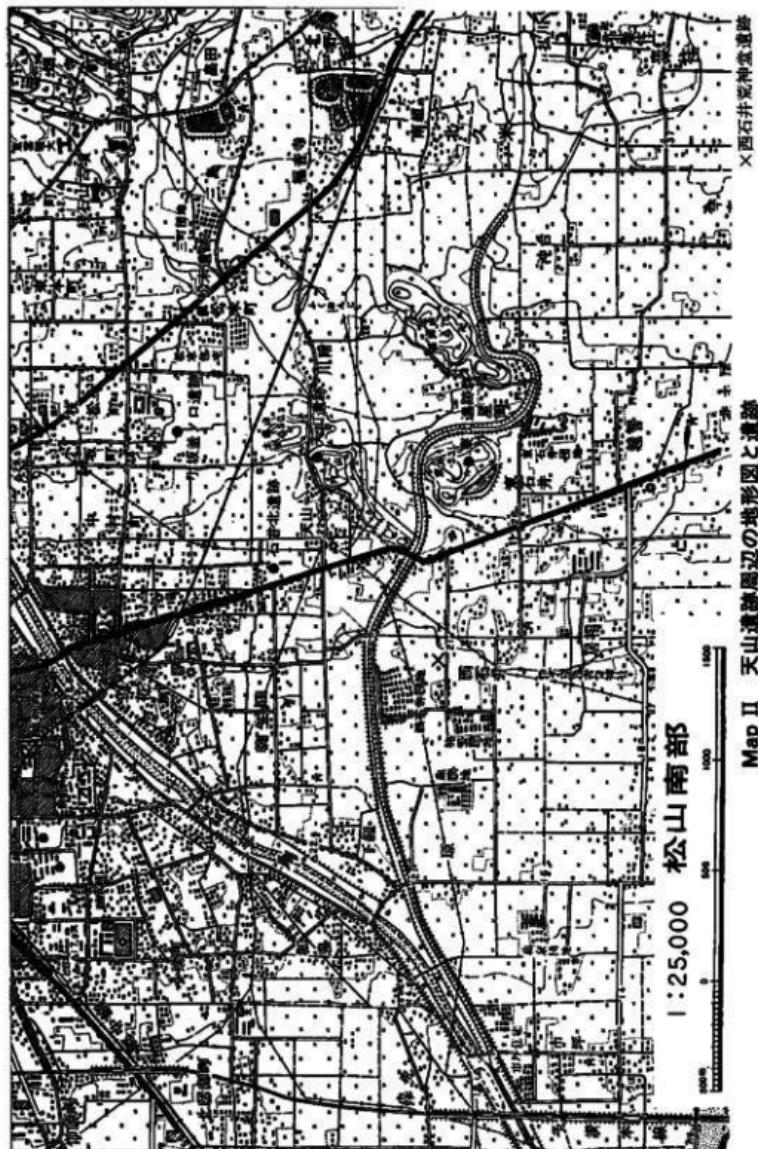
2 発掘日誌の概要

昭和51年

11月16日 火 晴 発掘対象地にπ字状のトレンチ設定、幅60cmで耕作土をユンボで掘削、トレンチ実施位置を $\frac{1}{300}$ に平板測量。

11月17日 水 晴 トレンチの地層の層序について断面部の実測図作成。層序断面は東西にA~A'を全域に取る。B~B'をA区に、C~C'をB区にて実施。

この結果により、東半分にあたる地区をA区とし、特に遺構検出の可能性が高いため、グリッド設定による発掘区とし、西半分にあたる発掘区では、S Nに走る溝状遺構がトレンチにみられるが、他の部分には包含層がなく、溝状部の調査を縮小した。調査員立会による表土剥ぎ作業。



- 11月26日 金 曇天 A区のグリッド設定、杭打ち、グリッドは4m²を取り、各々のグリッド壁を25cmの珪、計50cmのセクションベルトを取る。グリッド名は南北にA・B・C・Dを、東西に東より1・2・3・4・5を設定した。
- B Mは、国道33号線東石井(天山一級標準点)23.68mより発掘地点の海拔20m41cm8mmを得る。
- 11月27日 土 晴天 各グリッドの壁面及び残土の整備、午後より遺構検出にかかる。 a_1 より a_2 に西流する浅い溝状遺構が検出される。
- 11月30日 火 晴天 28日が雨天のため、29日はポンプアップと発掘諸準備、30日 a_2 グリッドにおいて、三日月状の土壌遺構を検出、土器片多数検出をするに至る。
- 12月1日 水 晴天 土壌遺構をSK01とし、遺物の取り上げにかかる。
- 12月2日 木 晴天 各グリッドの測量開始 ($S = \frac{1}{100}$)、遺構と遺物は ($S = \frac{1}{20}$) とする。センターは5cmで同時に測量、本日D₁・D₂とC₁とC₂の測量。
- 12月3日 金 雨後曇 古照資料館にて出土遺物清浄、測量図点検
- 12月4日 土 晴 B₅・C₅・D₄・D₅の検出作業、SK01の掘り下げ
- 12月6日 月 晴 全測及び遺構測量の実施 (B₁・C₁・B₂・C₂・D₂)、遺構検出作業グリッド (B₅・C₄・D₃・D₄・D₅)、遺物の取り上げ作業 (D₃)。



(西石井荒神堂遺跡調査風景)

- 12月7日 火 晴 D₃グリッドを S = $\frac{1}{10}$ で測量、L = 50で遺物採集、土壤墓(TP2)に発展する。B₂・A₂・B₃の遺構測量、A₃で竪穴住居SB01を検出、手・足骨・土器・瓦等の炭化植物遺体の測量。
- 12月9日 木 曇天 TP2のE-WとN-Sの断面測量、S = $\frac{1}{10}$ (平板測量)と遠方測量を併用し後日参考とする。D₄・D₅・C₄・C₃の遺構測量。
- 12月10日 金 曇後雨 測量班を残し、古照資料館で遺物整理。
- 12月11日 土 晴 D₄にて検出のTP4完了、D₅・D₄の測量 S = $\frac{1}{20}$ ・S = $\frac{1}{100}$ 完了、D₃・C₃・C₂での遺構測量。
- 12月12日 日 晴 各グリッドのセクションベルト排除作業
- 12月13日 月 曇後雨 TP3の断面層序計測、TP3の検出続行(集石、炭化物あり)。
- 12月14日 火 晴 TP3の検出作業続行、A₂のSK01の遺物と構造の検出作業を続行、B区の溝遺構の測量完了。
- 12月15日 水 晴 TP3の(S = $\frac{1}{100}$)測量、TP2の蓋付壺棺取りあげ、SB01をA₄での柱穴と壁面の検出作業、壁面と周溝を確認した。
- 12月16日 木 小雨 各遺構の最終測量を実施し、調査を完了した。



(西石井荒神堂遺跡発掘状況)

3 環 境

自然的環境

西石井荒神堂遺跡は、国道33号線を立花町より南進した僅か1.5 km付近で、松山平野の南部に点在する独立低丘陵（残塊）の天山・東山・星ノ岡・土麿山に近い。国道33号線に架る天山橋は、あたかも小野谷を発した小野川と東野丘陵に源流をもつ川付川の合流地点でもある。小野谷の山麓地帯に扇状地を形成した小野川は、扇状地形南端久米塙田付近で流れを西流にとる。久米及び来住町に広がる洪積台地の南端部を開析したのち、来住町付近では右回し西端部を回春して、星ノ岡低独立丘陵の南面を西流し、ふたたび大きく右折してのち西流し、天山独立丘陵と東山独立丘陵の両岸をうがって天山橋に出る。流水が増せば一夜にして天山丘陵東麓一帯（川付・竹ノ下・星ノ岡町）の団地は冠水し大きく蟠流したのち、天山橋へと渦流したのち市坪付近で再び松山平野二大河川の1つである石手川と合流して、水勢は更に増して一級河川である重信川に合出で合流し伊予灘に注ぐ。

砂礫層を有する沖積平野である重信川と小野川流域の中間位置を西流する内川がある。内川は川内町日吉谷に源流する河川でやや重信川に偏して西流し、松前町中川原付近で重信川と合流する河川である。だが、当地域は水利の便が悪く、古くは東山丘陵の西山麓面に溜池をもつ他、多くの泉による地下水の汲み上げによる農業用水にたよる他は、井門町における内川水利が主たる農業用水として活用された。

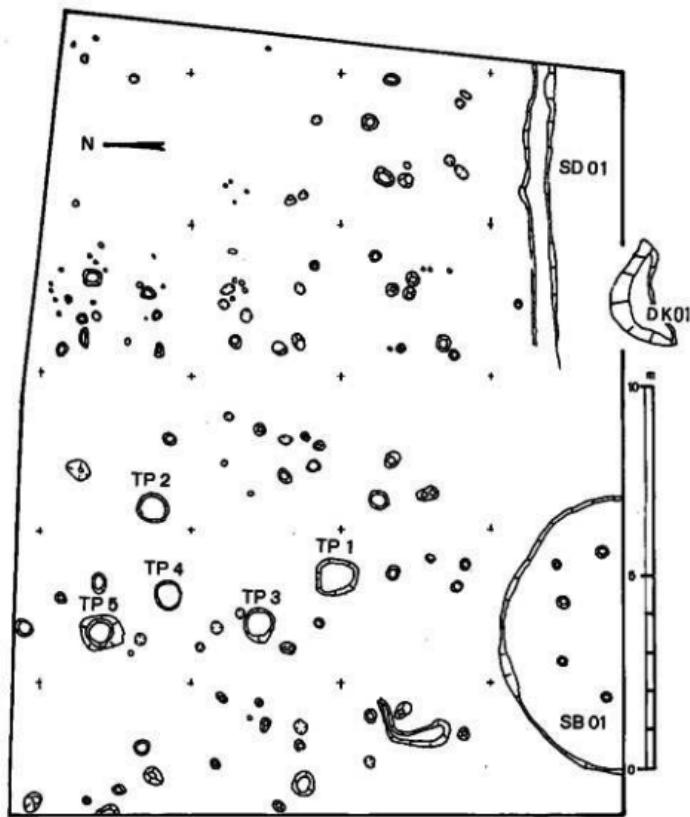
前述の如く砂礫の多い耕作土の上にシルト層は薄く、しかも細砂まじりの砂質粘性土が、耕作地の基盤面をなすため吸水性が大きく、しばしば水争議が発生したとの記録も多い。

だが水田耕作地としての土質はよく、現在にいたるも水田地帯として利用され畑作地は少ない。ただ昨今では宅地化へと地目変更が激しい。地目変更が進行する内でも、主たる耕地利用は水田耕作地である。

歴史的環境

伊予風土記逸文に伊予の三山と呼ばれる天山・東山・星ノ岡は、当遺跡とは直線で僅かに南方500mの位置にある。古くから大和朝廷とのかかわりあいがしのばれるが、これら三山には旧石器の遺物をはじめ、縄文時代の土器や石器が採集されている。だが、これらの遺物の時代に相当する遺構についてはまだ検出されていない。しかし弥生時代の遺跡は、これらの丘陵をはじめ山麓周辺部全域から発見されており、今日までに発掘調査を見た遺跡も多く、特に弥生時代前期の合せ口壺棺を出土した松山市立東石井小学校（越智遺跡）をはじめ、天山独立丘陵の西端部に位置する天王ヶ森では弥生時代中期より後期にかけての土塙墓が検出されている。しかも天王ヶ森遺跡は弥生時代に円形に地山を削り出した円形台状墓を、古墳時代には当遺跡を占地して天山二号墳が造営されていた。また同丘陵の東端部では、天山一号墳があり、一号墳からは神獣鏡が出土している。更に東山丘陵ではかっては、愛媛ハイツとして開発された丘陵部に少なくとも6基、53年度開発にともない発掘調査が実施され検出された古墳は8基、現在緑地公園として保存されている部分に14基の開口せる古墳がある。また星ノ岡丘陵上には、現在確認される保存良好な古墳が17基がある。しかるにこれらの地域での戦前、戦後の諸開発行為により破壊された文化財は實に多い。またさらに三丘陵の山麓地域にも塚と呼称される直径10m以内の小円墳がかつては群集していたが、現在はことごとく墳滅し、僅かに星ノ岡町に1基、福音寺、川付付近に3基、天山町の墓地に1基が平野部に残されている。これら平野部における古墳の造営は半地下式のものが多く、古墳時代の後期から終末期のものが多く見られる。ちなみに荒神堂遺跡周辺部においても、3基の横穴式石室があり戦前に墳滅したことである。また前述の越智遺跡からも円形周溝をともなう古墳が2基検出されており、古老の伝える處では7基の古墳があったという。

遺跡の南面に広がる沖積平野には、弥生時代から古墳時代の遺跡が広がっており、居相・土居・古川・南土居・南中・椿遺跡が、また東面には三山の遺跡群の他に、星ノ岡・北久米・前川・来住・高畠・筋違遺跡が、北面には天山北・小坂・中村・朝生田遺跡と實に多い。これら遺跡の広がりはさらに三山を囲む位置に点在する奈良・平安時代の廃寺においても同様に、国指定の来住廃寺をはじめ、中ノ子・朝生田・中村廃寺が指呼の内にある。また式内社の伊豆比古命神社は氏子社である。

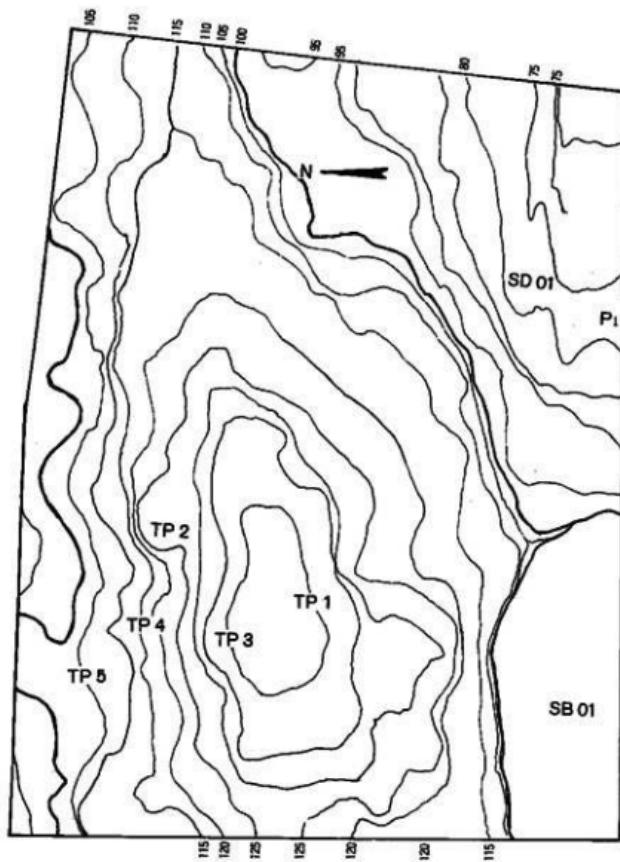


第6図 荒神堂遺跡発掘区全測図

4 検出された主な遺構

主要な発掘調査区としてA区とB区を設定したが、B区は後世の氾濫により遺構面を僅かに残すのみの状態であったため、本報告書では割愛し、A区における遺構についてのみ報告をしたい。A区は南北15m、東西20mの約300m²が対象面積である。

発掘区全域より大小様々なピットを検出しているが、明らかに構築物等を推考しうる遺構には乏しく、第6図に示す出土状況であった。これらの内、特に注意をひく遺構に土壙墓遺構がある。土壙墓遺構は、発掘区内で5基を検出しているが、5基はいずれも埋葬状況及び埋葬形態を異にするものである。その他に竪穴式住居址1基が検出されたが、住居の全

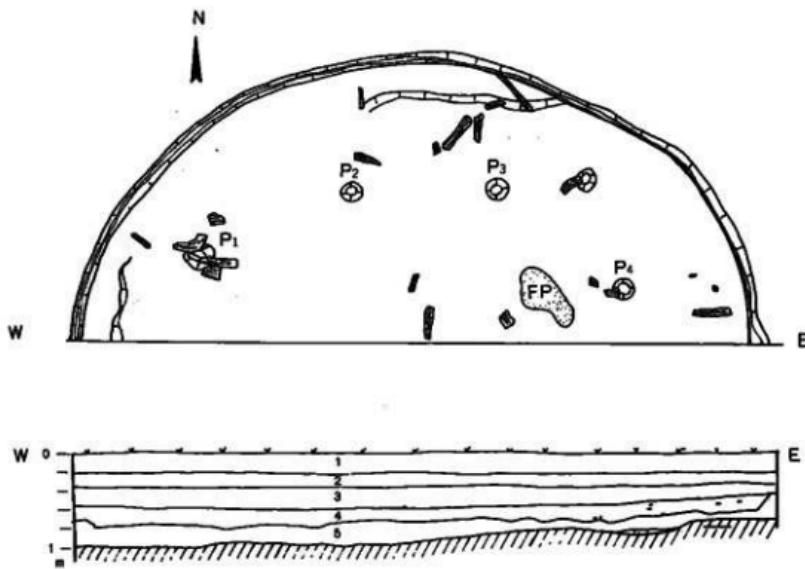


第7図 発掘区地山面(造構)の地形実測図

既に発掘区域上不可能であった。この竪穴住居址の東方4m位置で貯蔵穴を1基検出したが、この造構とて発掘区をややはずれる位置であったが、施工主の好意により調査が実施された。その他に溝状造構1溝が検出された。(第6図参照)

(1) 竪穴式住居址 (SB01)

竪穴式住居址は、第6図に見る位置に竪穴式住居の1/6部分を検出した。他の部分は発掘調査区外にあり、調査不可能であった。造構は第8図で示すごとく、住居内の床面よ

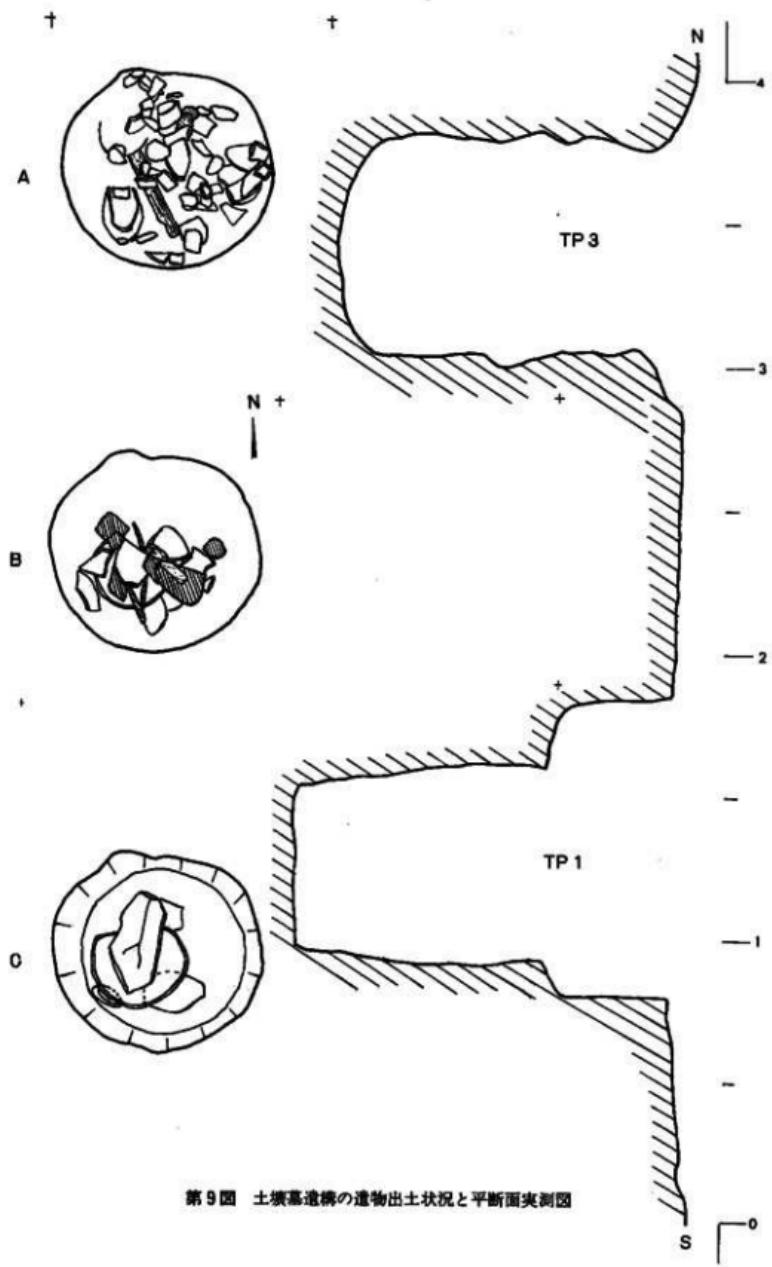


第8図 1号竪穴住居址平断面実測図

り多量に木材の炭化遺体を検出した。この炭化遺体により火災により廃絶した家屋と見ることができる。竪穴式住居は、直径6mの円形竪穴式住居である。竪穴の壁面には、浅い貧弱な周溝をめぐらしている。検出された柱穴は4個である。これら検出された柱穴の心心間距離はP₁～P₂で145cm、P₂～P₃で130cm、P₃～P₄で140cmが計測される。以上の数値が示す心心間距離の公約数を130～145cmとして一巡させた場合、P₁～P₄の柱穴が壁面からそれぞれ1m間隔の位置に穿たれていることも考慮して合計9本の柱穴が算出される。P₁～P₄の柱穴の直径は20～15cm以内のもので、割合に小振りな柱穴である。柱穴はいずれも50～60cm、地山に掘り込まれた素掘りのもので、柱穴の底部は礫層に達した掘り込みがなされている。

柱穴P₄の側に焼土があり、炉址と見られるが灰層も薄く、中央位置に更に1個所検出される可能性がある。

断面E-Wに見られる第5層はシルト層であり、このシルト層に掘り込まれた住居である。ちなみに断面の層序は、1は耕作土壌である。2は有機物の混入の多い茶褐色土層のB₁層である。3は酸化鉄分を含む円碟と砂層が混入した赤褐色土層B₂層である。4は黒褐色の火山灰土を含む文化遺物層である。5は黄褐色のシルト(粘土)層で、所により乳白色のシル



第9図 土壌墓遺構の遺物出土状況と平断面実測図

トを混入した層序となっている。6はC層の砂礫層である。第5層はAではかなりの層厚を持っているが、B区では殆んど消滅すると共に、4層も殆んど認められないまでに消滅する。

(2) 土壌状造構と土壌墓造構

土壌状造構としての最大規模のものとしてDK01と、土壌墓造構としてのTP1～TP5までの5基を検出した。内でも土壌墓造構は、各々特色をもった造構が検出された。特にTP1、TP2、TP3は本遺跡で特筆すべき造構であろう。これらの造構の規模はほぼ同一規模であるが、墳墓の埋葬形態に変化がそれぞれに見られた。特に紙面の都合もあり、特色のある3基についてのみ記述するにとどめる。

1号土壌墓 (the pit = TP1)

TP1号は、第9図に示すものと第10図及び第11図に図示する造構である。TP1号は上部造構と下部造構の複合造構である。それ故に埋葬時期を異にする造構と判断されることから、上部埋葬造構に先行する下部埋葬造構から記述する。

TP1は直径70cmの円形土壌墓で、地山であるシルト層を140cm掘り下げている。この掘り下げは完全にG層である砂礫層に達する掘り込みとなっている。

第9図のA・B・Cは、TP1における遺物の出土状況図である。Aは深度60～70cmにおけるものである。これらの造構の中には、斜線で示す植物遺体（木片）の出土がある。その他の遺物は土器類の破片であった。Bは深度80～100cmの遺物で、斜線をほどこすものは石である。その他は土器で中央に大きく円を描く遺物は、大型の壺形土器である。Cは100～140cmの最下部で検出された大型の壺形土器の破片である。

以上A～Cの遺物出土状況の内、70cmから80cm位置では完全に無遺物層で、しかも粘土の層が充填していた。また、Aの遺物包含層の上部は、下部造構が判別できない程に粘土でもって密閉されており、わずかに土壌墓の壁面に黒く円周を描いた汚染層がみられ、下部に造構が存在する可能性ありと判断し得た程に、粘土による密閉がほどこされていた。しかも粘土層は固く踏み固められた状態にあり、同下部造構内へ10～15cmの踏み込みがみられた。

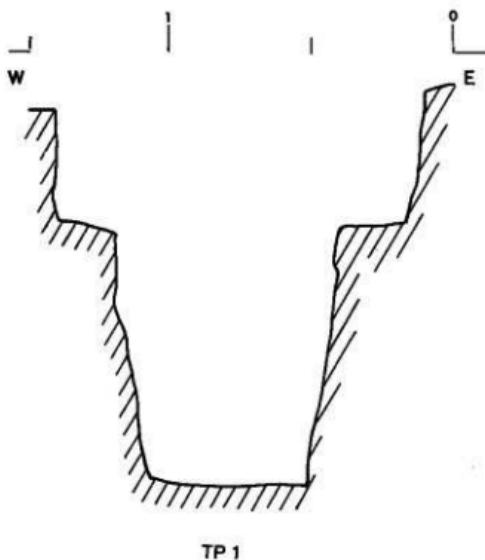
また、土器の出土を見たA断面の状況とC断面における遺物とは完全に遺物が異なると同時に、いま一つ、AとBとの中間層に明らかに両者を隔離する意図的な埋葬行為が推測された。すなわちAとB層の中間に明らかに粘土による密閉があり、この密閉層となっている粘土内からは遺物の包含はなく、しかも汚染されることのない純粋な粘土で閉塞されていた。

また、B層とC層の埋積土は共通しており、所々に黄褐色のブロック層を含むとともに、出土する遺物はこれまた同様に復原しうる同一遺物であるという共通性が認められた。BとCは同一遺物であることは前述したとおりであるが、A・B・C層共に、上部造構の造営時に何等かの行為が意図的に、または無意識的に行われたものと推測される。

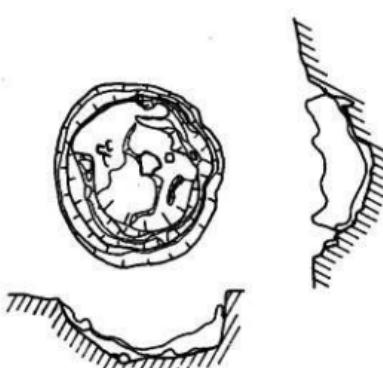
第12図に見られる上部遺構當によると、上部50cmの地上削平行行為は、少なくとも下部遺構に対する重圧行為が考えられると同時に、下部遺構の閉塞行為が前述のA包含層の上部に10~15cmの粘土層があり、これと加えた粘土の層厚は、上部地山削平部分を加算する時60~65cm厚の粘土による閉塞行為が考えられる。

上部遺構は、第11図にみる粘土構造遺構である。遺構の最終段階での掘り方は、第10図及び第11図に見る断面図での計測値はSNでは100cmであり、EWでは140cmである。平面での掘り方は隨円形を採る。上部遺構と下部遺構での掘り方は、下部遺構では直径70cmの円形である。上部遺構では100と140という、拡大された土壤の掘り方である。そのため、掘り方断面は有段を持つ断面図がつくり出された。

上部の粘土構造遺構は明らかに舟底形の造りとなっており、周辺部には壁面を作り出していた。内部には土器片を検出した以外には人骨等の遺体及び文化遺物は検出できなかった。粘土構



第10図 土壌基1号E-W断面図

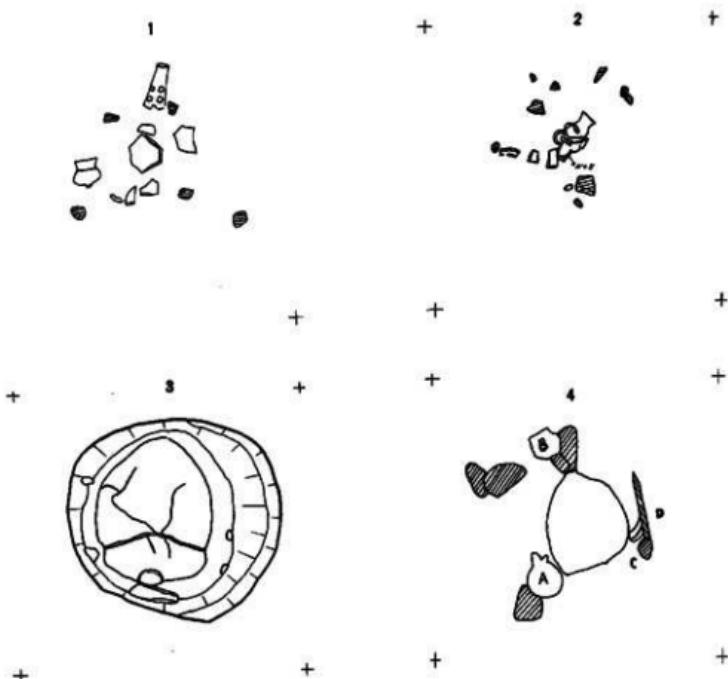


第11図 土壌基1号の上部遺構実測図

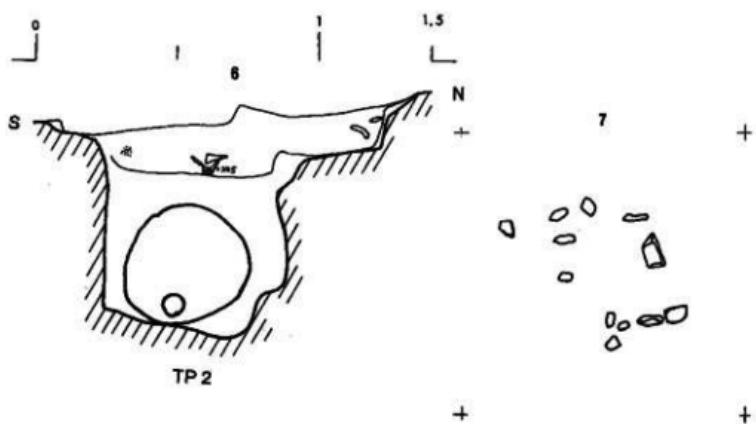
の蓋部は、削平されているため不明であるが、粘土構の底部様相からみて、蓋部も粘土による割竹形の粘土床が想定される。遺物は細片のため計測その他不可能である。

2号土壙墓 (TP 2)

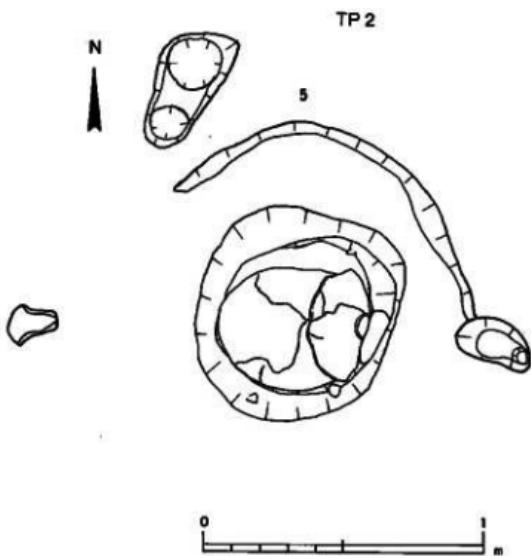
第12図、第13図、第14図に示す土壙墓遺構である。第12図は、遺物の出土状況を検出された順序により1～4で示したものである。1では、最上層で検出されたもので、完形品に近い壺形土器と高杯形土器片と脚部を検出した。その下部より2に示す、文化遺物を検出した。遺物は壺形土器をはじめ、複合口縁を持つ土器片が第13図の断面にみるNo.5の土器出土状況である。3は、埋葬主体部の出土状況図である。4は、主体部を取り上げたあとの土壤内の遺構及び遺物出土状況である。1、2に示す斜線で表示する遺物は礫岩である。また、4で示す斜線遺物も礫岩である。特に頗著な配石を見る2、4の出土状況は、明らかに意図的な配石があった。4の出土遺物は、3の埋葬主体部である壺棺の下部より検出された壺形土器Aは、口縁部を打ち欠かれた遺物である。その他に、Bの土器調部



第12図 土壙墓2号の遺物出土状況実測図



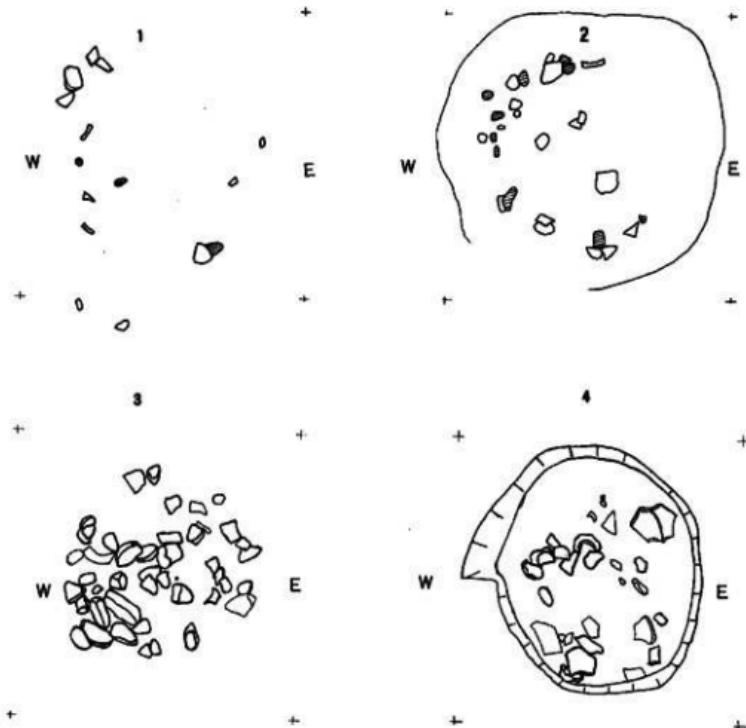
第13圖 2号土壤断面实测图



第14圖 2号土壤基平面实测图

とCの複合口縁片とDの杭状木器である。第13図の7は最終段階である。土壙墓遺構の底部で、G層面に検出された礫岩出土状況である。一方、NS断面にみるNo.5の土器遺物は明らかにシルトによる床面上で検出された。シルトの下部は黒褐色の土壙で埋土されていた。土壙の底部は60~55cmの円形土壙に、胴径45cmの壺棺が埋葬されていた。

第14図はTP2の平面実測図である。平面図にみられる主体部埋葬用土壙と、上部の供獻的遺構の土壙がわずかに検出されている。TP3に検出された上部遺構と同様で、共に供獻的な遺構と見るべきであろう。



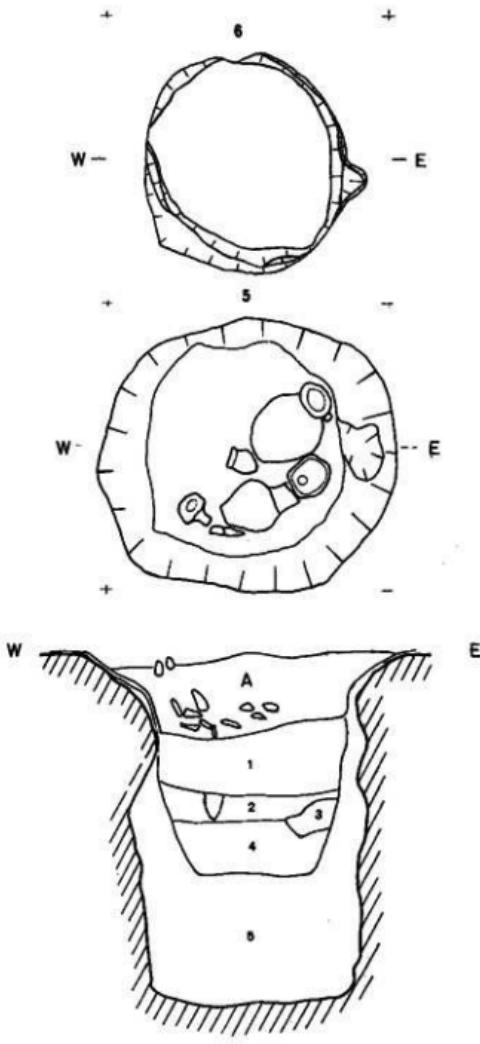
第15図 3号土壙基(TP 3)の遺物出土状況実測図

3号土壙墓 (TP 3)

3号土壙墓は、第15図及び第16図にみる土壙墓で、土壙上辺部では直径105cmの掘り方を取り、土壙底部では70cmを、土壙中央部附近では80cmと、やや腹部にふくらみが見られる円形土壙墓である。土壙の深さは150cmと掘り下げられて、基底部はG層である砂礫岩層である。遺物の出土状況は、第15図にみる状態である。地山のシルト層と平行する付近は1、2に示す遺物が検出された。出土遺物の内、斜線で示すものは石である。

3、4の出土遺物は、第16図にみる出土遺物であり、地山面より30cm掘り下げられた位置での遺物である。この3と4での遺物はすべて破碎された遺物であり、また、いずれも単独の破片遺物であった。

第16図のE-W断面図にみる埋積土の層序は、Aは遺物を含む層で灰褐色土層で、中に粘土のブロック層を混入した土層である。1は粘性の強い乳白色の粘土層、2と4層は、ほぼ同様の黄褐色の粘土層である。3は



第16図 3号土壙墓の遺物出土状況と平断面実測図

凝結した乳白色の粘土層である。5は黒褐色の有機物を含む土壤であった。なお、層の埋積土の上層部付近は、粘土塊がブロック状に混入するが、圓面化の上で割愛して、明視しやすい層序とした。

第16図の5と6は、土壤墓内の遺物出土状況と、採集後の様相を図示したものである。5に示す遺物は、すべて完形の土器類である。遺物4点は壺形土器であり、1点は壺形土器の計5点の出土をみた。その他の遺物に、梳の実1個が出土した他に、炭化した木板材の一部が検出された。副葬された遺物はE壁面に片寄った位置にある。このことにより、被葬者は西壁面位置に埋葬された可能性が高く、また、TP2にみる棺部をもたない裸葬が考えられる。とはいっても、人骨等の検出はみられなかった。

(3) 壺棺の様相と埋設

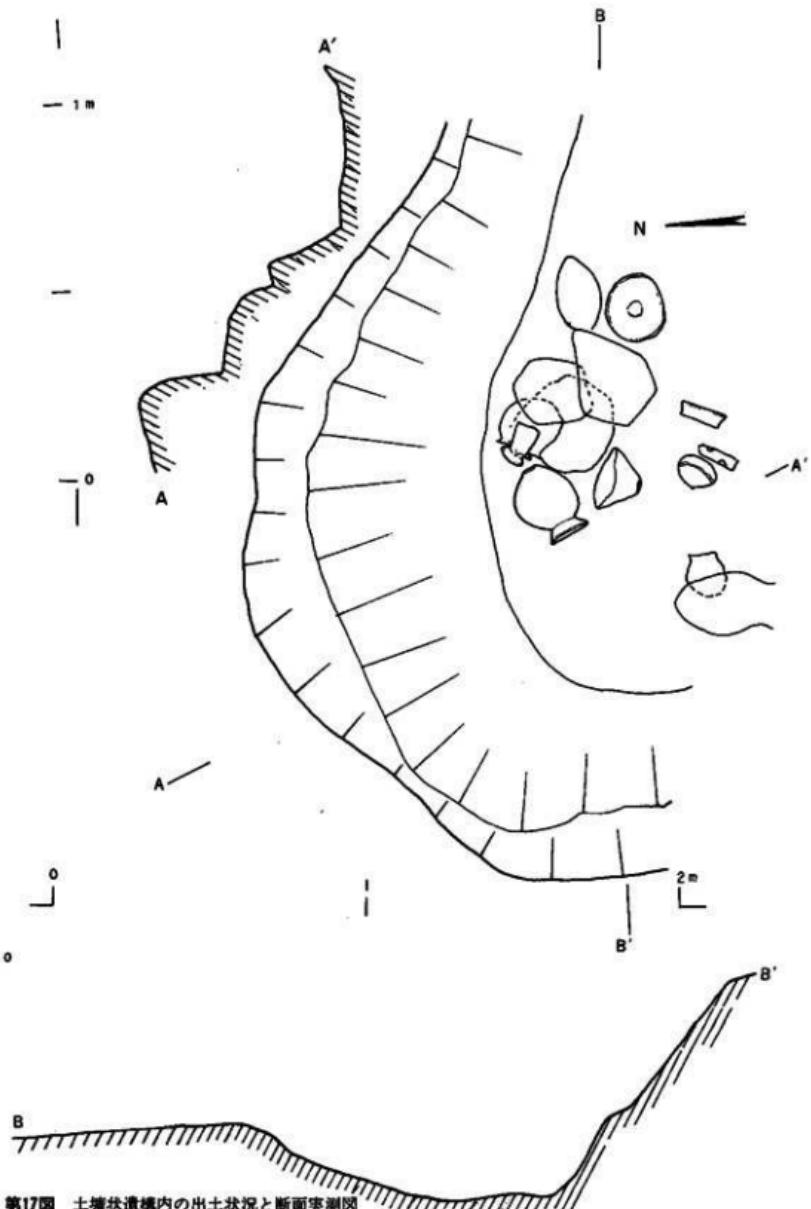
埋葬主体は主軸を東西に取り、頭部を東に安置していた。主体部は棺部である壺形土器と同様の壺形土器を底部と基底部を残して打ち欠き、棺部の蓋とした蓋部である。この蓋部の脱落を防止する意図と考えられる枕石が第14図に見る位置にあった。

第13図のS-N断面に示された土壤墓内の有段は、壺棺埋葬時の足場としての掘り込みと断定される。この足場の直下に、第12図4において出土した杭木状の木片Dが出土している。この木片が埋葬姿勢を最終的に決定させた器物と見るのは早計であろうか。

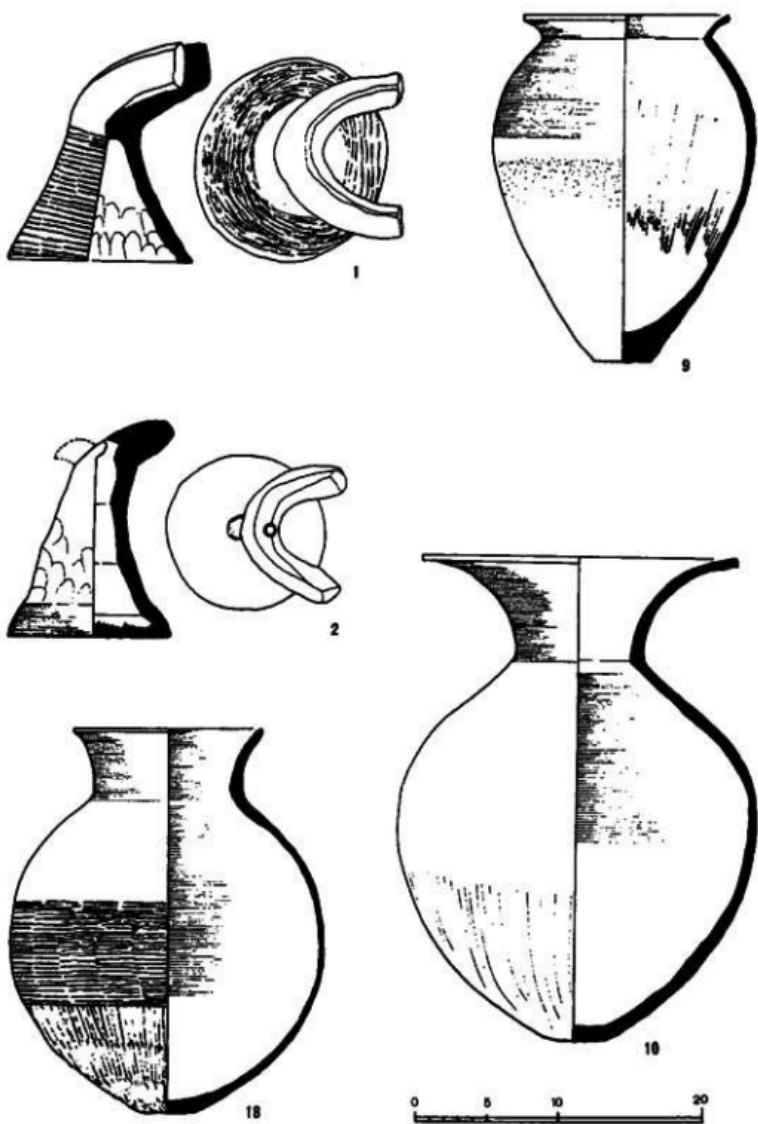
また、第12図の4で出土を見た壺形土器A・B・Cは共に完形遺物ではなく、いずれも欠損遺物であるという、埋葬時における副葬器物への一種の宗教的行為と見るべきであろう。

さらに、棺部の主体部である大型の壺形土器は、頭部の凸帯部を残して打ち欠くという手法を探っている。壺棺は平底の底部に刷張のある体部(40cm)をもち、肩部よりや、内窓気味にすばめられ、頭部(15cm)で直立している。頭部には断面長方形の突帯をはりつけている。また、突带上表面には相互に交差する竪先による押圧痕が格子目文様を作り出している。器表面には、櫛描きによる施行が縱走向に施された成形となり、基底部附近においては、ヘラ磨研が、櫛描き成形痕をわずかに残した状態にある。色調は橙色で、やや肩部に赤味が強い。内壁面は櫛描きの成形で、基底部は縦状に、胴部は横状に肩部から頭部では回転させながらの斜行櫛描きとなっている。色調は灰褐色で、胎土厚は底部で2.5cm、胴部1~1.2cmと肥厚な土器である。

蓋部に利用された土器も、棺主体部と同様の壺形土器の底部辺を活用して、蓋形土器としたものである。蓋部の土器は、円盤状の平底をもつ土器で、底部で大きく外折したのち、ゆるやかに内窓しながら立ちあがり、体部をつくる土器と思われる。



第17図 土壙状遺構内の出土状況と断面実測図



第18圖 出土遺物実測図 1

(4) 土壌状造構（第17図）

土壌状造構は、A区の南端部で検出された遺構である。東面と南面は完掘不可能なため明確ではない。N面とW面で推測される土壌断面から有段の箱築研と推測される土壌である。有段はN法面では2段に、W法面では1段となっていた。土壌は地山を約1m掘り込んだものである。土壌底面は砂礫層である。土壌内より出土した遺物は多く、特に底部位置で出土した遺物はほとんどが完成に近いものであった。出土遺物は壺形土器を中心とするもので、わずかに甕形土器も出土しているが、甕形土器は小型のものが多く、また器形は壺形と区別の困難な土器が見られる。

5 出土遺物

遺跡の出土遺物は、おもに1は土壌状造構より出土をみた支脚形土器、壺形土器に対して、2は土壌墓造構より出土をみた4・9の土器に、3はSB01出土の壺形土器13・14があげられる。本遺跡で検出された遺物は土器がほとんどである。（図版第20・22図を参照）

(1) 土壌状造構出土遺物

A 支脚形土器

第18図の1と2がある。1は円錐台状の上端部に二叉の支持手をとり付けた角形の支脚形土器である。脚部は中空に造り出しており、器表面には平行叩きしめ痕を残している。中空の内壁面には、指頭による成形圧痕文を2~3段に残している。内壁面の上端部には、しばり目をみる。2は角形の二叉の支持手を周間に持つが、支持手の表壁面は、1より大きく外側して三日月状の弧を描く造りとなっている。脚部は中空であるが、4段の窪切りにより縫をなす切り取りとなっている。円錐台状上端部に着目された、支持手の角部にも0.5cmの貫通する小穴が穿たれている。器表面に指頭押圧痕文を無数に残すが、基底部はナデ仕上げとなっている。

B 壺形土器

10は丸底に近い不安定な平底から内寄気味に立ちあがり、器高比も付近で体部の最大径をみたのち、内傾してすばり頸部をつくり出した後、やや立ちあがり大きく外反して朝顔（喇叭）状の口縁をもち、口唇端面は垂直な窪切りがみられる。口辺部内壁面は、ナデ仕上げで頸で縫をなす。口辺部表面は横ナデの刷毛目仕上げである。体部は縱走向に窪磨研がほどこされている。内壁面は刷毛による横ナデ仕上げがみられる。体調は黄橙で肩部は削離が著しい。内壁は灰褐色で焼成やや軟弱、胎土に粒子をもつ。口径22.2cm、器高34.2cm、頸部外径9cm、胴計最大径25cm、最大器厚1cm、最小器厚0.8cm。

15は平底の底部に凹味をもち、体部は大きく内寄して球形の胴部をつくり出したのち、頸部でわずかに立ち上がり、大きく喇叭状に外反して口辺部を造り出したのち、口縁部を下方

に折曲させて口唇端面をバラベット状に造り出している。口唇端面をナデ仕上げしたのち、4本歯の櫛状施文具により波状文が描かれている。口辺部から体部にかけて櫛描きによる成形がみられる。口縁部と平底底部中央位置で2cmの歪みがある。

16は、壺の安定を保つ程度の打ち凹めによる平底である。底部より肥厚を減じながら大きく内寄する壁面は、体部中位で最大径を取る。頸部のしづらは弱く、頸部でわずかに直立したのち、大きく外反して直線的な口辺部をつくる。口辺部内面にはややふくらみをもつ、口唇端面は丸くおさめている。頸部内壁面には稜をさす。体部の内壁面は、10本歯の櫛状工具による成形が斜方向にみられる。口辺部は共に横走向の刷毛目仕上げである。体部表面の肩部にはカキ目調整がみられる。縦走向に頸部より底部に向かって擦痕がある。器形に1cmの歪みが見られる。器高27.8cm、口径17.2cm、胴部最大径21.2cmである。焼成軟弱、胎土に粒子がある。色調はカーキ色である。

18は、平底の底部と頸部付近をのぞく薄手の土器である。体部は球形に近い。頸部からゆるやかに外寄したのち口唇端面を丸くおさめた、直口に近い壺形土器である。

内壁面は全面横走向による刷毛目仕上げである。体部では基底部は縦走向のヘラ磨研である。体部中位では平行叩きしめ文が明瞭に残り、肩部は横ナデ仕上げである。口径8.2cm、器高27.2cm、底部4cm、最大胴径22.2cmで左右均衡のとれた土器である。胎土には0.5cmを含む荒い粒子をもつ。

20は壺形土器の口頸部で、口縁部は輪積手法による複合口縁である。複合の口辺部には4本歯の連弧状文が2条相い対して施文されている。頸部には断面台形状の凸帯が貼り付けられ、凸帯上端面を斜格子目文に笠先による押圧文が施されている。器面は内外面共に走向を異にした成形が見られる。

C 壺形土器

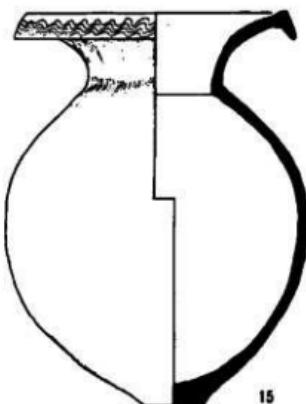
9は、土壤状遺構出土の唯一の壺形土器である。土器は均衡のとれた、焼成もよい土器である。体部中位には焼煙が付着している。肥厚な平底の底部より、肥厚を減じながら外反しつつたちあがり、体部中位付近より内寄気味にゆるやかにすぼめられて頸部を造る。頸部で大きくくの字状にくびれたのち外寄した口縁部をつくる。口唇端面は垂直でヘラ磨研がみられる。体部内壁面は底部より頸部に向かう1.5cm幅のヘラ状工具によるカキ上げ成形となっている。口辺部は内外面共に横走向の刷毛目仕上げであり、刷毛目調整は肩部に延びている。体部の中位から基底部にかけて、縦走向のヘラ磨研がみられる。焼成もよく均衡のとれた土器である。口径14.5cm、器高24.4cm、頸部外径12cm、胴部最大径18.4cm。

D 土壙墓出土の土器

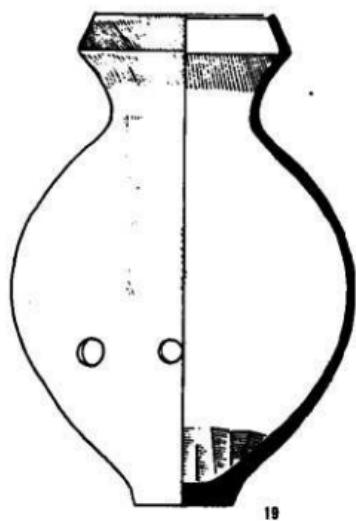
19は器高34.8cm、口径12.8cmの複合口縁をもつ壺形土器である。しっかりとした平底(直径7cm)からやや外傾して立ち上がり基底部を造り出した後、大きくくびれて立ち上がったのち、大きく内寄して球形の体部を作る、肩部より内傾してにぶい頸部にくびれをもった漏斗



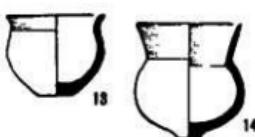
20



15

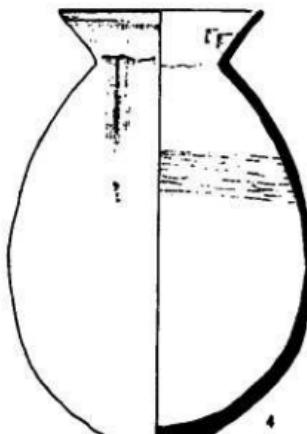


19

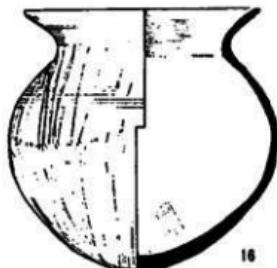


18

14



4



16



第19図 出土遺物実測図 2

状の口辺部をつくる。口縁部の口唇端面に輪積による内傾した複合の口縁部をもつ。器表面は内外面ともに櫛描による成形である。特に底部の内部壁は、横走向の櫛目がある。

中位以下に2つの円孔が穿がたれているが、円孔はいずれも焼成後に穿たれたものである。焼成はややあまい。

4は、同じく土墳墓No.1で出土した土器である。器形・焼成共に粗雑なつくりとなっている。平底6cmの基底部でのたちあがりはにくく、大きく外反したのちに内弯しながら立ちあがり、頸部でのすばまりは弱く、肩部はみられないが、徳利状の底部に広がりのある土器である。

頸部で大きくくびれて喇叭状の口縁部をつくる。器表面は口縁部・体部共に縱走向の櫛描き成形がなされているが、凹凸の激しい、不均衡な成形土器である。内壁面は、横走向のへら磨研が見られる胴部と、底部周辺部には無数の指頭による圧痕がみられる。口辺部内面には10齒の櫛状工具による横走向の成形痕を残している。

13は培形土器である。焼成はよく、入念な出来ばえである。口径7cm、器高5.8cmで胴部最大径7cmである。口辺部はヨコナデとなっている。底部は2.5cmの中央部でやや凹な平底である。

14は竪穴住居址で出土した遺物である。器高8cm、口径7.4cmである。共に平底であるが14は底部が乳頭状に突起する。口縁部は両器横走向のナデ仕上げである。体部はよく磨研されている。

6 結 語

浮穴遺跡と西石井荒神堂遺跡は、共に弥生後期末葉から古墳時代初頭の土壙墓である。両遺跡での土壙墓は、松山平野における弥生終末から古墳時代への移行期を知るための貴重な資料を提供した重大な遺跡である。

報告されている浮穴遺跡の3基の土壙墓は、いずれも一定方位に整然と埋葬されているが、ただ頭部位置については、東西を向く二形態が見られ、頭部位置を統一するという埋葬形態ではなく、埋葬時の掘り方の統一という形態が、被葬者の埋葬方位に先行する様相が松山平野では思考される。弥生時代の土壙墓は、松山市上野町駅跡面山前・中・後期の土壙墓、松山市越智町今在家遺跡、弥生前期の土壙墓、松山市山越町に所在する。山越遺跡では弥生中期、後期の土壙墓、松山市天山町における天山独立丘陵に所在する。天山天王ヶ森遺跡の弥生中期、後期の遺構が確認されている。これらの各遺跡での共通点は、前述したごとく掘り方の方位については、各集落の規模により大小様々な遺構規模を取るもののがすべてであるが、集落がよって立つ集落自体の産業的性格を表現しているものと推察されるとともに掘り方や方位が考えられる。

また埋葬形態の内、特に次の諸様相が遺構の性格を特色付けるものとなる。その(一)は、遺構内に副葬品を伴なうものと、副葬品を伴なわないものとの二種類に分かれる。(二)では、外部に遺構を伴うものと、外部遺構を伴わないものがある。(三)では、土壙の掘り方に一定の統一を取るものと、未統一のものとがある等々と、土壙墓の規模や性格については種々の論議が必要であるが、以上のことがらについては本報告書では割愛して、2遺跡についてのみこれらの様相について記述したい。

浮穴遺跡は壺棺を埋葬した遺跡である。いずれも被葬者を棺に納めて埋葬している。本文にも記述するごとく、複合口縁をもつ大型の壺形土器を口縁部を打ち欠き、埋葬用器として活用したものである。打ち欠かれた頭部の口径は、いずれも25cm以下という直徑である。

この方法による埋葬について、一つの疑問が生じる。ちなみに、口径25cmでは、いかにしても被葬者を直接入棺するには入棺可能な口径ではなく、入棺するには被葬者の死体に何等かの変化をあたえることにより可能になりうる口径である。だが当遺跡は、水田に利用された時期があり、この水田化により埋葬者それ自体に風化活動を急速に進行させたものとみえ、人骨は環元して遺体をとどめず、また、その他に文化的な遺物もなに一つなく、被葬者についての確証を得ることはできなかった。だが前述の祝谷遺跡においては、貝殻を加工した貝釧と歯牙を出土している。この歯牙の検出により成人的壺棺であることが知られている。

西石井荒神堂遺跡では、五基の土壙墓の内、一基は壺棺の埋葬墓を検出した。当遺跡では、土壙の掘り方は浮穴遺跡と異なり円形の掘り方である。図版に示す状態で、蓋部を東方に取る埋葬形態を探り、浮穴1号墓と共通する方位である。他の2基は副葬品は埋葬しているが、

壺棺はなく、被葬者は裸葬された可能性が高い。副葬された壺形土器は、いずれも弥生式土器の終末期のもの1個体と、明らかに土師式土器の初頭に比定される時期のものである。

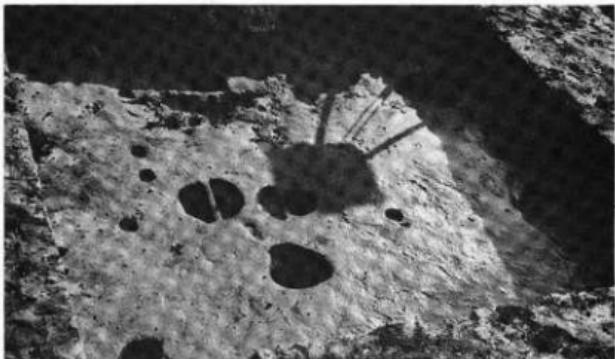
浮穴遺跡においては、遺構の掘り方と壺棺を検出したのに対して、荒神堂遺跡における遺構では、土壙墓の上部遺構の一部分（閉塞状況）を検出でき、土壙墓の閉塞は粘土により完全に行ない、しかも、閉塞行為以前に土壙墓内で仮閉塞が実施されていた。押団を見る粘土押状の遺構には、明らかに破碎された什器が検出され、しかも意図的に完形品を忌み嫌らつたとみられる出土状況であった。この破碎遺物を内蔵さす形で、上部に更に一層の粘土による封土があった。この封土上には、円柱を持つ器台形土器（図版14図）が検出された。その他に、細片化した土器片多數を検出しているが、計測可能なものはほとんどみあたらなかった。

だが、この出土状況により、埋葬後の墓前行為が実施されていたことを立証する貴重な遺構である。TP01で検出された壺形土器に2孔を穿ったものが埋葬されていた。この円孔は焼成後に器表面より打ち抜いた状態である。前述の各遺跡で出土する壺棺の内、円孔を壺棺の中位以下に穿つものと、円孔を持たないものとがある。

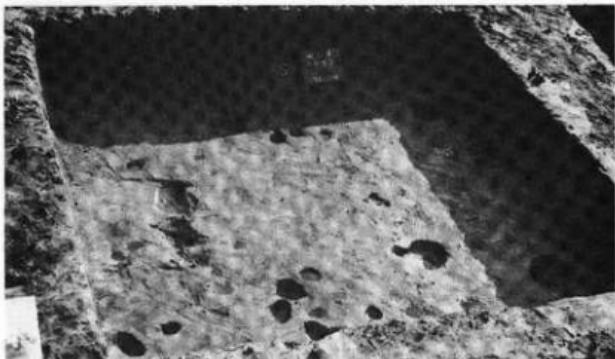
特にこの時期における常民墓の埋葬形態を知る貴重な各遺構であり、今後、大いに論議を醸し出す分野であろう。特に、支配者階層を生み出す時期であるだけに重要であろう。一方、壺棺そのものの規格からして、新たに洗骨という埋葬形態を筆者は考察しており、この面から土壙墓の再検討を試みたいと考えている。

図 版
西石井荒神堂遺跡

グリッド内の掘立柱建物に発展しうる柱穴。



杭穴及び柱穴が検出された。



土壙墓1号の上部
造構



(西石井荒神堂遺跡1)

図版第10図 造構検出状況1



土壇墓 2 号
出土のグリッド



土壇墓 3 号及び 4
号検出



清状遺構

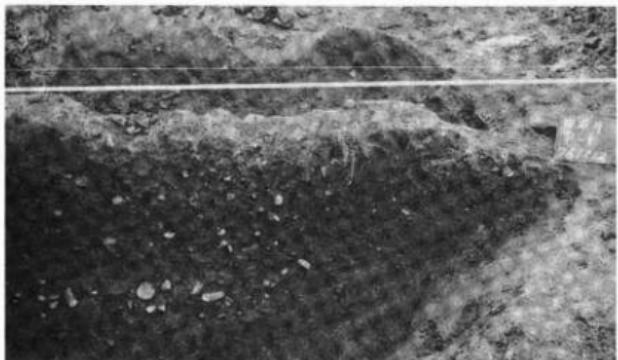
(西石井荒神堂遺跡 2)

図版第11図 土壇墓出土状況

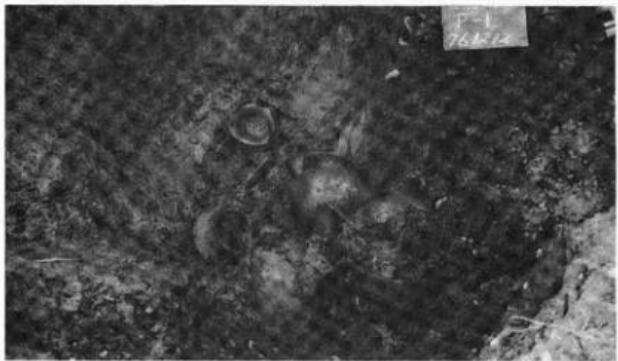
土壤状造構の検出
状況



1号土壌の埋積土
状況



土壤内の土器出土
状況



(西石井荒神堂遺跡 3)

図版第12図 土壌状造構の出土状況

SD出土の土器片



同土壙内の底部付
近で検出された什
器類

①



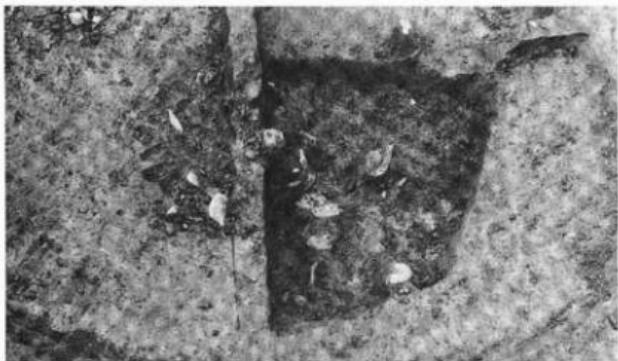
②



(西石井荒神堂遺跡 4)

図版第13図 土壙内の遺物

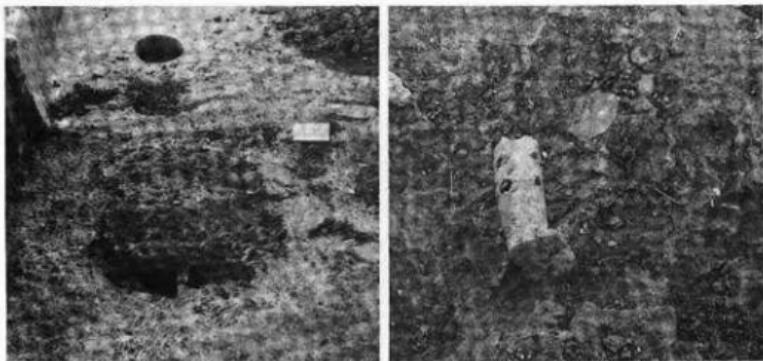
破碎された什器類
の出土状況



粘土塊を造り出し
たTP03の遺構



TP03の上部で出
土した器台形土器



(西石井荒神堂遺跡 5)

図版第14図 土壙墓の上部遺構

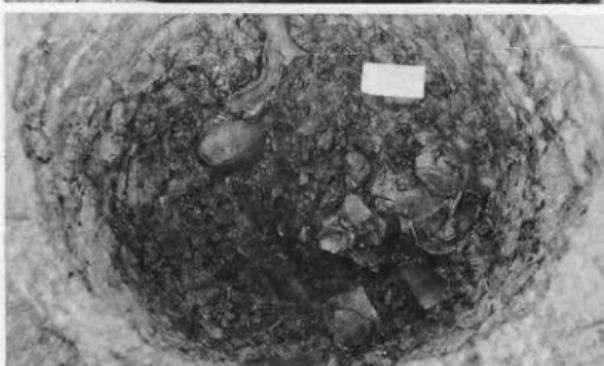
図版14図No.2の拡大



粘土櫛の底部のようす。



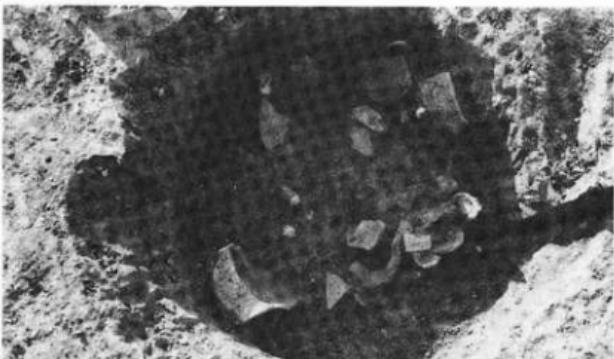
破碎された土器の出土状況



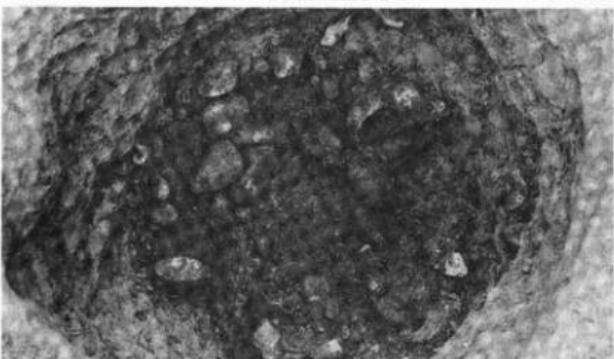
(西石井荒神堂遺跡 6)

図版第15図 粘土櫛の状況

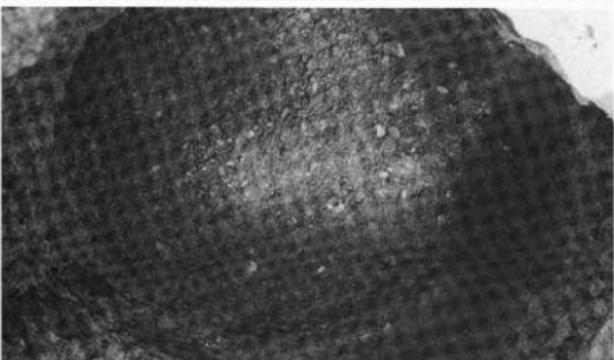
TP03の出土遺物
破碎された什器類



床面付近で検出さ
れた円礫の投入状
況



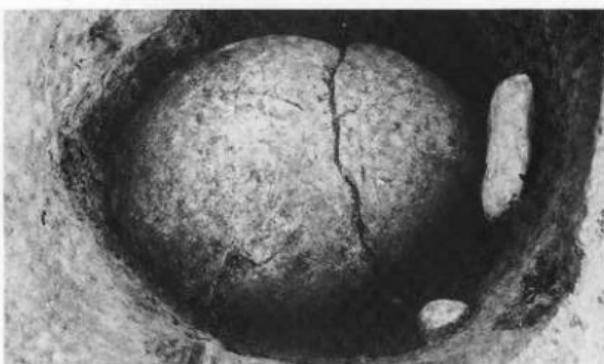
円礫採集後のC層
における床面の状
況



(西石井荒神堂遺跡 7)

図版第16図 土壙墓内の遺物 1

壺棺の出土状況



蓋を取りさった状況



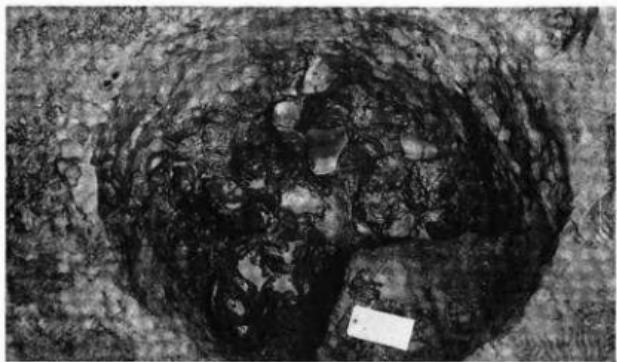
頭部の凸帯の凹形をとどめている。



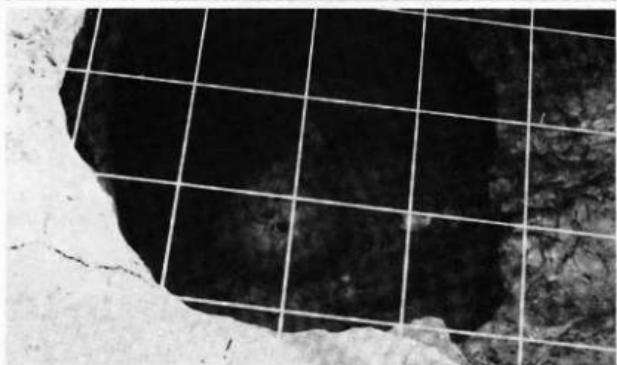
(西石井荒神堂遺跡 8)

図版第17図 土壙墓内の遺物 2

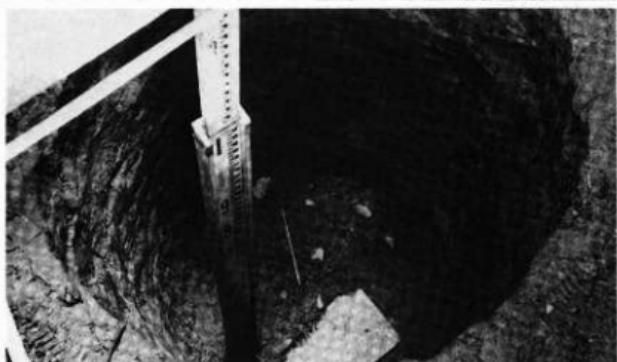
粘土床上の上部遺物



遺物No19の出土状況



完復状況



(西石井荒神堂遺跡 9)

図版第18図 土壌墓内の遺物 3



SB01の完掘状況



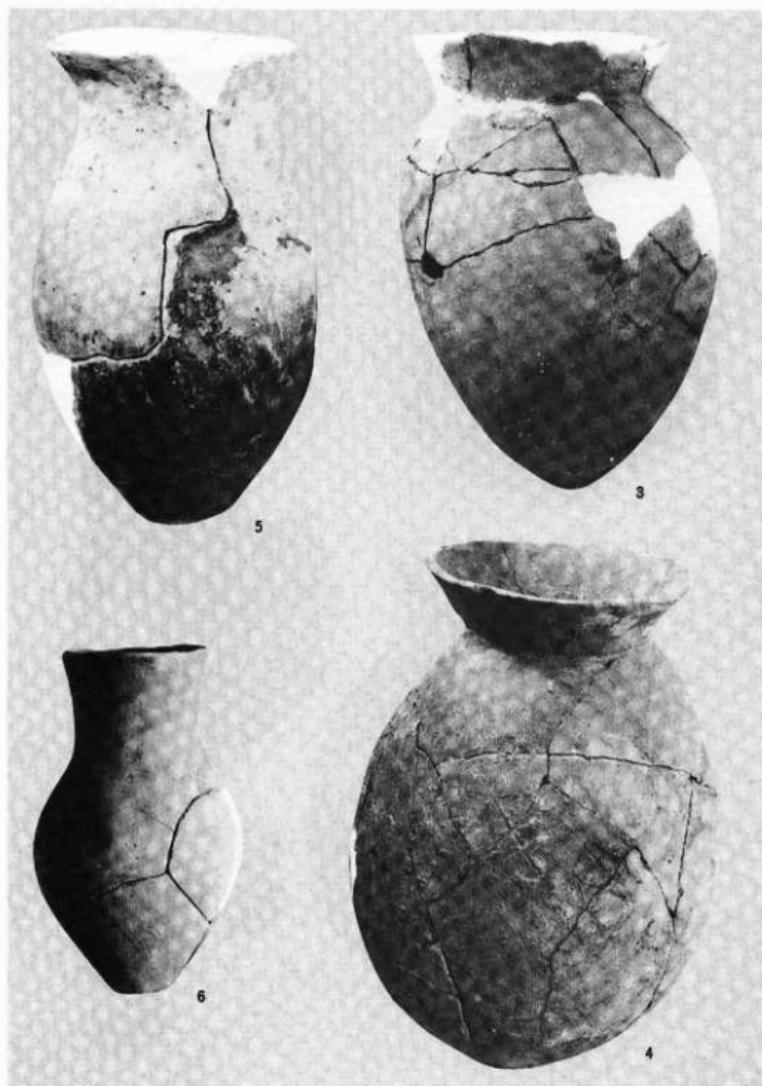
石器出土状況



叩き石の出土状況

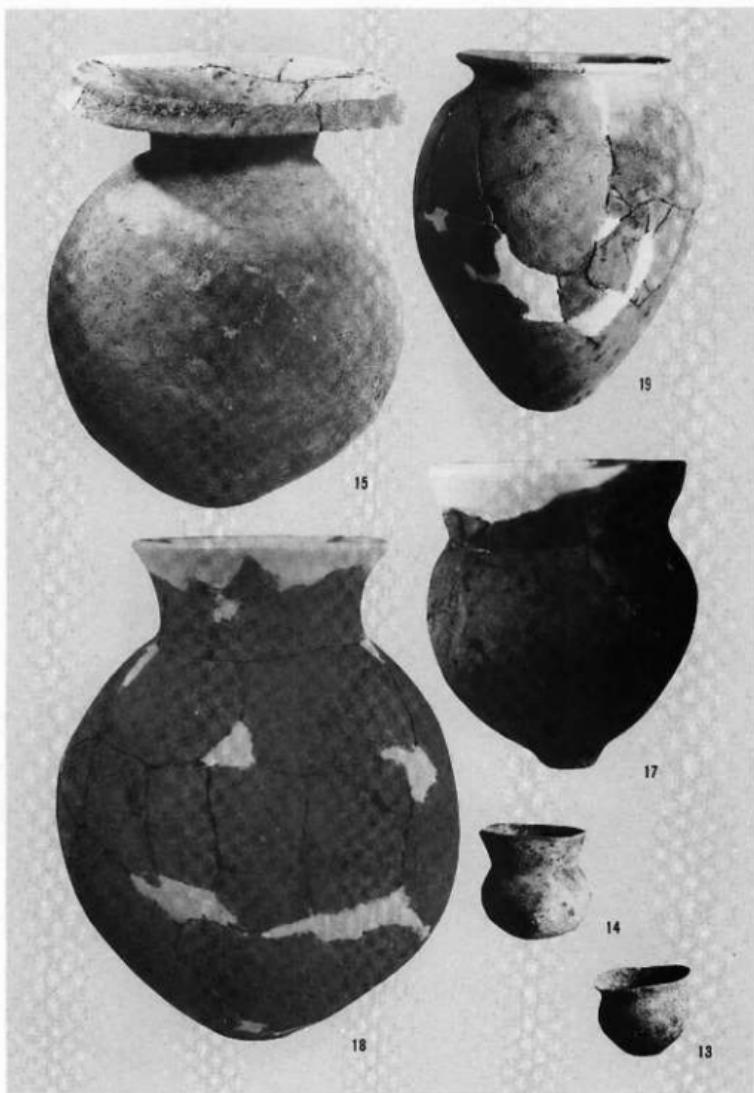
(西石井荒神堂遺跡10)

図版第19図 住居址と出土遺物



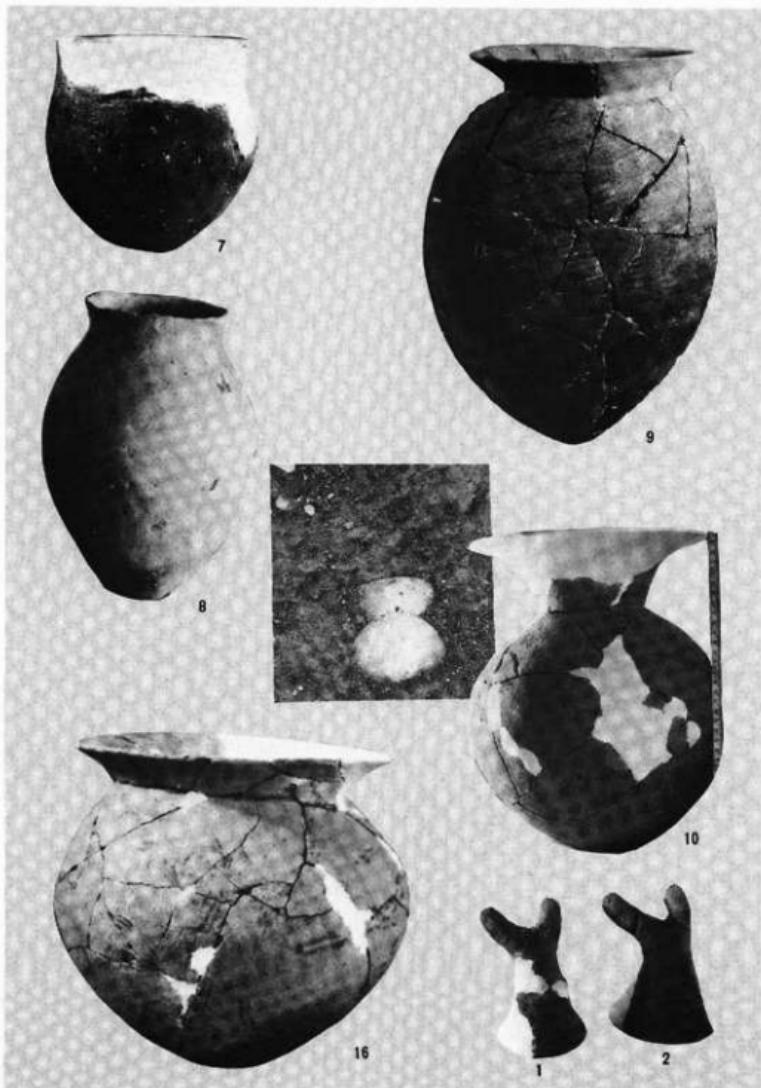
(西石井荒神堂遺跡II)

図版第20図 遺 物 1



(西石井荒神堂遺跡12)

図版第21図 遺 物 2



図版第22図 遺 物 3

(西石井荒神堂遺跡13)

東 本 遺 跡

III 東本遺跡

1 東本二次の調査位置と経過

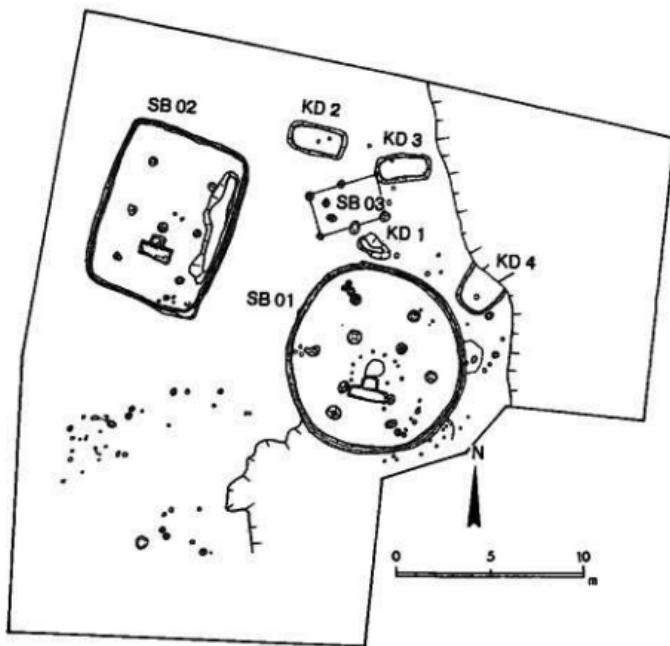
東本二次は、松山市東本町98番地に所在する遺跡で、北緯33度49分31秒と東經132度47分21秒で交差する位置にある。地目は乾田であるが、エヒメコープによる宅地造成計画による緊急調査を実施した。調査は昭和52年4月8日より、同年4月30日の間に実施された。雨に降られる日が多く、実動された調査日数は22日と少なく、期間中の調査にかなりの無理を感じながらの調査であった。

調査は、すでに真土による整地後の調査のため、真土の排除の後、耕作土を排除するという非能率的な表土削平作業であった。耕作土を僅かに残して削平した後、遺構確認のために試掘したトレンチにより土壤断面図を作成と同時に、磁北に合せて方5mのグリッドを東より西にY軸を南北へX軸として、それぞれ1から8の区画をした。

一方、トレンチ調査により、西より10m区画(Y₁~Y₂~X₁~X₈)は、耕地改良工事による地下(造構面)の削平が著しく、遺構がほとんどなく、調査対象地点より一応割愛した。また、一方(Y₉~Y₁₁~X₁~X₈)は、すでに粘土採集等による地下げが実施されているため(Y₁~Y₂~X₁~X₈)と同様に調査より除外した。

2 検出された遺構

発掘調査区内で検出された遺構としては、竪穴式住居址2棟と土壙遺構4基である。竪穴式住居址は、円形規格の住居址と長方形の住居址である。土壙状遺構は、いずれも長方形のもので統一されていた。その他に、壠立柱建物が推定される建物遺構1棟がある。



第20図 東本二次発掘区全測図

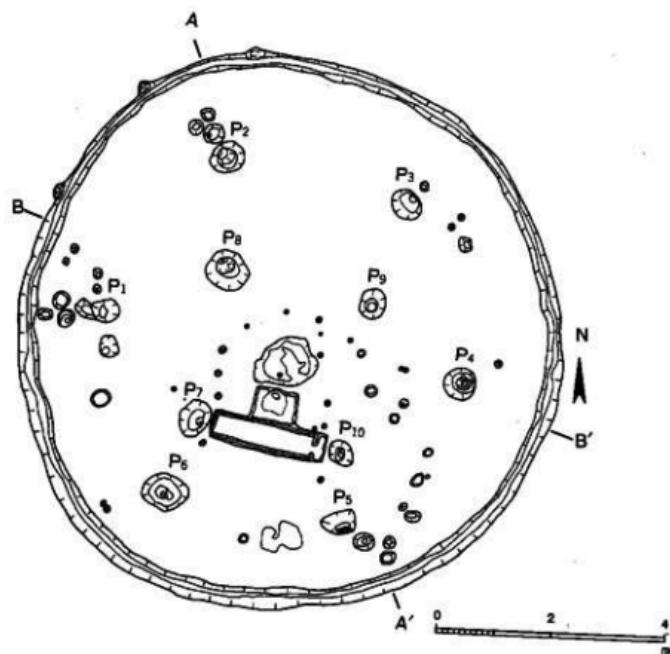
(1) 1号、2号竪穴式住居址遺構

竪穴式住居址遺構は、長方形の隅丸長方形と円形住居址である。隅丸長方形の住居址は、長辺9.0mと短辺6.5mで、壁面には周溝をめぐらしている。主柱は、長辺の壁面に平行して3本づつの6本と、中央部に1本の主柱を持つ7本の柱穴が穿たれている。

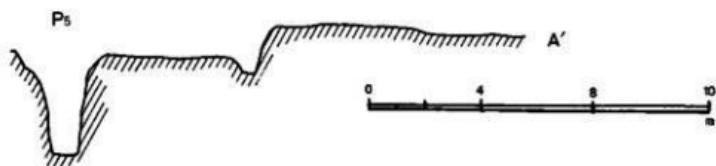
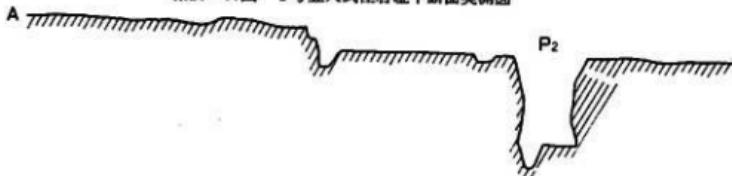
円形の住居址は、円周の壁面に添い一周する柱穴6本と、中央部に4本の柱穴を持つ計10本の柱穴を穿った住居址である。

長方形竪穴式住居址（第23図）・（第20図SB02）

長方形の竪穴式住居址は、第21図に示すもので、それぞれ柱の心心間距離はP₁とP₂では255cm、P₂とP₃では275cm、P₄とP₅で275cm、P₅とP₆で255cmである。なお、相い対する柱間の心心間距離はP₁とP₄で355cm、P₂とP₅で355cm、P₃とP₆では355cmとなっている。また、住居の主軸をなす方向はほぼ南北にある。



第21-A図 1号竪穴式住居址平面面実測図



第21-B図 A-A'断面図 直径9.6mの円形竪穴式住居址 東本2次遺跡

柱間は桁行間でP₁とP₂はP₅とP₆で同数値を示しており、P₂とP₃はP₄とP₅で同数値が一間となっている。梁行ではいずれも同数値である。中央部の柱穴は、南壁面より4.8m、北壁面より5.2mの幅7.1mの二等分数値の355cmにある。この柱穴の位置は、P₂とP₅の梁を横架した時を考慮したものであろうが、P₂・P₅の柱心よりは60cm柱穴P₃とP₆の間に寄せられて穿たれている。

上屋根の構造は、中央部のP₇の柱位置からしてP₁・P₄、P₂・P₅、P₃・P₆にはそれぞれ梁材を横架させたものと推察され、この梁を各H₁、H₂、H₃と呼称すればH₁とH₃には、少なくとも東をたてたものと推定され、この方法により、中央部の垂みと自重を支える柱としてP₇の柱穴が穿たれたとみる。いいかえれば、棟持柱として当初から予定された構築方法とみなされる。

竪穴式住居址の柱穴からみて、梁間1間と桁行間2間の切妻の屋根葺きが想定されるが、竪穴の規格（掘方）をみれば、4隅に通長尾（樋木）を持つことから寄棟が考えられる。

今、竪穴の平面プランを4本の主柱を1単位とするならば、2本の柱穴を持つことは、床面積における規模は2単位のものとなり、中央に穿たれた柱穴P₇により、床面を2等分する間取りとなる。ただ、柱穴P₂、P₇、P₅での柱穴位置には、間仕切的な支柱穴や、壁の存在を認められる遺構は検出できなかった。ただ、P₅とP₇の柱穴間で2つの杭穴らしきものを検出したのみである。

その他、床面で検出されたものとして、東壁面の側で柱穴列と壁面間に長方形の汚染層があり、その汚染層を排除したものが第23図に示す凹地状の遺構である。凹地状の遺構は断面図にみられるもので、掘り込みではなく、床面の黄色粘土層が黒褐色に汚染したものであることを記述しておきたい。

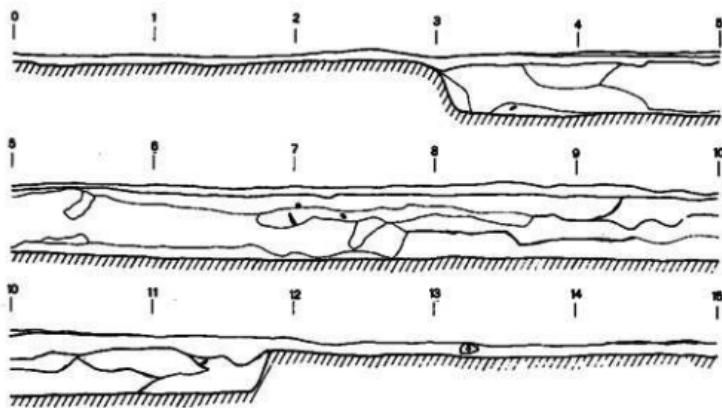
さらにタツミの方位において、4つの柱穴及び杭穴と見られるものを検出したが、これらの柱穴及び杭穴は、非常にしっかりとした遺構であり、この住居址における特色である。

円形竪穴式住居址（SB01）

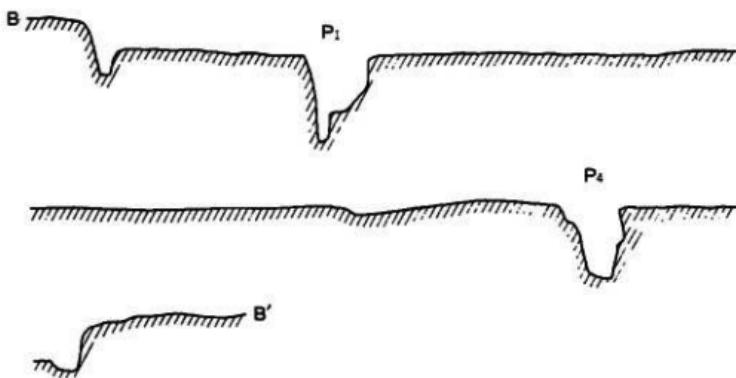
円形竪穴式住居址（第21図）は、南北で10m、東西では9.7mとわずかに垂みが見られるが、ほぼ円形とみられるものである。住居の壁面には、完全に一周する周溝をめぐらしており、床面はほとんど水平に削平された平坦面となっている。

床面内で検出された柱穴及び支柱、杭木に推定される柱穴や杭穴が多数検出されている。これら柱穴類の内、竪穴式住居の主柱と判断される柱穴は、中央部に穿たれた4本の柱穴を基本柱とするP₇～P₁₀と、円周の周壁面にそって1巡する柱穴P₁～P₆がある。これらP₁～P₁₀の柱穴を本遺構の主柱穴とみている。

柱穴P₇とP₈は280cm、P₉とP₁₀で260cm、P₉とP₁₀で280cm、P₁₀とP₇では260cmとわずかに20cmの差をもつ方形に近い数値である。これらP₇～P₁₀の基本形（4本柱）に対して、P₁

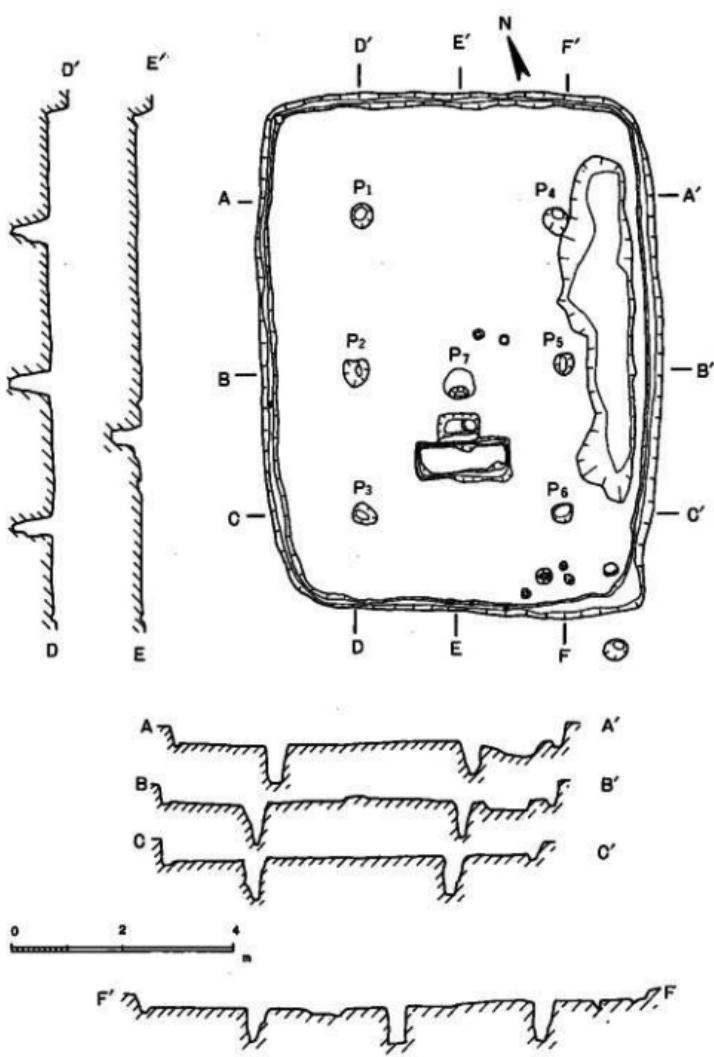


第22-A図 1号竪穴式住居址E-W地層断面図



第22-B図 1号竪穴式住居址B-B'断面図

～P₆に至る柱穴においては、それぞれ柱穴の心心間距離はP₁とP₂で360cm、P₂とP₃で350cm、P₃とP₄で340cm、P₅とP₆で330cm、P₆とP₁では340cmとなっている。さらに主柱穴の延長線上にあるP₂とP₆対P₃とP₅の心心間距離はともに625cmである。これに対してP₁とP₄の心心間距離は660cmとややひろがりがある。



第23図 2号竪穴式住居址平面面実測図

長径9.2m、短径7.2mの隅丸長方形竪穴式住居址

主軸方向はN17°Wになる位置に主軸を取っている。

(2) 構築についての小考

本遺構における柱穴から、次のような上具材の構成が想定される。4本の主柱を基本構造として、それぞれに梁材を横架させた後に4柱より、また、それぞれに対角線上に通し長尾を配置するが、当時の円形住居にみる通例は、円の半径でもって、円周を割り、柱位置を割り出すものが多い。（小坂釜ノロSB03、桑原高井SB01、文京II SB06等）しかし、これらはいずれも4本の主柱はもたず、6本の柱材で終わっている点など、本遺構と類似している。この円形住居における柱位置の割出し手法を踏襲するために、4本の主柱からの長尾位置は対角線上の最も近い位置に割り当てられる結果となっている。この為に決定した柱穴位置は、P₂・P₃対P₆・P₅となる。残るP₄とP₁は、各P₂とP₆、P₃とP₅の2等分線上に配置されたものである。ここで桑原高井SB01にみる主柱配置と共通しながらも、壁面は桑原高井の6角形に対して本遺構ではほぼ円形であり、主柱4本が追加されている点等からして、4本柱に架けた通長尾ではなく、それぞれ主柱より梁材を横架したものと判断すべきでP₁～P₆は支柱ではなく、主柱として理解すべきであろう。だとすれば、屋根は入母屋の造りが考えられる。4本の柱と6本の柱を梁材で結ぶことにより、円形の壁面を持つ竪穴規模が可能となる。すなわち、各柱位置と梁材の中央位置に東柱を持つことにより、それらを結ぶ長尾（樋）の足元は円形の位置を取ることになり、桑原高井に見る、六角形と異なる平面プランを持つ床面が造り出されるものと考えられる。

2号竪穴式住居址SB02は、長辺9.2m、短辺7.2mの隅丸長方形の竪穴式住居址で、住居の方位は長辺を主軸とするN17°Wに向う住居址である。竪穴の掘り込みは、地山面である黄褐色の粘土層（シルト）を25~30cm掘り下げた住居で、床面は心持ち東に傾斜した状態の壁面近くに凹地を持っている。

壁面には1周する周溝をめぐらしている。住居内の主柱穴は7個検出された。第23図にみる実測図で示すものである。7個の柱穴はP₁とP₄、P₂とP₅、P₃とP₆とそれぞれ対応する柱穴の他にP₇が中央に検出されている。

各P₁とP₄・P₂とP₅・P₃とP₆は、いずれも柱間間の距離は350cmの等間隔となっている。また、P₁とP₂対P₄とP₅は280cmと等間である。P₂とP₃対P₅とP₆は250cmとこれまた等間となっている。全体的には炉址を伴わない間が30cm広い間取りとなっている。P₇は掘り方位置に対して柱穴位置が片寄った状態で、しかも扁平な柱穴が穿たれている。この扁平な柱穴位置で柱位置を東の隅に寄せることにより、P₂とP₅の等しい中間位置に建つことができる。すなわち、この位置がP₇の柱位置であろう。柱穴の深さは70~75cmの掘り込みと等しい掘り方となっているが、P₇の柱穴のみ50cmとやや浅い柱穴が穿たれている。また、断面図A-A'~C-C'等にみられるように、柱穴がハの字状に傾斜する傾向がみられるA-A'とB-B'に対してC-C'では、柱穴の掘り方の中位の位置に肩部を造り出している。

P_7 の柱穴は、通しの棟持柱の可能性が強い。通しの棟持柱と推定される根拠は、 P_2-P_5 の梁材を横架させた場合の梁材の直径を計算した位置に、柱穴が穿たれている点において、通棟持柱の柱穴と推定される。 P_7 を通棟持柱とするならば、 P_1-P_4 の梁材と P_3-P_6 の梁材には東柱による棟持柱が考えられる。以上から屋根の造りは切妻か、または入母屋造りの屋根が考えられる。豎穴の周辺部に柱穴は検出されたが、棟を支える軒び柱の柱穴をみないところから、入母屋造りとしても棟の突起が少ない造りが考えられる。

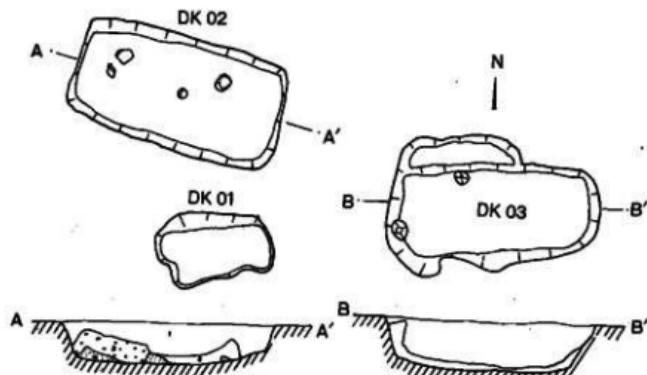
(3) 土壌状造構（第24図）

土壌状造構として3基検出された。3基ともに主軸方向を異にしており、DK03では東西に、DK02では北75度西に、DK01は南80度西に取っている。長方形の掘り方となっている点ではいずれも共通している。

DK02は長辺380cm、短辺260cmで深さ80cmである。底面は水平に整地されている。やや中央位置に2個の杭穴が検出されたが、使途については不明である。

DK03は長辺380cm、短辺180cmで深さ75cmである。底面はDK02と同様である。杭穴が1個検出されたが、壁面に片寄せられ長辺の3%の位置にある。

DK04は長辺200cm、短辺120cmであり、中央位置に杭穴が穿たれている。以下が擾乱され不明である。土壤は造構の断面図に示す状況である。埋葬土よりの文化遺物は、土器片数点を出土したのみである。土器片は、いずれも弥生終末期の器類片であった。（第20図）



第24図 土壌状造構平断面図

(4) 棚立柱建物址（S B03）

建物址1棟が検出された以外に柱穴は数個検出されているが、建物へと発展するものは1

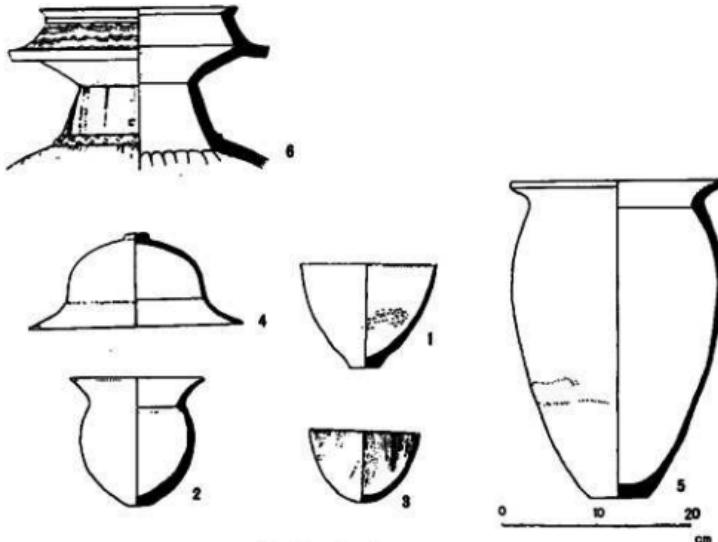
棟である。建物は桁行間2間、梁間1間の切妻が考えられるが、建物の主軸は桁行を南面に配した西25度南に取っている。柱間の心心間距離は、桁行南面側で全長600cmと北側面で650cmが計測され、若干の差異が見られる。また、梁間は西面で225cm、東面で225cmである。

3 東本II次に見る炉址の遺構

長方形と円形を有する竪穴式住居址には、いずれも住居の中心位置より南壁面に片寄った側に炉址が検出された。炉址は共に外形はT字状を呈するもので、当地方では初見の炉址遺構の形態である。(第23図)

図に示す様に長辺170cm、短辺70cmで、長辺の北側面中央部に1辺70×50cmの長方形の造り出し部分をもつ長方形住居址の炉址に対して、円形住居址では、長辺210cm、短辺60cmの長方形の炉址中央部に前者と同様の造り出し部1辺60×70cmの方形炉址を作るものである。長方形の炉址は、両者とも浅い造りで、周辺部に10cm幅の周溝をもって区画されている。これに対して、中央部の造り出し部分は又いずれも深く掘りこまれており、掘りこみの底部から土器及び土器片と木炭を含む堆積物からなる灰層であった。

長方形の炉址においても、炭の細片及び灰層は認められるものの、造り出し部分にみられるような厚層となっていない。炉址部分における遺構は、両者共に同様な規模の遺構に対し



第23図 出土遺物実測図

て、炉址周辺部における状況については、やや異なる造構となっている。

炉址部分圓に見られるごとく、円形竪穴住居址においては、T字状炉址の前方部(造り出し)に、直径2.5mに円形に配列された杭柱穴が見られる点で、明らかに前者とは異なる造りとなっており、他の部分としやへいするなんらかの障壁が作られていたことを意味する。

円形の杭柱列の中央部に直径60cmの円形の凹みがあり、若干の灰層が認められ、発掘過程で炉址を見ていた場所であるが、前述の造り出し部に見られる炉址壁面の焼成痕とは異にするものであった。

以上、両者にみる炉址造構は、他の住居址等において検出される造構とは、まったく異なるものであり、さらに住居址内より出土するその他の文化遺物においても、同時期における住居址において検出される遺物は、当方では量的に、また、形態的にも豊富であるが、両住居址内において検出された遺物は少量で、しかも小型の土器類であった点等、他の住居址と異なり、両造構では共に共通する出土状況であった。

4 東本Ⅲ次における造構と遺物

東本Ⅲ次は、アパートの建替え工事中に発見された造構及び遺物である。同地点は、東本Ⅱ次調査地（北方）の磁北直線距離で100mの位置にある。

調査地は、すでに前次における建築物のため、そのほとんどが擾乱されており、わずかに進入道路面においてのみ造構が検出されたものである。ちなみに調査可能な範囲は、建築予定面積の10×15mの内5×10mであった。

(1) 造構

検出された造構は、長方形の隅丸による竪穴式住居址1棟であった。造構は面積的には発掘可能な状態であったが、一部地山面の削平により、掘りのみ面である竪穴の壁面が消滅しており、また一隅は完全に擾乱された状況で調査不能であった。

竪穴式住居は、長軸を東西方向に取る(N33度E)隅丸長方形の住居である。主柱は、長方形の長辺に対する対称線上に2柱穴をもち、さらに、四角からの対角線に位置する内径部に隅柱の柱穴が検出された。(第26図)

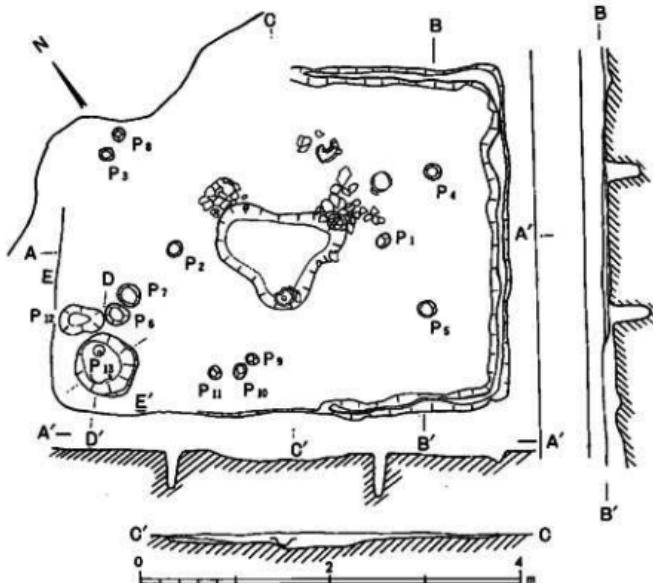
柱穴の心心間はP₁とP₂で2.2m、長辺部に平行する柱穴P₃とP₄では3.35m、P₅とP₆は3.3m、短辺壁面部でのP₄とP₅は1.45m、P₆とP₃は1.9mで、長辺での壁面に見る柱穴心心間距離3.35mに対して、南西では3.3mとやや縮約している。これに対しての短辺の東壁面では1.45mと、西壁面の1.9mとなっており、その対比0.45mの差を示している。この柱穴からして、P₁とP₂の棟持柱に対してP₃・P₄・P₅・P₆の4柱は、それぞれ隅柱としての性格をもつ柱穴と考えられる。

その他の柱穴に、P₇とP₈がある。この柱については、松山市小坂町益ノ口第Ⅰ次調査において検出された、竪穴式住居址SB03の複合柱に類似するものである。

主柱に対する補強的な柱穴造構と推察される一方、西壁面の擾乱による調査不能地域であることから、確証的な結果は発見しがたい。

竪穴式住居の平面規模は、長径4.7m、短径3.5mで、それぞれ四隅からの対角線の交差地点に炉址が検出された。炉址は竪穴同様に長壁面で1m、短壁面0.5mの長方形の炉址が検出されたが、南壁面側では、炉址は円形の造り出し部があり、全体的な形態はT字状をなす、T字状の突端部に蓋形土器を出土している。住居内における遺物の出土状況は、第27図による状況であった。主柱P₁とP₂を中心線におき、長軸の棟方向に2分するとき、北側に位置する側に集中的な出土をみた。更に図に示すごとく、出土遺物はP₄とP₅を結ぶ線上から東側壁面にかけては無遺物層となっていた。また、P₃・P₁・P₆の柱穴を結ぶ西壁面でも、これまで無遺物層であったが、ただ室内に掘りこまれた土壇があり、土壇内の遺物として蓋形土器2個がある。

住居址の東半分に相当する壁面には、周溝をめぐらしているが、西側半分では以前に耕地整理が実施されたことにより、耕作地の平坦化と拡張による地山削平が見られ、一部に周溝



第28図 東本3次竪穴式住居址平面図

の痕跡を見る程度であり、詳細は不明である。

南壁面の中央位置に穿たれた柱穴 P₉・P₁₀・P₁₁がある。これら P₉～P₁₁の柱穴については他の P₁～P₈の柱穴とは目的を異にするものと推察されるが不明である。

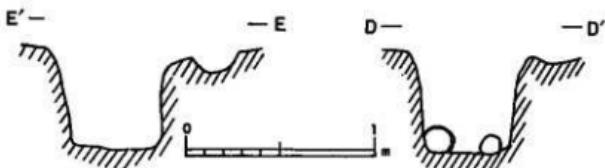
土壌状造構 P₁₃は、竪穴式住居址の西隅に位置する側に、直径64cmの円形土壌である。土壌断面図によられる掘り方は、円形の素掘り方法で75cmの深度をもち、洪積台地の粘土層内につくられており、内部出土遺物は2個の壺形土器であった。土壌内での埋積土は図版第32図に示す状態で、わずかに土壌底部に汚染層が認められたが、土壤分析を実施していないので詳細は不明であるが、まず貯蔵穴と判断される遺構である。（第27図）

5 遺物の出土状況

SB01とSB02での出土遺物は少なく、第25図に示す土器の内SB01に出土をみた、1～4のみである。5・6は東本1遺跡出土の土器である。東本II次で検出されたSB02は、無遺物の遺構である。東本III次のSB01では、炉址周辺部から壺形土器と碗形土器を出土しており、SB01の西南すみに穿たれた土壌状造構から直口壺と壺形土器を出土した。東本I次調査の東本1遺跡については、四電発掘調査報告書に詳細を発表し、ここでは関連遺物を転記したものである。

(1) 東本II次における出土遺物（第25図）

1と3は碗形土器で、1は器高10cm、口径14cmの平底3cmからゆるやかに内弯気味に立ちあがり、体部最大径位置でカットして口縁部を造り、口唇端面は内傾した面をつくる。器表は縦走向にヘラ磨研が行われている。内部は壁面一帯に斜向する描き成形による入念な仕



第27図 住居址内の土壌状造構断面図

上げとなっている。この土器に対して、3では丸底の器で器厚は均一な断面を示し、1とは異なる。口径11.5cm、器高7.5cmで1より内寄り、口唇端面は共通するカット口縁となっていいる。器表面及び内壁面ともに、右上端部より左向行に弯曲した構描き成形が入念に、しかも左手の助けをともないながらの作業工程がしのばれる。

2は口縁部径14cm、頸部外径10cm、器高14cmの平底2cmが計測される。肉厚な平底の底部から外反したのち、大きく内寄りして立ちあがり、胴部最大径を中位にたもち、にくくすぼめられた頸部で大きく外寄りして朝顔形の口辺部をつくる。口縁部は体部の胴張りより大きい。頸部内面には明瞭な稜をなす。器表面はヘラ磨研による調整が、内壁面は構描き成形が残っている。口辺部は内外面とも入念な斜向走の構目が弧を描いている変形土器である。

4は、SB01の西壁面の周溝部で検出された壺形土器である。口縁部径22cm、器高10cmで、天井部に平底風の直径2.5cmのつまみがある。器形はつまみ状の平底から大きく外折したのち立ちあがり、頸部で内外面に稜をなしたのち、大きく外寄りした口辺部をつくる。口辺部は内外面共に構目の成形痕を残すが、天井部から頸部にかけてはヘラ磨研である。

5と6は、東本I次で検出された土器である。5は壺形土器で、口縁部22cm、器高34cm、底部は6cmの平底である。肥厚な1.5cmの平底から外反気味に器厚を減じながら立ちあがり肩部でゆるく内寄りしてすぼまり、頸部を作ったのち外折してくの字口縁をなす。器表面はヘラによる磨研である。口縁部の内面は、横走向の構描きである。底部より10cm位置に焼痕が付着している。胴部最大径は22cmと口縁部と同径値である。焼成よく、胎土に0.3cm以下の粒子を含む。

6の壺形土器は、口頸部のみの遺物である。胴張りの大きい、大型の壺形土器である。頸部は大きく内傾した立ちあがりを見せ長首をつくり、口縁は外反したのち再び折れて、水平な口縁上端面を造り出し、この水平な上端面に輪積手法の口辺部を接合し、複合口縁の壺形土器の口縁部を完成させている。輪積の口縁端面を、窓状工具により押圧成形による、断面三角形の口唇端部をつくる。口頸部の欠損遺物で明らかに肩部、頸部、口辺部、複合口縁部と輪積技法による製作工程を示す土器である。体部と頸部の接合部には、明瞭な指頭圧痕を内部に残し、外表面には断面三角形の凸帯が貼り付けられている。凸帯上端面を構状工具による、斜行する押圧文がある。長首の頸部には、縱走行する5本歯による意図的な施文がほどこされている。複合部をなす口辺部には、3条の5本歯による波状文がある。口径21cm、有舌部径27.5cm、頸部上端12cm、頸部下端部外径28cmである。

(2) 東本III次における出土遺物

東本III次調査における出土遺物は、出土位置から大きく2分される。1つは、住居址内の炉址を中心とする出土遺物と、いま一つは住居内につくられた、土壤内での出土遺物に分かれる。炉址周辺での出土遺物は、壺形土器、變形土器、高环形土器、壺形土器と壺形に類す

るコップ状の小型土器類である。図版第32図にみる出土状況であった。炉址周辺部出土の遺物は実に細片化し、しかも還元状態のものが多く、土器計測は不可能であり、わずかに形状をたどる程度であった。この出土状態の内で、炉址南面で検出された壺形土器である遺物は、東本II次のSB01で検出された土器に類似するが、ややIII次は小型である。

6. 小 結

東本遺跡は、四国電力株式会社による発掘調査の第一次調査地を東本I遺跡とし、エヒメコーポによる発掘調査地を東本II遺跡とし、第III次は近接する宅地を対象としたもので、方300mの範囲で調査したものである。東本Iは、地下ケーブル埋設工事にともなうもので、幅5m、全長100mのベルト状地域を調査したものである。遺構は、竪穴式住居址の一部を検出した他に、溝状遺構を検出した。竪穴式住居址は、壁面の一部を検出したものであるため、遺構全体の把握は困難であるが、壁面には周溝を巡らしたベッド状の床面をもつ住居址を確認している。同地域での出土遺物は、第25図に示す土器実測図の内、5・6の遺物がある。遺物5・6は、ともに器形・焼成とともに良好な遺物である。5は壺形土器であり、6は複合口縁の壺形土器である。6の口縁部の形態からみて、大型の壺形土器が推定される。この形式の壺形土器は意外と出土例が多い。たとえば、中村1遺跡の溝状遺構出土土器、小坂3丁目遺跡、小坂釜ノロ第III次、天山天王ヶ森遺跡に6は類似する遺物である。

当地における弥生式土器は、普遍的に各遺跡より出土しており、弥生後期に編年される土器であるが、口縁部の変化から発展・退化への推移を示す土器群の内、特に顕著な変化をたどっている。

東本II遺跡におけるSB01（円形竪穴住居址）及びSB02の（長方形竪穴住居址）に見られるT字状に穿たれた炉址は、いずれも当地方では初見の遺構であり、しかもSB01～02と共に共通する炉址をもつ点に大いなる関心がもたれる。炉址は共通したプランを持つが、それ以外については住居址自体の平面プランは図示されるごとく相違し、さらにSB01では土器を僅かに伴なうが、SB02では文化遺物は皆無である点等、少なくとも相異なる問題を提起する遺構である。その他に共通する遺構としては炉址の住居址内での平面プランにおける位置の他に、共に入口としての掘り込み等はまったく検出されなかった点においても共通する遺構である。

以上のことながらは本文でもすでに記述したところではあるが、筆者は当地における他遺構にて検出された炉址や住居址について若干の例をあげながら、当遺跡との考察を試みたい。

まず炉址の形状としては円形炉址がもっとも多く、しかし炉址の中央部に向うに深い深さ

を増して半球形状を示すものA型、炉址の平面プランが橢円形をなし掘り凹みが舟底形になるものB型、炉址のいずれか一面が大きく凸面プランをもち、舟底形に掘り込まれるものC型、C型の凸面部分も同様に舟底形に掘り凹めたものD型、炉址の平面プランは円形や橢円形及び凸面（三角形）形をとわず、その中央部のみ僅かに掘り凹めたものE型と分類する時最も通常型と見られるものはA型が多く、しかも炉址A型は竪穴住居址内で中央位置をしめる割合も大きい。B型は炉址位置が僅かか、または大きく壁面に片寄る傾向が見られ、しかも長軸面に移行するきざしがみられる。C型は、2主柱を中央部の床面にもつ長方形の竪穴住居址に多く見られる。D型は主柱5本、6本、8、9本にみられ、中央部に4主柱を伴わない竪穴住居址に多く見られ、しかも住居の入口に面して凸面は反対方向に多く見られるE型炉址は、そのほとんどがベッド状プランを壁面にともなう竪穴住居址に多く見られる共通性があり、やや中央位置よりいずれか一方に偏する状態が多い。

また炉址と主柱との関係及び主柱の心心間距離と竪穴住居の壁面距離における比において一種の共通性がみられる。

1例

主柱4本の中央位置（各柱の対角線の交差地点）でA型炉址をもつ炉址においては、対応する壁面距離と心心間距離は1/2か1/2以下にある主柱の配置となっている。

2例

主柱4本で長方形プランをもつ中央位置が、主柱に対応する壁面を2等分する位置を示す炉址にB型が多く、壁面距離と柱心心間距離の比は、1/2から拡大されるにしたがいB型の炉址位置は壁面へと移行する。

3例

例2に見られる住居址プランの内、壁面距離と主柱心心間距離の比が特に2/3以上に拡大された主柱心心間距離値を示す住居址に多くみられ、家屋の棟方向は東西に採り、南面する桁面をもつ採光豊かな家屋配置が推測され、入口は平入の南面する桁面に設けるものが多く、しかも中央位置から東隅柱に向う範囲に採るものが普遍化される傾向にある。また炉址はC型及びD型の形式をともなうものが多い。

4例

E型の炉址を持つ住居址では、そのほとんどが、壁面にベッド状の床面配置がみられる内で、少なくともベッド状プランには二様式が現在検出されている。その1つは、多角形の床面プランをもつ竪穴式住居であり、今1つは方形または長方形の住居址である。後者の住居址にあっては、室内を二分して利用したと推定される杭穴例がみられ、しかもベッド状造構は、片隅にのみつくり付けられ明らかに二間造りと推測される例として、星岡遺跡、旗立B区のSB04がある。また、この炉址には支持用の触角付の支脚形土器を伴うものが多く、また屋外においてもE型炉址をともなう桑原高井遺跡のSB02があ

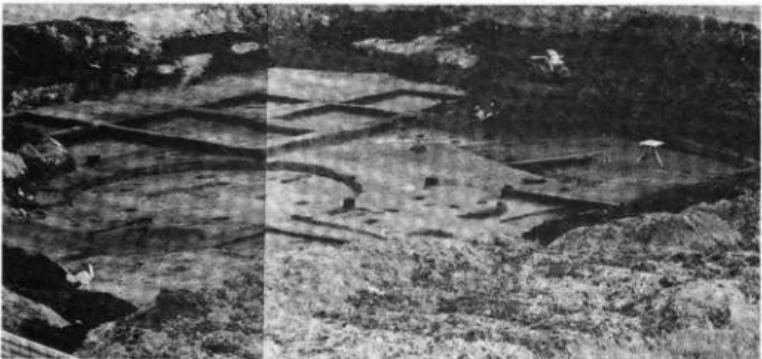
る。

以上当地方において検出された炉址と住居址との関係をまとめたものであるが、これ以外に今後さらに遺跡の調査がすすむにつれ、より明確にされる日も近いと推定される。とはいってこれらの類型に属さない、また、まったく特殊な遺構（炉址）をもつ本遺跡での、遺構のものも機能的意義について若干の考察を行ってみたい。

S B01とS B02の炉址遺構は、当地方で検出される遺構とまったく、遺構の形態から見ても、また平面プランでの位置的配置からみても特異性をもつ遺構である。

まずS B01にみられる（第20図）での炉址周辺にやや同心円上に配列された杭穴列は、明らかに炉址周辺位置と他域とを隔離するための、障壁的な遺構と見られる。だが一方S B02における炉址の周辺にはS B01の炉址周辺にみられる障壁的な遺構はなく、ただ前述のT字状の炉址のみが検出された。炉址の構造がまったく共通することそれ自体に、すでに何等かの呪術的な共通概念があり、この共通する呪術的儀式に必要な炉址遺構とみるべきであろう。

束 本 版 遺 跡



東本II次の発掘区
全景

発掘区全景と周辺
部の状況

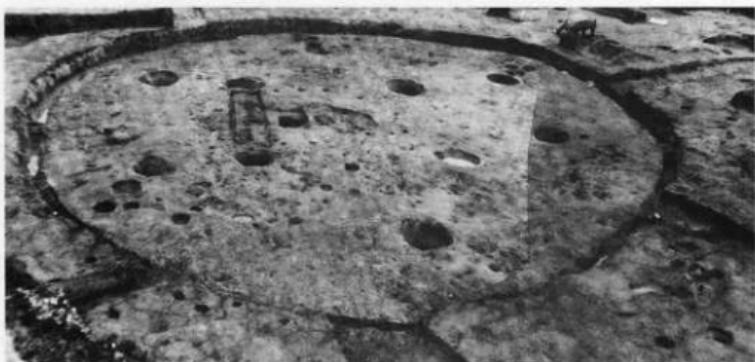


豎穴式住居1号を
北面より写す。
手前に土壤状遺構
がある。



(東本遺跡I)

図版第23図 発掘区全景



上 1号住居址の
全景



周溝の状況



周溝内より出土を
みた壺形土器

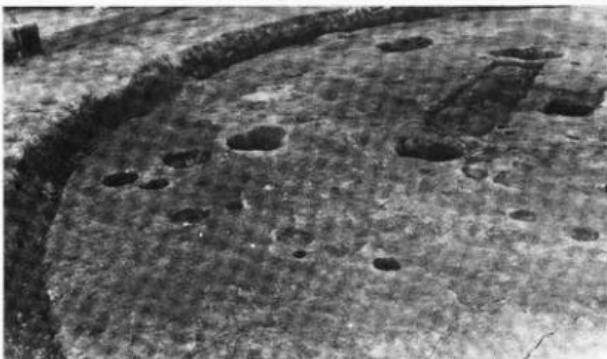
(東本遺跡 2)

図版第24図 1号竪穴式住居址 1

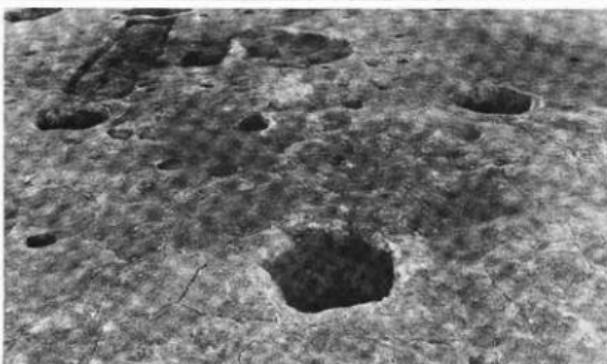
1号住居址の遠景



←2号住居址
←土壇状遺構No.1



1号住居址に検出されたT字形の炉址



炉址をとりまく、円形にめぐらされた杭穴列

(東本遺跡3)

図版第25図 1号竪穴式住居址 2



1号住居址のT字
状炉址



2号住居址におけるT字状の造出し
部の掘りこみ状況

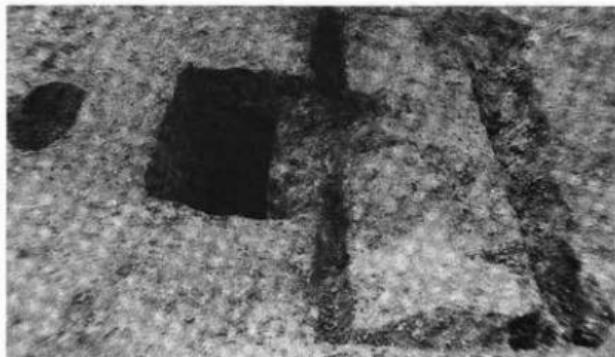


2号住居址のT字
状炉址

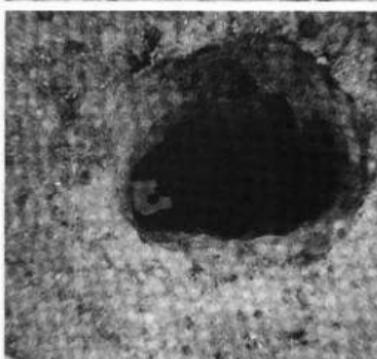
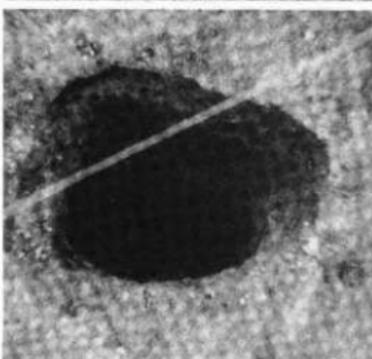
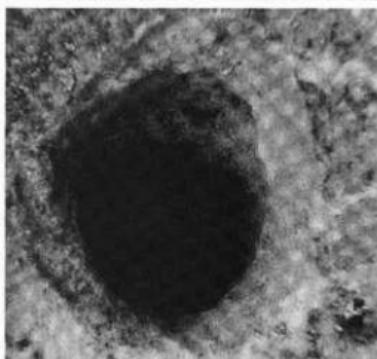
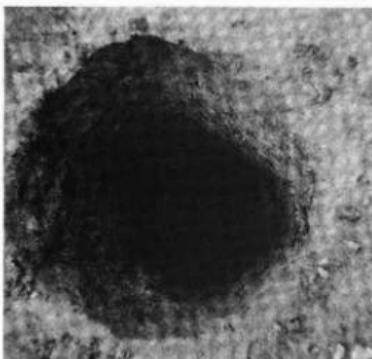
(東本遺跡 4)

図版第26図 炉址の状況

右
2号住居址の炉址
完掘状況

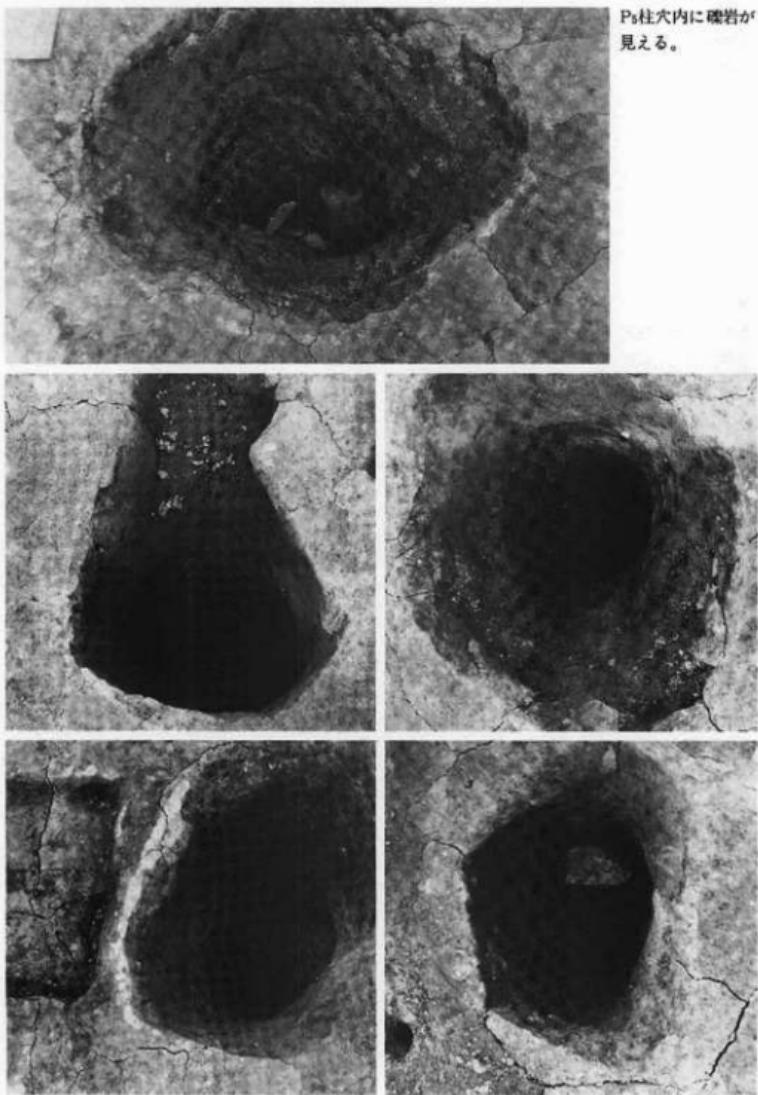


下
2号住居址の柱穴
の掘り方



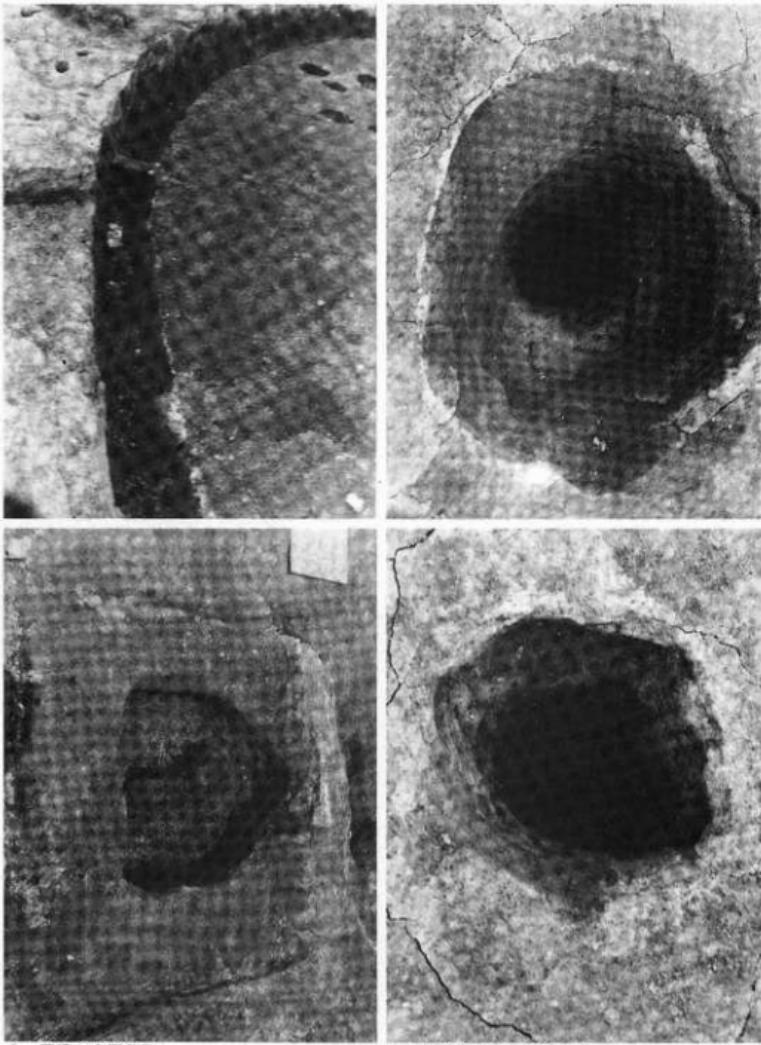
(東本遺跡 5)

図版第27図 柱穴の状況



(束本遺跡 6)

図版第28図 1号住居址の柱穴状況 1

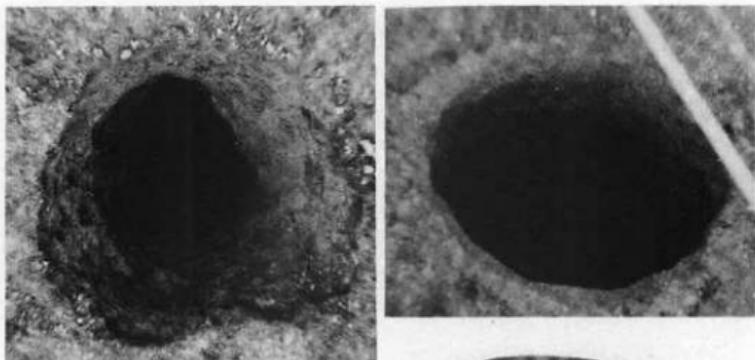


上 周溝の完掘状況
下 PitNo.11の状況

上 掘り方と柱穴を持つP₁
下 明確でないがP₁と同様のP₂

(東本遺跡 7)

図版第29図 1号住居址の柱穴状況 2



蓋形土器 $\frac{1}{3}$

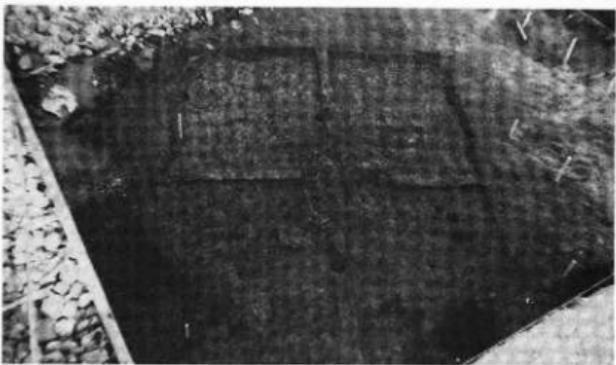


(東本遺跡 8)

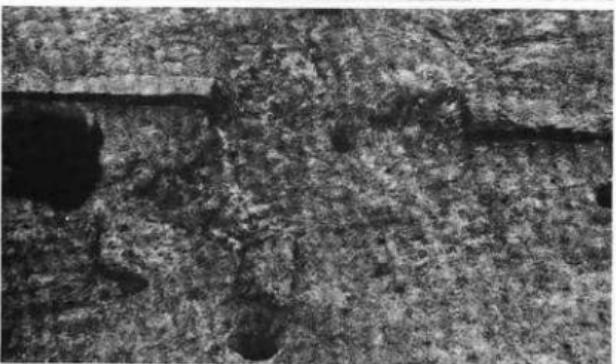
周溝内で検出された
蓋形土器

図版第30図 1号住居址の柱穴状況 3

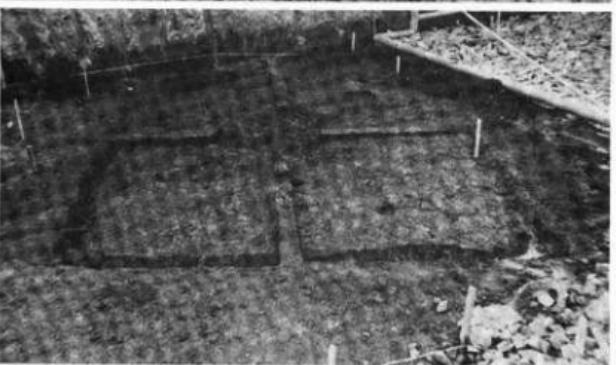
東本田次出土の住居址
西面よりの全景



手前にサイロス(貯藏穴)がみえる。
中央部は炉址



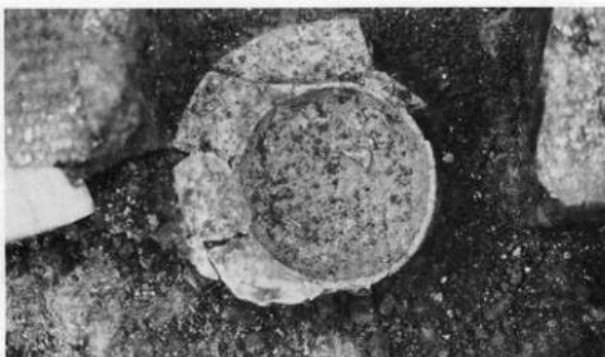
東面よりの全景



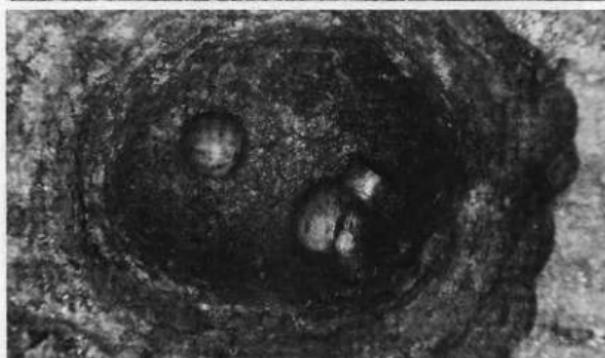
(東本遺跡 9)

図版第31図 積穴式住居址の出土状況

中央炉址の南面の
造り出し部で検出
された蓋形土器



貯藏穴内で検出さ
れた遺物

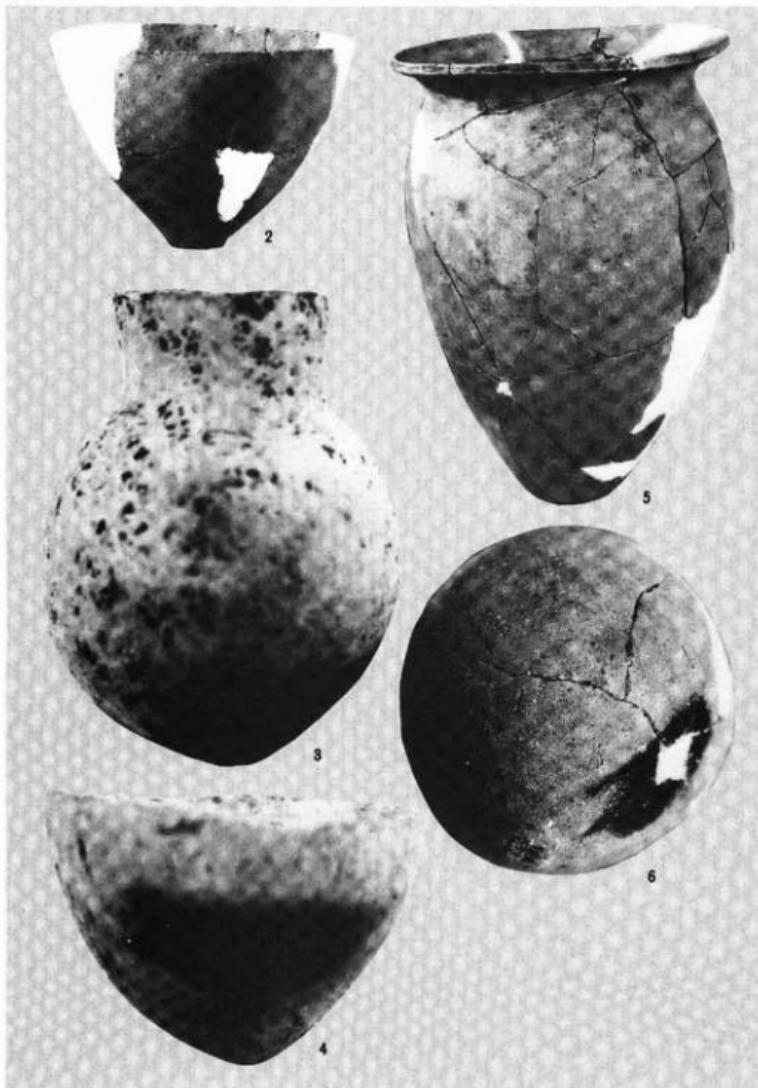


完掘後のサイロス
の状況



(東本遺跡10)

図版第32図 遺物出土状況



図版第33図 遺物

(束本遺跡II)

桑原高井遺跡

IV 桑原高井遺跡

1 行政的位置と発掘経過

桑原高井遺跡は、松山市桑原町782番地に所在する遺跡で、遺跡の絶対的位置は北緯33度49分50秒と東緯132度47分04秒で交差する付近である。地目は乾田で、稻作や草花等、多彩な栽培がなされている。当地に株式会社松山電気ビルによる、社員住宅建設計画が提出された。当地域は、すでに上水道埋設工事及び市道改修工事等により、該当地域1.5km²にわたる地域を弥生中期より古墳時代における遺物包含地域として桑原高井遺跡に登録されている。株式会社松山電気ビルと市文化教育課との事前協議により、開発計画を延期し、昭和50年12月15日～昭和51年1月31日の間に実施された。記録保存を主目的とする発掘調査を行い、調査期間中に3回の現地説明会を実施した。特に、地域住民の関心も高く、また、周辺地域は特に年々に宅地造成への進行がめざましい。宅地化・市街化の進行が、現地説明会にもよく現われ、実に熱心であった。冬季の発掘調査における遺構、遺物の凍結防止には特に留意した。

2 地理的環境（東本を含む）

桑原高井遺跡は、松山城の南を流れる石手川の上流岩堰に出る。岩堰の南西一帯に広がる西に傾斜した緩斜面に當まれた遺跡である。緩斜面は、遠く四国山地の靈峰石鎧山より、分岐した山系端部に位置している。分岐山系は觀音山(518.1m)、杉立山(667.3m)と連峰をなすが、杉立山を過ぎると分岐山系は急に起伏を減じて、芝ヶ峰(282.2m)、淡路峠(220m)と至った後、東野のお茶屋台地へと続く洪積台地の山麓地帯を形成している。更に起伏は西に

●印は桑原遺跡

Map III 三島神社前方後円墳付近の地形図と遺跡



延びて、かつては中村町（素鷺小学校）及び祇園町の立花山（素鷺神社）の極小な残丘へと続き、分岐山系の尾根を保っていたが、岩場の開発（足立重信）により、これらの独立丘陵は、石手川の堤防工事により削平され今日に至る。また一方、東野谷より流れる川付川は、芝ヶ岬・淡路岬の西山麓に続く低位のお茶屋台地を開拓して、南北に浅く開析谷が形成されている。また、この地域は高綱山系の南端でもあり、溝辺からお茶屋台地の一部は花崗岩であるが、和泉砂岩を基盤とする地層から形成されている。さらにその上部には、黒色の火山灰土層が堆積している。お茶屋台地は、南端部で二つの舌状台地となり、その東部の舌状台地に位置する微高地を利用して三島神社古墳を營造し、さらに西側の台地先端部にも、ほぼ同規模の前方後円墳である経石山古墳が營造されている。

3 歴史的環境（束本を含む）

東野お茶屋跡台地から西に広がる一帯、すなわち石手川より川付川に至る間の東高西低の扇状地形が、かつては集落の北域に素鷺山と立花山で分岐山系の尾根を保ちつつ、南にゆるく傾斜した地形をなし、緩斜面の南端は川付川の開析作用により、自然的な集落の立地条件を作り出した。いいかえれば、古代の集落形成を可能ならしめた立地条件にある。とすれば、東野谷から西に広がる扇状地形にある。これら一帯の集落形成は、特に弥生中期より部落形成の進められた地域と見ることが出来る。古くは三島神社古墳の封土中より検出された縄文後期の遺物はあるにしても、集落形成は、松山平野北部の御幸山麓一帯や、久米山田池を中心とする周辺地域からすれば、ややこの地域はおくれた時期とも推察される。東野のお茶屋跡台地には、かつては100基に近い古墳が營造され、この地域の聖域であったと考えられる。これらの古墳は、10m内外の円墳で、しかし主体部は箱式石棺をもち、周溝をめぐらした小円墳群が、また、それ以前には、弥生時代の土壙墓が存在していたことが知られている。この周溝をめぐらした小円墳の箱式石棺の後に、さらに奥まった、東野谷に横穴式の石室主体部を伴う古墳群が、山神神社の円墳を中心に營造されたものであろう。東野谷を中心とする横穴式石室を伴う古墳の營造に先がけ、前述の前方後円墳が、東野お茶屋跡の台地（聖域）をさけた台地南端部（先端）の舌状台地に、政治的な集落形成を物語る、前方後円墳が營造されたものと筆者は考察している。

当地域内の遺跡は、溝辺町の丘陵上にある縄文時代の後期に属する遺物の他は、中村町素鷺山周辺での弥生前期を筆頭にし、それ以外ではそのほとんどが、弥生後期以後の遺構がその中心である。東野古墳群、お茶屋台遺跡、お茶屋台古墳群、樽味町遺跡、桑原高井遺跡、桑原小石原遺跡、東本町遺跡、中村町遺跡、小坂釜ノ口遺跡、末壁遺跡、枝松5・6丁目遺跡等が、今日知られている遺跡である。これらは、台地に冲積層がおおいからなるものが多く、遺構そのものは、みな台地に掘りこまれるもののがすべてである。

4 発掘日誌

- 昭和50年12月15日 月 I-1～I-6、H-1～H-6のグリッドを設定。グリッド設定は真北を基準とした。本日はH区・I区の表土排土を中心的に行った。(調査方法を説明する) トレンチの結果から(重複)の複合遺跡である。
- 12月16日 火 H-2～H-5、I-2～I-5表土排土及び振り下げ作業。I-6、I-5～I-3、H-2～H-5多量に弥生後期土器片を出土する。H-5、H-4地区の平板測量。(作業方法・発掘方法について説明する)
- 12月17日 水 I-2、I-3地区表土排土作業。I-5振り下げ作業及び測量を実施。I-5地区において、ほぼ完形の壺及び器台(支脚)を検出する。H-5、H-4、H-2、H-1、I-5、I-4、I-3、I-2地区を10cm振り下げる。A区、南面をショベルカーにより表土の排土を実施。ハンドブル2台、ベルコン2台、本日より使用開始。H-2地区住居址1の遺構検出作業、H-2地区溝状造構を検出する。
- 12月18日 木 平板測量。I-4、H-4測量%。I-3、I-4、I-5を振り下げ8cm(この地区も多量に土器の出土を見る)。南面及びB区の表土排土を行う。(ショベルカー、ハンドブル使用)
- 12月19日 金 H-2、H-3、H-5平板測量%。J-3、J-4、I-2～I-4、H-2の振り下げを行う。(この地区も多量に土器の出土を見る)。本日もB区の表土排土を行う。H-2、H-3グリッドにおいて黒土層に切り込んだ柱穴(ピット pit)No.1～6の遺構検出を行う。(切り込み層においては遺物の検出はみなかった。)
- 12月20日 土 H-4、H-3、Gをさらに黒土層30cm振り下げを行う。(遺構検出) H-4、Gにおいてpit状造構及び振り込みを発見する。H-3 Gにおいて土括状の振り込みを発見する。

K-3、K-4掘り下げを行う。10cm。B区排土作業（ショベルカー、ハンドブル）。

12月23日 火 H-1、I-1、J-1の掘り下げを行う。(10cm)。H-2、I-2の平板測量 $\frac{1}{2}$ 。グリッド設定A区J-L8を終了。H-3Gにおいて土壌を検出する。（土器片少量）(No.1貯蔵穴の想定)。

12月24日 水 H-1、H-2、I-1、I-2黒土層の掘り下げ10cm。J-1耕作土の排土完了。K-4、K-5の耕作土排土作業。平板測量H-2、H-3 $\frac{1}{2}$ 。H-3、H-4、H-5を完掘する。H-3のNo.1貯蔵穴を完掘する。

12月25日 木 H-1、H-2、J-1、J-2、I-1、I-2遺構検出作業pitを完掘する。K-2遺構検出pit2を確認と焼土の検出をした。K-3pitNo.1~12完掘する。K-4溝を確認検出作業。平板測量J-3~J-4 $\frac{1}{2}$ 。K-1~K-2第一層完掘する。(J-3、J-4)。

12月26日 金 K-3GpitNo.1~24を完掘する。(新たにpit2確認する)。K-4Gの溝を掘り下げる。K-5G~J-5の溝も掘り下げK-2の掘り下げを行う。pitNo.1~8を完掘する。H-6の掘り下げを行う。土壌墓を発見し一部掘り下げをする。歯牙を3個確認。K-7の掘り下げ及び遺構検出。pitNo.1~2を確認する。粘土塊を検出G-8~G-9の掘り下げ(10cm)。I-8GpitNo.1~2、I-9GpitNo.1を確認する。

12月27日 土 TP-2を発掘する。歯牙の検出をみる。

12月28日 日 H-10G掘り下げ(10cm)。TP-1の掘り下げを行う。T-10の遺構検出作業を実施。出土遺物の運搬(桑原~古照)。道具類運搬及U補充。

昭和51年1月5日 月 TP-1発掘を行う。鉄属-4、香炉形土器1出土。TP-

3の発掘。歯牙検出する。

- 1月6日 火 TP-1(土壇墓)を発掘する。TP-6(土塊墓)を発掘する。枕石を検出した。TP-5(火葬墓)完掘する。H-8~H-11周辺遺構検出作業を行う。耕作土の排土作業。
- 1月7日 水 H-12、I-12、J-12(第一層振り下げ作業)。TP-7~TP-10振り下げ作業。
- 1月9日 金 I-4、J-4において竪穴式住居址を確認する。この地点を重点的に調査を進める。K-3、K-4 G地区の発掘及び平板測量、B区全測%。西尾・松村。平板測量(A区)%。西尾・松村。
- 1月10日 土 A区SB01を重点的に調査を進める。SB01の発掘(10cm)。本日の調査により東壁面・北壁面・西壁面が検出された。A区平板測量%。松村。B区平板測量%全測、西尾。SB01南部において弥生後期の壺3個(完形品)出土。SB01北部において弥生後期壺3個(完形品)出土。
- 1月11日 日 J-4、I-4、J-3、I-3においてセクション取り作業を行う。竪穴住居址(SB01)遺構検出作業。多量に弥生後期の遺物を検出する。K-3 Gpitを測量する。
- 1月13日 火 SB01の振り下げ作業を重点的に行う。結果、焼土を多量に検出する。柱材の炭化物検出。粘土塊3ヶ所で検出。
- 1月14日 水 SB02耕土排土作業(30cm)。(多量に弥生土器片出土)。SB02の遺構検出作業を重点的に行った(平面)結果、平面プランは竪穴の円形住居址を検出する。(直径7m77cm)。さらにSB02の振り下げ作業を行う。
- 1月15日 木 SB02の床面まで振り下げを重点的に行う。SB02の振り下げ作業。SB01(平板測量)%。SB02(平板測量)%。B区土

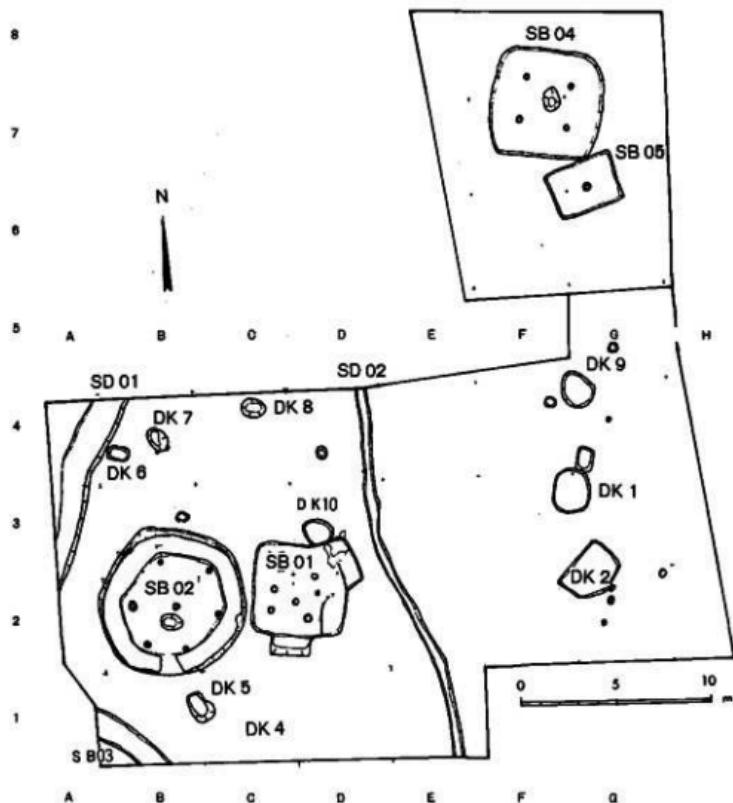
土壤No.2測量。

- 1月16日 金 B区土壤No.2完掘(土器少量)。SB02掘り下けを行う。(一部完掘)。
- 1月17日 土 SB02の発掘を重点的に行う。多量の土器を出土する。プランは二重の掘り込みであった。No.1貯蔵穴も完掘する。計貯蔵穴2。SB01の床面を調査する。SB01~02全面写真。
- 1月18日 日 SB02の床面の調査を進める。(K-1~K-2グリッドより多量の土器を出土した)。完形品5。H-1、I-1、J-1の調査を進める。SB02ベッド状造構の土器とりあげを行う。SB02ベッド状造構の平板測量%。
- 1月19日 月 SB02の西面での溝状造構(住居の周囲掘り)の調査を進める。SB02平板測量%。SB01の床面調査(炉址を検出)。ベッド状造構の平板測量%。
- 1月20日 火 SB02の床面の調査を進める。pit6を検出する。炉址2柱材の炭化を多量に検出。SB02西面の周囲における造構を発掘。貯蔵穴1を新しく検出する。(完掘)。SB02より出土遺物を平板測量して採集する。
- 1月21日 水 SB02南面(K-1、K-2、J-1、J-2)部での遺物の検出及び平板測量%。SB02ベッド状造構と床面調査及び遺物検出作業。EG~GG区の拂土及び造構検出作業。W面における周囲掘り造構の周辺調査を進める。(pit及び土壤1を完掘する)。
- 1月22日 木 EG~FGの調査を進める。新しく隅丸方形住居址を検出する。SB03とする。4本(住居内)柱を想定の内2本を検出した。SB01・SB02より竪穴の掘り込みは浅い壁面となっている。
- 1月23日 金 SB03の調査を重点的に進める。床面より4本の柱穴を検出

する。SB03の調査を完了する。SB03の南面の掘り込み（堅穴）造構の調査を進める。SB03においては、他の住居址より検出遺物は少ない様であった。

- 1月24日 土 本日より少數人數で調査を進める。SB02の平板測量 $\frac{1}{100}$ 。SB02の断面測量。SB02の床面において、中央部でpitを検出する。この遺跡の海拔を出す。35m87cm7mm。松山市松末町より（橋）の手前、建設省基準ポイントより引く。（大山・西尾）。今日までの出土遺物を運搬する（桑原→古照）。
- 1月25日 日 A区平板測量（松村・石田） $\frac{1}{100}$ 。祝谷古墳確認調査（午後）。森・大山・西尾。
- 1月26日 月 A区平板測量 $\frac{1}{100}$ 。SB04及びE区～F区を重点的に造構検出にかかる。
- 1月27日 火 TP及び火葬墓の断面図作成。SB04完掘及び平板測量と断面図作成。
- 1月28日 水 A区全面測量 $\frac{1}{100}$ （松村・大内）。本庁にて調査について午前中打合せを行う。天山調査について検討する。
- 1月29日 木 A区全面測量（平板測量 $\frac{1}{100}$ ）を実施する。B区の断面測量をする。SB01、SB02の床面断面図を作成する。
- 1月30日 金 A区全面測量（平板測量 $\frac{1}{100}$ ）。本日にて発掘調査を完了する。電気ビルKLに対して、本日付で調査完了通知を行う。
- 1月31日 土 土器整理作業（桑原高井遺跡）（洗浄・復原・注記作業）
（作業→古照資料館・松村）。祝谷の古墳調査準備（西尾・越智）
他、資料館にて実測、トレース原図作成作業。

（西尾 幸則）

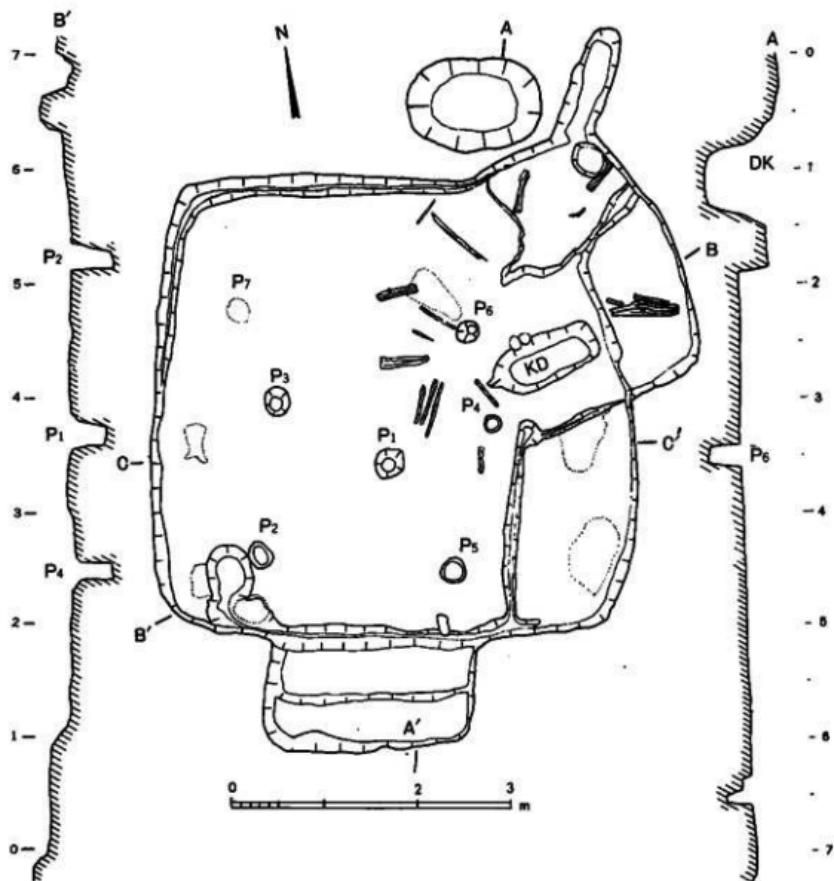


第28図 桑原高井遺跡発掘区造構全測図

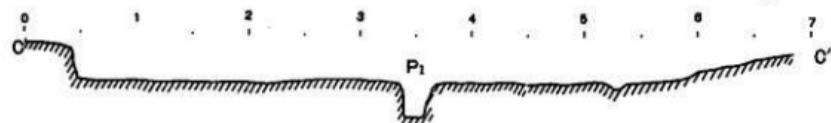
5 遺構の概要

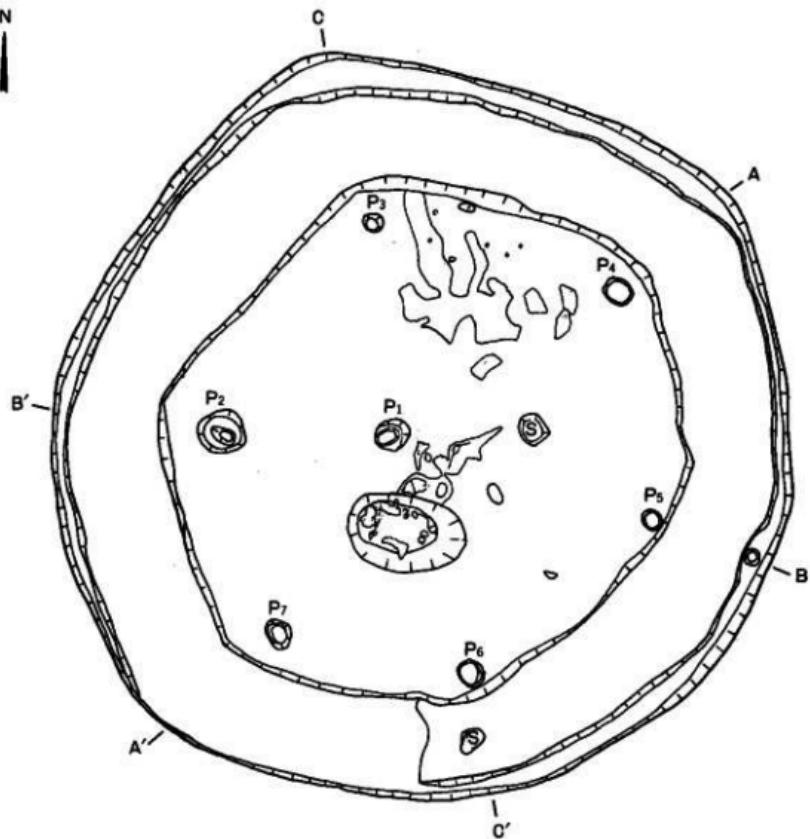
桑原高井遺跡における発掘区内で検出されは遺構は、第28図に示すものであるが、主な遺構をあげれば、竪穴式住居址（SB01～SB05）が検出されたが、内 SB03は、発掘区境外にその遺構の主要部分を残したもので、住居址であることの確認はできた遺構である。また、溝状遺構（SD）は、図示されるものの外に数条あり、いずれも北から南へ走行する溝を検出した。さらに第35図に見る S D 05及び06の溝には、青灰色の土壌を含むもので、SD01～04に見る溝状遺構とは明らかに異なる時期の遺構である。

土壌状遺構 DK 1～10を検出した。DK の時期的な面では、出土遺物により3～4の時期が



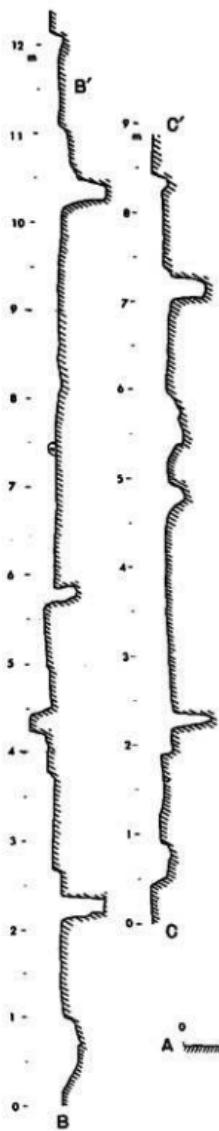
第29図 1号竖穴式住居址の平面面実測図





0 1 2 m

第30図 2号竪穴式住居址実測図 (SB02)



考えられ、一時期の土壤としてはDK4・5と、DK6・7・8に、DK2・1・9が区分される。また、これ等の他に火葬墓(TP)が検出されている。

6 検出された竪穴式住居址遺構

(1) 1号竪穴式住居址 (SB01)

1号竪穴式住居址は、主軸方位を北11度東に採る入口を南面に持った1辺5mの方形住居址である。住居の東北隅には、入口部同様の造り出し部分が見られる。この造り出し部には、粘土塊が大量に検出された外に、灰及び木炭の細片を含んだ堆積層であった。さらに、造り出し部分の一隅には、煙道と推定される幅60cmの長径130cm、深さ15cmが検出されている。住居の主柱は4本の他にP₁・P₃・P₄が検出されている。これらの柱穴は、シルト層の地山面の床面より、さらに60~80cmの掘り込みとなっている。また壁面に周溝が認められるが、一部に検出不能な部分もある。主柱P₄・P₅側に、床面よりわずかに高く造られたベッド状造構がある。

第29図のA-A'の断面に見られるように、入口部に2段の溝をつくり、床面部分に造られた溝は、ベッド状造構の前面に造られた周溝とが入口部の水も集めるためP₂の傍に掘り込まれたピット状造構に、雨水溜の機能をもたらしたものと推測される。断面A-A'とC-C'に見られるように、床面は実によく平坦化された状態であった。床面には、図示されているように床面にはりついた木炭が検出されたことにより、火災による住居の廃絶と見られる。住居内の遺物は、KDの土壤状造構において集中的な什器類

第31図 2号竪穴式住居址の断面実測図

の検出を見たが、これと同様の土器の出土を見たものに、前述の粘土塊を検出した煙道をともなう造り出し部の遺構よりの出土である。

(2) 2号竪穴式住居址 (SB02)

2号竪穴式住居址は、主軸方位を北15度東に採り、入口部を南西に採る住居遺構である。住居遺構は、中心柱P₁の他に5個の柱穴が検出された。壁面はわずかに六角形を思わせる円形プランの掘り込みが見られ、壁面と柱穴間の床面は、中央部につくられた床面と比高を異にした、ベッド状の床面となっている。さらに、ベッド状床面と壁面との間には周溝をめぐらしている。第30図に見る柱穴の心心間距離はP₂～P₅で270cm、P₃～P₄で270cm、P₄～P₅で250cm、P₅～P₆で250cm、P₆～P₇で210cm、P₇～P₂では240cmとなっている。中央部の柱穴P₁は、周囲の柱穴との相対する側の柱穴と結ばれる直線上ではなく、わずかに住居の中央位置とも離れた位置にある。さらに、それぞれの柱穴のもつ、相互の柱穴との対応する角度は、P₂で133度、P₃で118度、P₄で115度、P₅で132度、P₆で130度、P₇では116度である。

各相対する柱穴位置における竪穴の数値は、P₂～P₅位置で780cm、P₃～P₆位置で800cm、P₄～P₇の位置では820cmとわずかに異なる数値が、各柱穴間の断面距離となった。だが、8mの数値を取る竪穴式住居と見て差し支えはないと思われる。

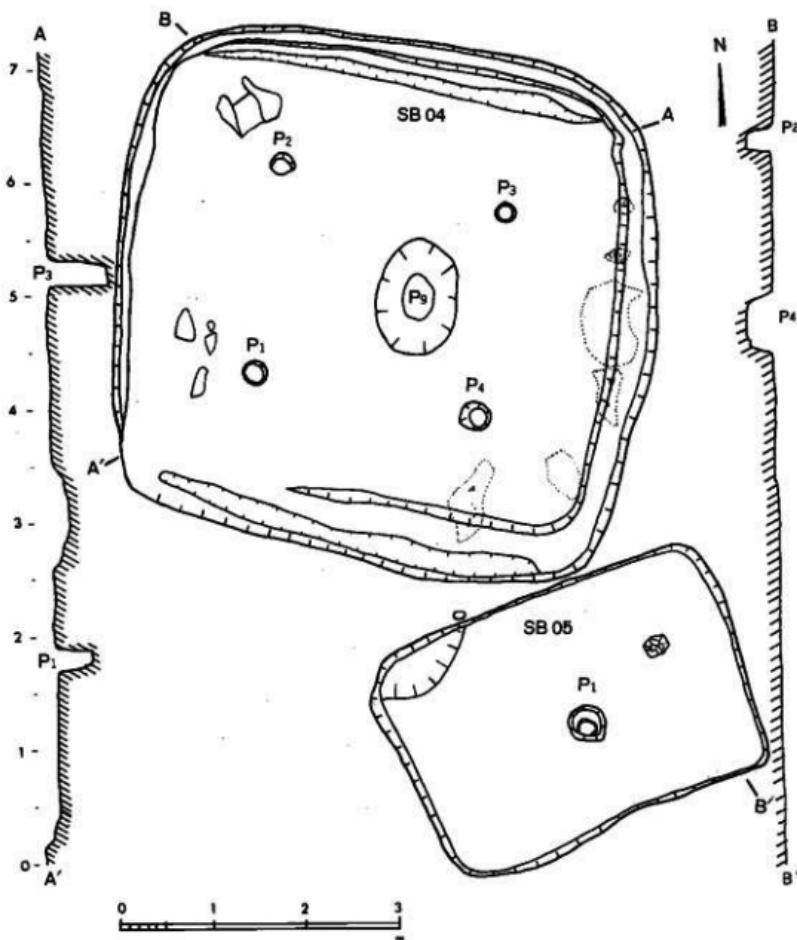
第31図の断面図に示されるように、1号竪穴式住居程の床面整地ではないが、平坦な床面構成となっている。P₁の柱穴以外の柱穴は、60cmの掘り下げとなって共通している。

炉址は住居の中央部に検出されたが、入口に面した側にやや偏った位置につくられている。検出された遺物の多くは土器であるが、内でもP₂～P₅に至る間の、ベッド状遺構を有する場所に遺物が多く、また、第30図に示す作業石(S)がある。石質はいずれも砂岩である。特に集中的な遺物の出土は、KD2の土壤より出土した什器類である。

この竪穴式住居も、1号同様に床面に多量の木炭を残すことから、火災による廃絶した家屋とみられる。この2号住居址前方3m位置に円形プランの一角をのぞかせた、3号住居址がある。

(3) 4号竪穴式住居址 (SB04)

4号竪穴式住居址は、第32図に示す住居址であった。主軸方位を北17度に傾きをもつ住居である。住居の入口部は明確でないが、南面する住居の西南部に採るものと推定される。住居は1辺510cmと550cmとわずかに歪みのある隅丸形の方形プランである。主柱は4本で、それぞれの柱穴の心心間距離は、P₁～P₂とP₃～P₄は220cm、P₂～P₃とP₁～P₄では240cmと同一の数値が得られた。また、炉址は4本の主柱の中央位置より、東側に偏した位置に検出された。本住居址ではA-A'・B-B'の断面図にも見られるように、竪穴を見るべき程の掘



第32図 4・5号竪穴式住居址の平面面実測図

り込みはなく、地山面より極く僅かに凹味を感じる程度の掘り下げが見られる造様である。

4号で特に注意をひくものに、柱穴の掘り下げが1・2号より浅く、P₃の柱穴以外は40cmの掘り下げである。また、今一つに、周囲の壁面部分に二段の掘り下げが、ごく僅かに見られる一方、壁面部分に粘土が検出される点である。特に顕著な部分については、第32図

に破線でしるしたが、四壁面共に共通した状態であった。因みに、壁面部分で検出された粘土は、地山である床面とは明らかに一層を挟む層序であった。

以上のことから、隅丸方形の内径の計測数値は 460 cm と 520 cm となる。この数値に前述の柱穴の中心間距離を合せると、460 : 220 cm と 520 : 240 cm となり、共に $\frac{1}{3}$ に満たない数値となる。また、柱穴の深度と周辺部の壁面での様相を総合すれば、周囲の壁面に立ち壁を造り付けた住居とも推定される。立ち壁を造り付けることによる柱穴の深度の変化と想定することは可能であろう。

(4) 5号竪穴式住居址（倉庫状遺構）(SB 05)

5号竪穴式住居址は、長軸の主軸方向を東15度北にふる東西の方向にある。竪穴の長辺 380 cm と短辺 260 cm で、竪穴のはば中央部に柱穴 P₁ を穿っている。

B-B'断面図にみられるように、名ばかりの掘り方を探る遺構である。第32図に示しているごとく、竪穴の乾の位置は特に他の部分より固く、しかもやや凹地化した隅が確認された。この踏み固められた位置が当遺構における出入口として判断される。

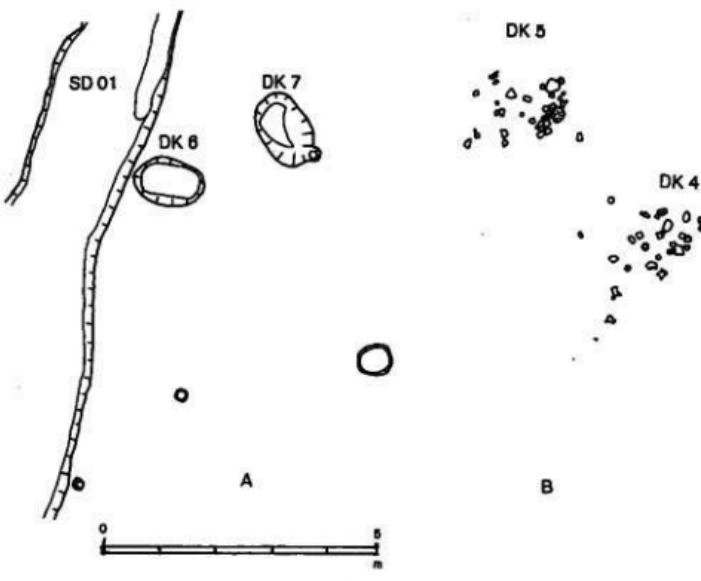
中央部に一穴を穿つことや、出入口が SB 04 に近い位置にある処から、竪穴式住居 (SB 04) に付随する遺構として理解した。室内からの遺物の出土状況から見ても(土器)、いずれも復原可能な出土状況で検出されるところからも、倉庫的機能をもつ遺構を見たい。

7 土壙状遺構と土壙墓遺構

第33図は、B₄ グリッドで検出された土壙状遺構で、いずれも土師式土器片を多量に出土した土壙である。この他に B₁ と C₁ のグリッド出土の DK 5・DK 4 が先行する時期と考えられる。土壙はいずれも 100~150cm 以上の長径のものであり、短径は 70cm 前後の長楕円形の舟底形の掘り方を持つものが主である。深度はいずれも浅く DK 4 では、掘り方を認めがたい程の土壙状の遺構である。第33図 B に出土状況を示すように完形に近い支脚形土器(図版第39図)をはじめ、多くの土器を出土する割に、この遺構側面は図版第39~40図に見る浅い凹面を示す程度の土壙で、周囲には作業石や粘土塊なども検出されるところから、屋外における作業場とも推察される遺構である。DK 5 で出土した砥石と香炉形土器が(図版第40図中央)ある。この遺物が何を物語っているかは不明である。

(1) 土壙墓遺構

土壙墓遺構は、第33~37図に示す T P 1 ~ T P 20 の遺構である。TP (the pit) は、長方形のものをはじめ楕円形や帆立貝状のものも検出されているが、大多数は円形の掘り方のものである。掘り方の規格も不揃いのものが多く、統一されたものは見あらない。これら



第33図 A) 溝・土壤状造構の実測図

B) 造物出土状況図

をTPとした根拠は、いずれも図版第41図の5・6に示す歯牙のみを検出するものと、図版第42図に示すTP 6では、石枕をともなった土括墓から、同図版中央に見えるTP 3のように中央部のみ長方形に掘り凹めた小穴を掘るものなどがある。

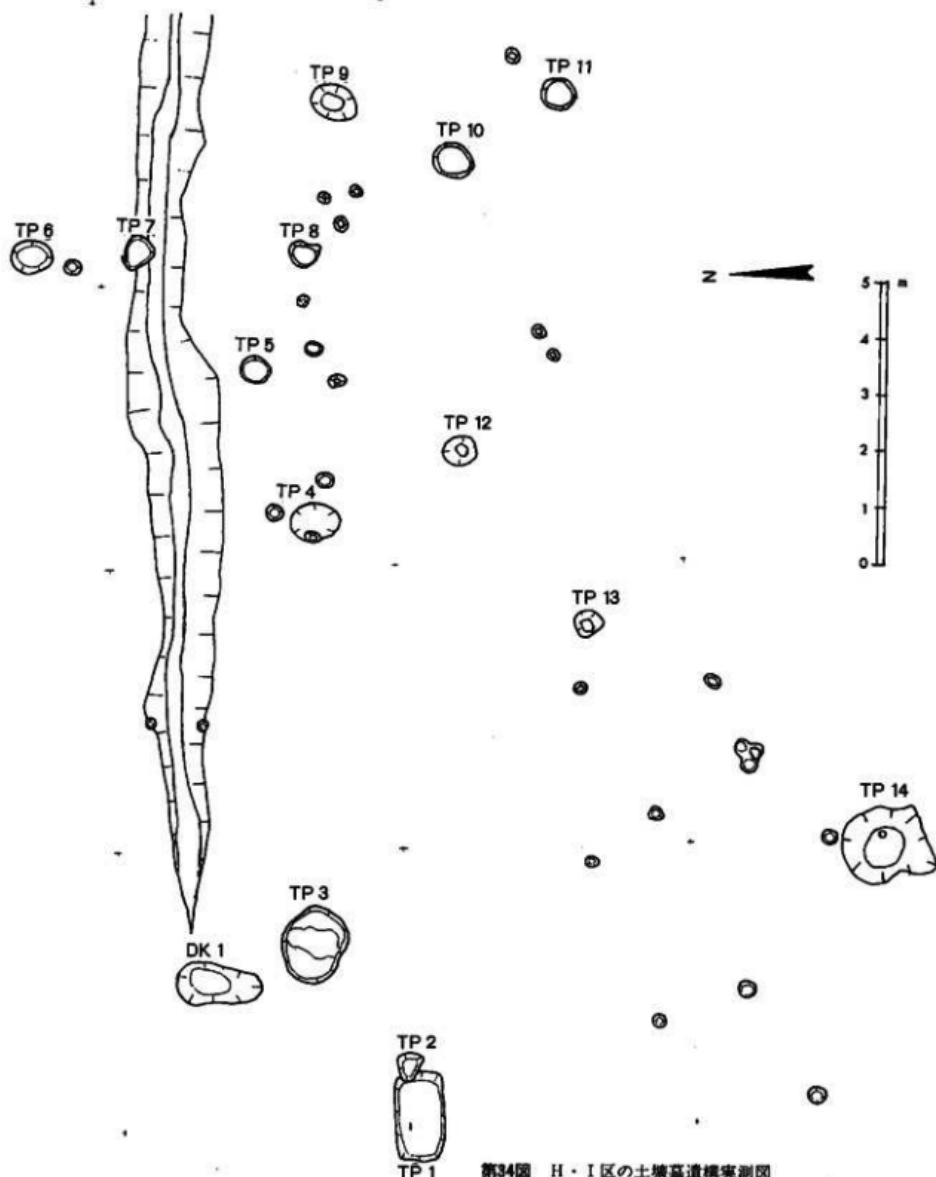
(2) 土壙墓造構と火葬墓造構

土壙墓造構としては、第34図のTP 1～7と、第35図のTP 17・19、第36図AのTP 20である。

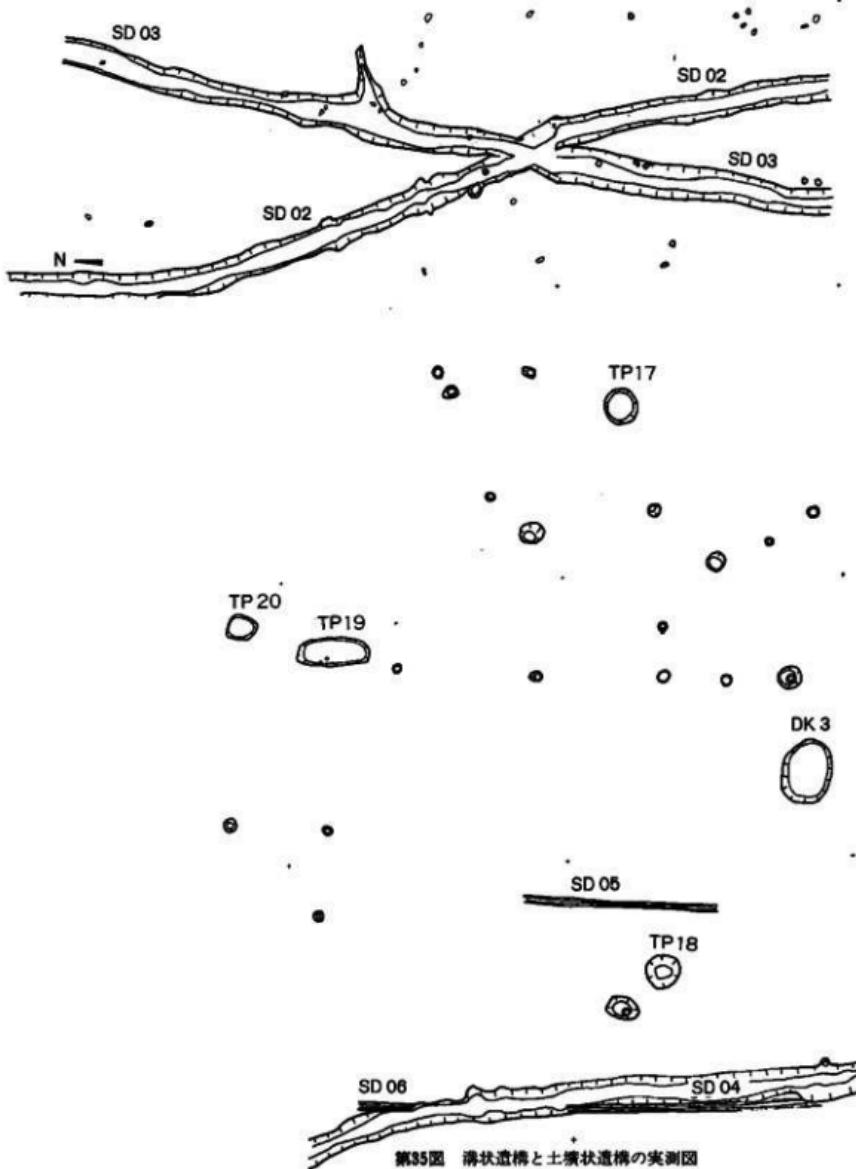
火葬墓造構としては、第34図のTP 8～14、第35図のTP 18、第37図のTP 15・16である。

土壙墓の断面は、第36-C図に示すTP 1の断面図のごとくである。これらの土壙墓の掘り方は、規範的には長方形・円形に区別されるが、深度はいずれも浅いもので25cmから深いものでは60cmという範囲の掘り込みとなっている。これに対して火葬墓は、いずれも地表面を10cm程度に浅く、しかも凹面状に掘りくぼめたものである。

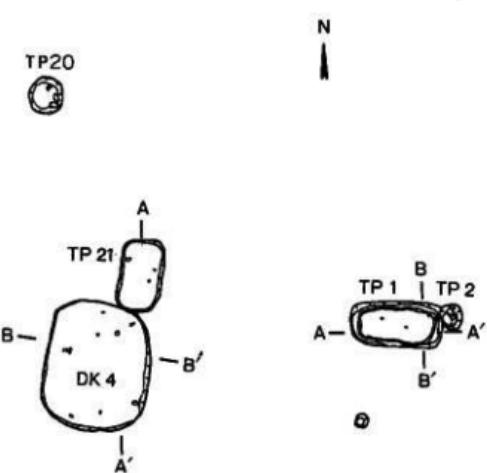
土壙墓の内、副葬品をともなうものに第36-A図のTP 20がある。TP 20はさらに第35図に見る位置で検出された造構であり、直径60cmの円形土壙墓であり、掘り込みは30



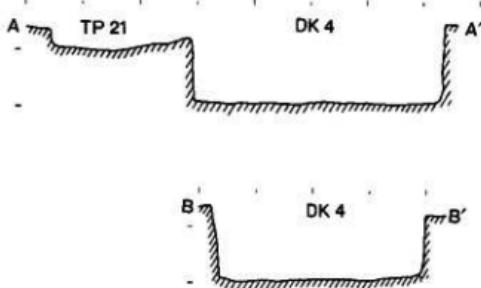
第34図 H・I区の土壤基盤構造実測図



第35図 溝状造構と土壠状造構の実測図



第36-A図 土壇墓・土壇状造構の平断面実測図



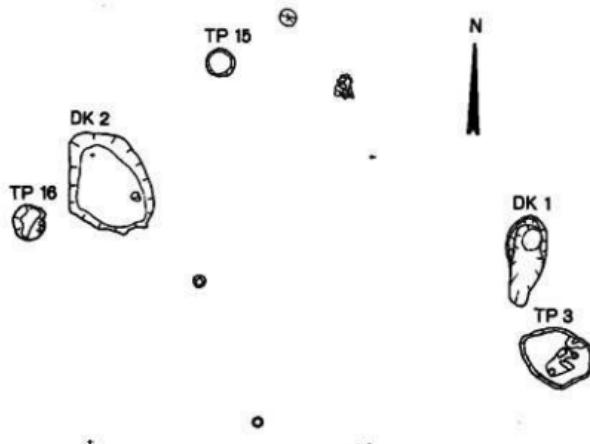
第36-B図 TP21・DK4断面図



第36-C図 TP1の断面図

cmの素掘であった。副葬品は円形に掘り込まれた東壁面位置に2個の土師皿を埋葬しており、本遺跡における唯一の副葬品を伴う土壇墓である。その他に、石枕を伴う土壇墓が第34図に示すTP6である。TP6は南北に70cm、東西方向で60cmのやや楕円形の素掘りの土壇墓である。深度は30cmと中位の掘り方を持つ遺構であった。石枕は短径で南北方向の北壁面に人頭大の硬質砂岩を利用したもので、三角形の自然石の一部を打ちかいで凹みを作り出したものである。(第38-B、図版42図上参照)。

長方形の掘り方をもつ遺構の内TP1は、第36-C図に示すものである。土壇断面にみられる粘土層が遺存することからみて、被葬者の埋葬後に、粘土による密閉行為がほどこされたとみられる。埋葬は木棺を使用したと推測される鉄釘の出土があった。これらのタイプに属するものには、TP19-22があるが、北に

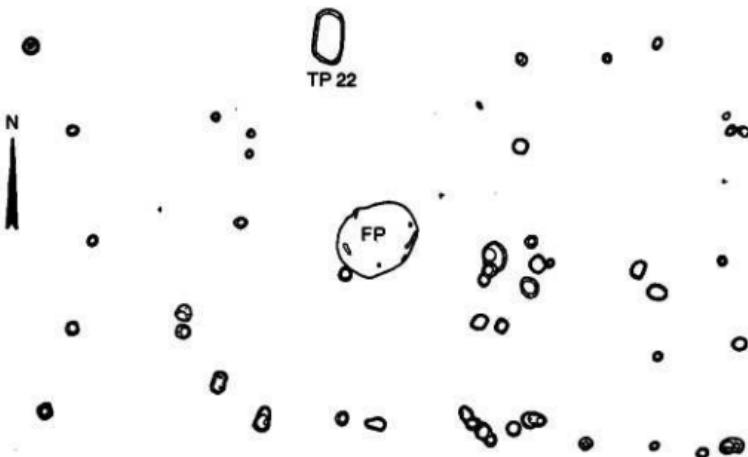


第37図 土壙墓・土壙状遺構の平面実測図

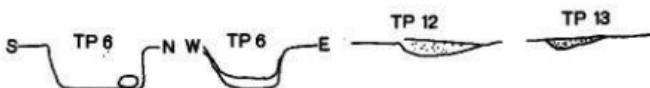
枕位置を取る22の他は、東に枕位置を取るものであった。TP19・22ともに鉄釘の出土があり、木棺直葬であろう。人骨その他のについては、遺存度が低くわずかに歯1・2点を出土する程度であった。

火葬墓は、掘り方も浅く土壤の閉塞行為もみられない墳墓の割には、図版第41～42図にみる歯牙の遺存度は良く、しかも遺構の掘り方はTP21を除いては、すべて円形のピット状の浅い掘り込み方法を採っている。（第36-B図）。火葬墓はいずれも木炭と細片した骨片と歯牙のみである。骨片はこれまた共通して扁平なもののみである。この様な出土状況の内で、歯牙はいずれも安定した出土状況にあった。また、TP1の土壙墓遺構において、挿図第36-C図中央部資料にみられるような、火葬墓遺構TP23が上部遺構として検出された。この遺構は図示されていないが、TP23遺構である。

以上のことから、土壙墓と火葬墓との時期的な関係はTP1土壙墓において明らかに、火葬墓より先行する遺構であることが判明したが、小規模な円形土壙墓については、火葬墓と余り大差のない時期における墳墓を見る。しいて差を求めるならば、挿図第36-B図にみる土壤の断面に示される掘り方と、若干の埋葬遺物の出土をみたことであろう。いずれにしろ大差なき時期とはみながらも、二形態をもつ埋葬であることに変わりなく、円形の土壤墓を実施した埋葬時期と浅く掘り凹められた長方形ないし円形の土壤墓に火をはなった火葬墓の時期とに別れる。火葬墓を実施した時期と、第38-A図にみられる、FP遺構との関係があるかどうかは不明である。FP遺構は、焼土と木炭及び灰層をもつ直径140cmに火葬墓と

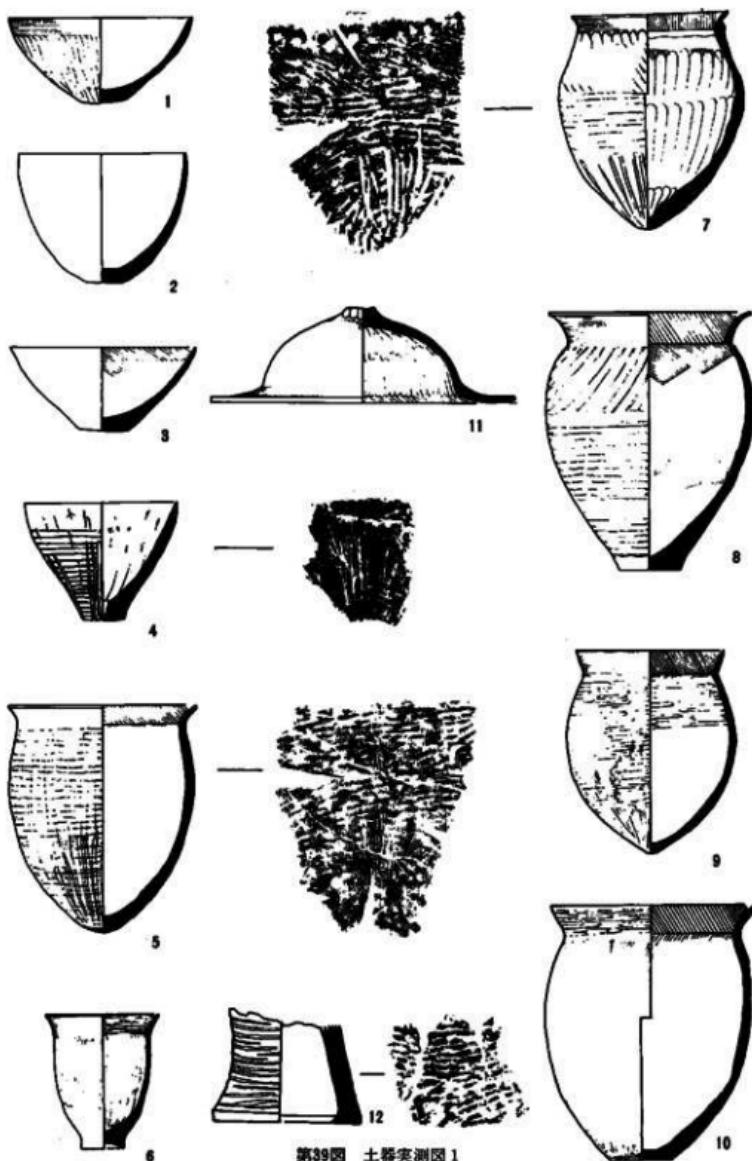


第38-A図 焼土造構と小規模な掘り穴造構



第38-B図 TP 6 と火葬墓断面図

同様の浅い掘り込みをもった焼土造構である。焼土造構の周辺には不規則な小穴造構が検出されているが、等尺による割出しもできないピット群である。これらのピットには2~4の連結した小穴を穿ったものも検出されている。この小穴群の中央位置に前述の焼土造構があり、検出された火葬墓造構からみると南面する位置にある。さらに火葬墓の内、長方形の掘り方を探る唯一の造構であるTP22は、FP造構に最も近い位置にあり、その他の円形の造構はTP22の後方に群がる状態で検出された。ちなみに本造構の南面する約100m位置に、中世末期の桑原城址の碑がある。碑には、菊森城主三好長門守源秀吉靈と銘記され、昭和2年再建の碑文は、桑原出雲坊本姓平成称城主と泉守越智宗賢桑原城主而桑原寺開基也が銘記されている処から、この城址に関する造構であろうとも推定され、これら円形の土壤墓ないし火葬墓群の、よって立つ造構の規模からして、また出土状況からしても首塚とみられる。中世末期の乱世を切り抜けた各武将達の造構と推察される。



第39図 土器実測図 1

(3) その他の造構（粘土採集造構）

桑原高井II次調査により検出された造構である。図版第44図に示すごとく、粘土の採集は大きく3区分帯に分かれて採集されていた。同図版最上段にみられるように、良質の粘土を求めて採掘されている。また、壁面に残された傷跡が明らかな部分もある。

粘土採掘の深度は浅く最大70cmである。ちなみに当地域での粘土層は120~140cmの層厚をもつ地層断面であった。

8 検出された遺物（図版第39~42図）

(1) SB01の出土遺物

菱形土器

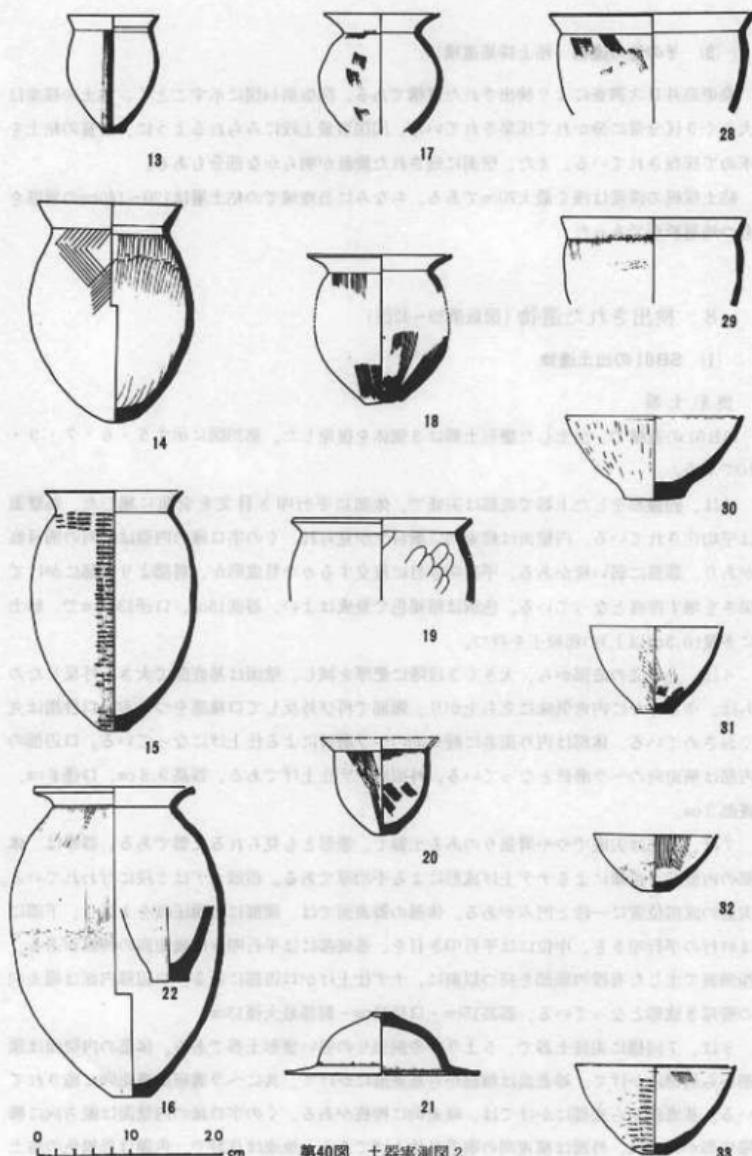
SB01の造構で、出土した菱形土器は5個体を復原した。第39図に示す5・6・7・9・10である。

5は、釣鐘形をした土器で底部は尖底で、体部に平行叩き目文を全面に施した、器壁面は平均化されている。内壁面は縦走向に横目文が見られ、くの字口縁の内面は斜向の横目痕があり、頸部に弱い稜がある。平行叩き目に直交するカキ目成形が、肩部より底部にかけて深さを増す擦痕となっている。色調は暗褐色で焼成はよい。器高16cm、口径13.5cmで、胎土に多量(0.3mm以上)の粗粒子を持つ。

6は、上げ底の底部から、大きく3段階に肥厚を減じ、壁面は基底部で大きく外反したのちは、ゆるやかに内弯気味に立ち上がり、頸部で再び外反して口縁部をつくる。口唇端は丸くおさめている。体部は内外面共に縦走向のヘラ磨研による仕上げになっている。口辺部の内部は横走向のヘラ磨研となっている。外面はナデ仕上げである。器高9.8cm、口径8cm、底部3cm。

7は、底部は尖底でやや肩張りのある土器で、壺形とも見られる土器である。器厚は、体部の内壁面を指頭によるナデ上げ成形による不均厚である。指頭ナデは3段に行われている。尖底の底部位置に一段と凹みがある。体部の器表面では、頸部に指頭圧痕を1巡し、下部には斜行の平行叩きを、中位には平行叩き目を、基底部には平行叩きに縦走向の押痕がある。指頭痕で生じた有段の頸部を持つ以前に、ナデ仕上げが口辺部にある。口辺部内面は縦走向の横描き成形となっている。器高15cm・口径11cm・胴部最大径13cm。

9は、7同様に尖底土器で、5よりやや肩張りの強い菱形土器である。体部の内壁面は頸部から肩部にかけて、器表面は頸部から基底部にかけて、共にヘラ磨研が横走向に施されている。基底部から底部にかけては、縦走向に押痕がある。くの字口縁の内壁面は縦方向に横描き成形が施され、外面は横走向の刷毛目仕上げである。焼成は良好で、色調は黒褐色の胎土



第40図 土器実測図 2

に粒子を多く含む土器である。器高14.4cm・口径10.3cm・胴部最大径12cm。

10は、平底4.5cmから外傾したのち、内壁部で大きくくびれを取って立ちあがり、肩部で僅かに内寄したのち、頸部で大きく外方にくの字状にくびれた、くの字口縁をつくる。口辺部内面は斜方向に横目調整がみられ、体部の縱走向の横目調整との合致点には弱い接をなす。口辺部外表面は、入念な横走向のヘラ磨研による仕上げである。体部は縱走向に横目成形が頸部から底部にかけて施されて、器表面は均衡である。口径14.4cm・器高18.2cmで胴部最大径14.5cmである。口縁部と底部中央位置で1cmのずれがみられる。

浅鉢形土器

浅鉢形土器は1~4の遺物を検出したが、鉢形土器と碗形土器の差異について、種々論ずる處であるが、ここでは一括して取り扱った。

1は、平底の鉢形で口縁部に横走向のヘラ切りが施され、内外面は共に縱走向のヘラ磨研仕上げとなっている。口縁部の外縁部のみ横ナデ仕上げとなっている。胎土に粒子を多く含む、口径13cm・器高6cmで焼成よく色調は茶褐色である。

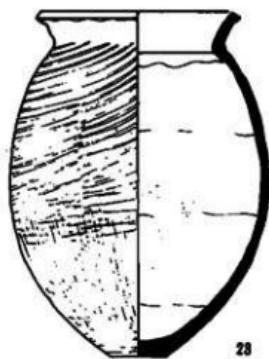
2は、器高12cm・口径11.8cmで、平底の底部は尖底の底部を叩き成形による作りである。肥厚した底部より徐々に肥厚を減じながら弯曲して立ちあがり、内外面共に入念なヘラ磨研仕上げである。

3は、1と同様に臺形土器の平底である。口縁部横ナデによる凹味がみられる。内壁面は斜行する横目成形が入念に施されている。外表面はヘラ磨研である。口径13cm・器高5.8cm底部は3.5cmである。焼成は良好で全体に茶褐色である。

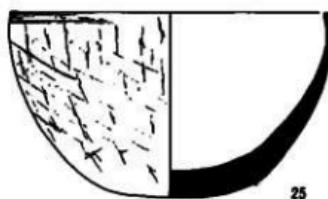
4は、1~3と異なった色調と造りである。平底の底部からわずかに立ちあがったのち、内寄気味に外向にのび広がった浅鉢である。外表面は口縁部をのぞいて、他は平行叩きが施されている。拓影にみられるように縱走向の3条ないし4条の擦痕がある。内壁面は指頭によるナデ上げがみられる。機能的な面から施されたものか否かは不明で、指頭大の凹みが底部にある。本器の両壁面には縦割れのめくらひびが無数にみられる。色調は1~3と異なり黒色で、胎土には多くの珪岩粒子を含む。口径10.8cm・器高13.4cm・底部3cmで焼成良好である。

臺形土器

第39図の11は臺形土器で、内壁面と口縁部はヘラ磨研である。天井部は指頭による、つまみ出しによるつまみがある。天井部より外折して広がったのち、内寄気味に立ち上がったのち、再び外折した口縁部をつくり出している。口縁部にわずかにそりがみられる。口径21.6cm・器高12cmで天井部から体部一面を縱走向に横目成形が施されている。口縁部横走向のナデ仕上げとなっている。焼成はより黒味をおびた茶褐色である。



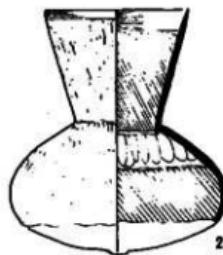
23



25



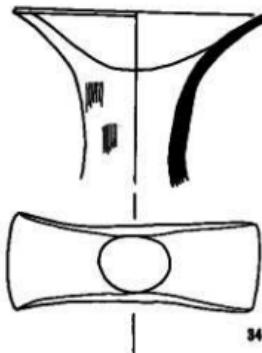
26



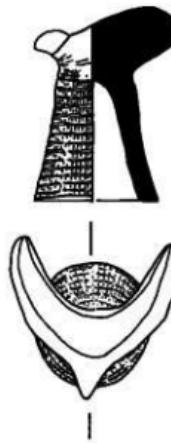
24



27



34



35

0 10 cm

第41図 土器実測図 3

(2) SB02 出土の遺物

第40図はSB02出土の土器である。壺形土器から變形土器・深鉢形土器・浅鉢形土器・蓋形土器・碗形土器が検出された。他に第42図の49・50の支台形土器がある。石器類としては、入口部と炉址のそばに置かれていた作業石と砥石がある。

變形土器

13~16と19・20・22は變形土器である。

13は、平底の底部で立ち上がった後、内窓気味に立ち上がり、胴部最大径の中位をすぎるあたりで、くびれて内傾して頸部を造った後、外方向にくびれて、くの字口縁をつくる。口唇端面は丸くおさめている。頸部内壁面にはヘラ切りによる稜が残されている。体部の内壁面は横ナデ調整である。口縁部は内外面共に横ナデである。体部は縱走向の入念な構描き成形である。

14は、丸底の變形土器である。胴張りの最大径は中位以下にある紡錘形である。器厚は底部をのぞきやや均等厚である。口縁部はわずかに凸面に感じさせる。頸部内壁面には13同様のヘラ切りによる稜をもつ。体部の内壁面は縱走向のヘラ磨研で仕上げられている。体部表面は交差する構描成形が全面に施されている。口辺部は内外面ともに横ナデ仕上げである。

15は、わずか2cmの平底で、体部に明らかに4段の輪積手法が残された。内壁面は指頭によるナデ上げ仕上げとなっている。体部表面は平行叩きしめ痕が、基底部より頸部間に施されている。平行叩き目文を縱走向の構描きによる成形を施している。口辺部はわずかに外窓して、そり身のある口縁部をつくる。口唇端面に弱いヘラ切りがみられる。器形は14より胴張りの少ない均衡のとれた土器である。口径9.8cm・器高27cm・胴部最大径12cm。

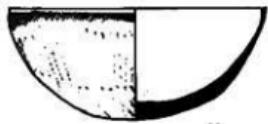
16は、2.8cmの平底で、口径と底部中位では1.2cmの歪みがみられる。頸部は13~15よりすばまりは大きく、さらに口縁部は大きく曲折してやや外窓する。口唇部はヘラ切りによる端面をつくり出している。内壁面及び口辺部は共に横ナデ仕上げである。体部表面には中位に焼煙が付着している。頸部から中位にかけては、縱走向の構描きと斜走向の構目がみられるが、中位から基底部にかけては竪切り成形である。口径11.5cm・器高22cm・胴部最大径15cmで焼成は良好である。

19は、胴頸部の欠損遺物で、肩部の内壁部に指頭による押圧された列点文がみられる。器表面はヘラ磨研である。口縁部内面にわずかに凹面を感じさせる。頸部に稜をもつ、口径13cm。

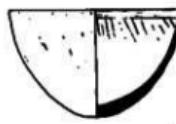
20は、口縁部は欠失する土器である。平底の底部より大きく内窓して立ち上がったのち、垂直に立ち上がり頸部でのすばまりではなく、外反する口縁部が統く土器である。頸部では明瞭な稜をなす、内外面共に斜行の構描きによる調整がみられる。内部は灰褐色であり、色調は帶赤橙色で焼成はよい。



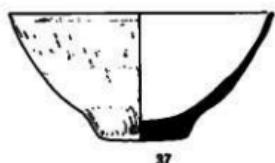
36



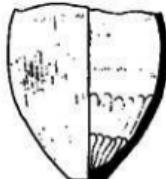
42



46



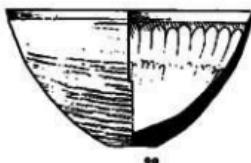
37



43



48



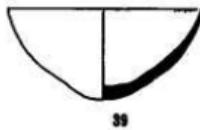
38



44



49



39



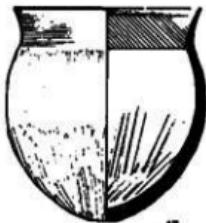
45



51



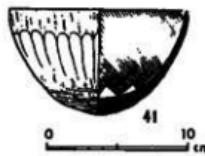
40



47



52



0 10 cm

第42圖 土器実測図 4



54

22は胴底部の欠損遺物である。底部はやや凹面に仕上げられている。胎土は全体に厚手なつくりでしっかりしている。内壁面は黒色で構成形である。器表面はヘラ磨研である。

壺形土器

17・18は壺形土器である。

17は、底部を欠失するが、球形の胴部に喇叭状の口辺部をもつ土器である。口辺部は構成形のち、横ナデ仕上げとなっている。体部には縦走向の構成形をわずかに残す程度の横走向のヘラ磨研による仕上げとなっている。色調は壺形土器より帯赤している。

18は、17と同様の土器であり、器形及び手法も類似している。

深鉢形土器

28と29は共に底部は欠失しており不明であるが、いずれも丸底であろう。29にみる焼煙付着状態からみて、土鍋として使用した可能性が高い土器である。口径部長より胴部最大径が小さい土器で、輪積み手法による成形がみられる。内壁面には無数の指頭押圧痕がある。器表面は共に斜走向の構成形がみられる。口径は28で10.8cm、29では10cmとわずかに異なる。口辺部にもわずかに異なりをもつ土器である。

浅鉢形土器

第40図の30～33と、第42図の36～38が出土している。

30は、台付壺を思わせる。平底底部から基底部で外方向に立ち上ったのち、大きく外折し肥厚を徐々に減じながら内弯して、丸くおさめた口唇端部をもつ土器である。内外面は共に縦走向のヘラ磨研である。口縁部直下に僅かに四線を1条めぐらしている。焼成時に生じた縦走向のひび割れが、器表面に無数にみられる。口径12.6cm・器高6cm・底部4cm。

31は、平底の基底部は僅かの間直立したのち外折して、内弯気味に立ち上がった土器で、内外面は共に構成形による成形が残されている。器表面では構成形のち斜走向の押痕が全体に付けられている。色調はチョコレート色である。口径9.2cm・器高6cm・底部2.6cm。焼成良好である。

32は、口唇端に平面をなす土器である。内壁面には構成形による縦走向の成形が入念に施されている。器表面は縦走向の箝磨研による仕上がりとなっている。口径8.8cm・器高4cmで焼成よく、色調は茶褐色である。

33は、32と同様の器形をなすが、32より胎土の器厚が不安定な造りである。口縁直下の内外面に僅かな凹面がみられる。内壁面は凹面の下部を斜行に、調整具縦2.2cmの構成工具による斜走向の成形となっている。器表面は平行叩きしめ文が、凹面をのぞき施されている。叩きしめ後、縦走向に構成形による成形がみられる。焼成もよく、色調は32に類似する。

口径11.4cm・器高6.5cmで中位の什器である。

36は丸底に近い、僅かに平底を示す土器である。基底部での外折ではなく、大きく外方に開きながら、やや内弯した肥厚の大きい土器で、口縁部でにわかに薄くなり、直立する口辺部をつくりだしている。内壁部は放射状に櫛描き成形と、口辺内部位置では横ナデとなっている。器表面は33同様に、平行な叩きしめによる成形痕が残る。口辺部は内壁部同様に横ナデ仕上げになっている。

38も、36同様の叩きしめ工法を探る土器であるが、内部は斜向の櫛描き成形の後に指頭によるナデ上げの中位部と、体部では幾分斜向する叩きとなっている。

37は、30と実に類似する土器である。

蓋形土器

21は、天井部は平底形で僅かなつまみ部の立ち上がりがみられる。体部は大きく弯曲し球形に近いふくらみがある。縁部はL字に外折して、周縁端部は丸くおさめている。体部と周縁部では内・外面で縫をなしている。仕上げは、内外面共に櫛状施工工具による縱走向の手法で統一されている。器高4cm・口縁径14cmで焼成は良好な茶褐色な仕上がりとなっている。

(3) SB03の出土遺物

SB03の出土遺物は少なく、第42図の41と47である。

41は、浅鉢形の土器で丸底である。基底部から丸底の底部には平行な叩きしめが残されている。口縁部は横ナデ仕上げであるが、体部は指頭による縱走向の指頭ナデ痕が残されている。内壁面は、肥厚な丸底から大きく内弯しながら肥厚を減じた碗形である。内壁面は20箇の櫛状工具による成形が底部から中腹部にみられる。口縁部から腹部にかけては、斜走向の櫛描きによる成形が整然と一周している。焼成は良好であるが、器表の指頭痕の下部と上部に亀裂がみえる。口径12.6cm・器高7.4cmである。

47は甕形土器である。底部は2cmの平底を呈するが、胎土の様相からみて麓切り底である。基底部のくびれは殆んどみられず、大きく内弯しながら立ち上がり、中位付近から徐々に、しかも僅かに内傾したのち再び外反して口辺部をつくる。口辺部は内外面共に櫛描きによる仕上げである。ただ内面では、ヘラ切りの後斜走向の櫛描きとなっている。器表面では頸部から胴部にかけては櫛描きを、胴部から底部にかけてはヘラ磨研である。内壁面は実に荒いヘラ描き(ヘラケズリ)が残されている。内部色調は黒色である。口縁径14.5cm・器高15cmである。胴部最大径14cm。

(4) SB04の出土遺物

浅鉢形土器

40はSB04出土の土器である。SB出土の同形の土器では最も秀逸な遺物である。平底で基底部で直立した高台をつくりだしたのち、外折して内窓気味に肥厚を減じつつ、立ち上がりは口唇端で内傾し、丸味をもった口縁部を造り出している。内外面は共に僅かに横ナデを行い、器表面には斜行する平行叩き目が全面に残されている。内壁面は最大13歯を数える。棒状工具による交差する成形痕がある。

44は、丸底の土器で塊形土器とみるべきであろう。肥厚な底部より器厚を保ちながら内窓気味に立ち上がり、口辺部で肥厚を減じて口唇端面を丸くおさめている。内壁面は指頭ナデ上げによる成形を残して、口唇部のみ横ナデとなっている。器表面は底部から中位をすぎると付近までは、平行叩き目文が施されている。口辺部は横ナデ仕上げである。口径9cm・器高6.4cm。

壺形土器

43は、口頭部を欠失した胴底部の遺物である。直径2.5cmの平底の底部から外反したのち内窓気味に立ち上がり、中位をすぎる付近ではすまりをみせている。頭部を欠失するため、すすまりの度合いは不明であるが、壺形土器と判断される。表面は胴部最大形から底部にかけてはヘラ磨研仕上げとなっており、頭部では縱走向の横描きである。内壁面は、底部付近では2段の指頭ナデが見られ、他面は斜走行の横描きによる成形である。内壁面に輪積痕が残されている。

(5) 土壙状造構出土遺物

浅鉢形土器

39と42・45・46が検出されている。

39はDK1で検出された土器で、器表面に凹凸の多い指頭痕を残した遺物である。

42は、DK2で検出された口径18.2cm・器高8cmの丸底風の扁平な土器底部である。器表面に2~3段のヘラ剥りの成形痕を残している。口辺端は水平な平面を保ち、僅かに肥厚している。内壁面は入念なナデ仕上げである。口辺部には交差する横描き成形がある。

46もDK2で検出された遺物で、口径12cm・器高7.6cmの丸底である。器面は内外面共にヘラ切り成形が施されているが、内部口唇部に横ナデがみられる。

DK3出土の45は、尖底の土器である。基底部付近に平行叩き目文を、体部はヘラ磨研を縱方向に施している。口縁部は横ナデである。内壁部はナデ仕上げを全面に施し、僅かに口唇部に横描きが残っている。肥厚状況はいずれの土器とも異なり、胴部で外方向に肥満するが、

口辺部では肉薄化されている。口径10.4cm・器高6cm。

土壌墓出土の遺物

48は、香炉形支脚土器と仮称される土器である。脚部は不規則で不揃いな長短の足脚を、つまみ出す手法により作り出している。香炉形とはいえ断面にみる白形で手ごね土器である。半円形の焼香部は、丁寧な指頭によるナデ仕上げである。上端は水平な面を幅広くつくり出し、口唇端の外縁部は僅かに窪切りされ、耳取りがみられる。器表面には大きく3段に指頭押圧痕が残されている。香炉と判断された要因は、口唇端面に付着した放射状の焼煙が立証するからである。出土状況は図版第40図中にみるように、砾石と共に伴っている。器高7cm・焼炉径9cm・脚部幅(広がい)11.4cmの遺物で、当地方では初見の土器である。

土壌状遺構(DK 4の一括遺物)

壺形土器

挿図第41図の23・24は壺形土器である。

23は、平底4cmの紡錘形の胴張りをもつ土器で、僅かに基底部にふくらみをもつことにより、安定感を感じさせている。頸部でくの字にくびれて口唇端は窪切りによる。口辺断面で垂直な端面をつくる。体部は二段の輪積手法による技法がとられて、内壁面では横ナデ調整後も判断できる状態である。器表面は基底部は横走行のヘラ磨研である。この上段部第2輪積付近までは擦痕による成形が残る。中位から頸部にかけては、斜行する平行叩き目文が明瞭に残されている。口辺部はややふくらみのある隆起がみられる。口唇端面でのヘラ切りによる口唇端部に乱れがある。頸部内面では明らかに継をなす、肩部には口頸部の繼手が残されている。口径(内径)13.8cm・器高24.2cmで、輪積高は5~6cmとなっている。

24は、長頸壺形土器である。基底部から下部を欠失しているため不明である。長頸は扁平な副部に長頸部を接合させている。実測図に接合状態を示している。体部は3段による輪積手法と推察される。1段の底部をなす部分は欠失しているが、他遺跡の遺物を総合して、乳頭状の貼付け底部を有する丸底の底部であろう。2段目の輪積の内壁面は、斜走行の鋸齒成形である。3段目の輪積は指頭による成形が見られ、また一方、指頭に一定のずれが見られる。

この指痕からしてある程度、挿入口がすばめられた状態がうかがわれる。頸部を挿入するための体部の切り込みは、鋸齒状の断面を取っている。この鋸齒状痕は、接合効果を高める工夫と推察される。あらかじめの分離個体としてつくられた頸部が用意され、接合部は頸部外側に合わせた切り込みとなっている。24の遺物では、やや切り込みの凹凸が大きく、接合部での頸部が0.2~0.3cmの突出した隆起帯をみせている。接合は器表面からのみ施されており、内部の調整はみられない。器表面は入念なヘラ磨研である。口縁部は僅かな横ナデにより口

縁部になぞらえた長頸直口壺が正しい。口径10.2cm・頸部長9cm・器高17.4cm・体部最大径15.4cmの赤褐色な焼成である。

浅鉢形土器

第41図25~27の遺物である。

25は、当遺跡最大の土器で口径22.4cm・器高13cmの平底に近い丸底である。僅かに凹面する底部より大きく内弯気味に立ち上がり、口縁で僅かにすぼまっている。内壁面はナデ仕上げの肥厚な土器である。器表面は斜行の平行叩き痕が僅かに残されている。ヘラ磨研が不充分なためか、めくらひびの亀裂が生じている。焼成はよく、色調は帯黄褐赤色の土器である。

26は、すり鉢状の鋸歯状文が施されている。平底の浅鉢で内部底面に施された横目文も、他種の構描き文に比して、深くするどい構描き目文となっている。口縁部は内外面共に横ナデ調整となっている。器表面は粗野な縱走向のヘラ磨研となっている。同系の器種と異なる胎土肥厚を断面に示している。強固な土器であり、すり鉢の機能を有する土器であろう。口径18.8cm・器高7.6cm・器厚1.2cmの底部に1.0cmの体部厚である。

27は、26に比べて全体的に花車な薄手の土器で、器表面は入念なヘラ磨研である。内壁面は口縁部の縱走向に近い構描き成形に対して、腹部は横走向の構描き成形である。口径17cm・器高7.8cm・平底径5.8cmで焼成は良好で、赤褐色のチョコレート色に近い。

9 若干の考察

遺跡の環境で触れた如く、桑原高井遺跡及び東本遺跡は、東野低位丘陵台地の麓に広がる洪積台地にある。洪積台地は南面に緩斜面をなしており、台地南端部で川付川は当地域で西流して、古くは桑原村と久米村の村境をなす。この南面する緩斜面には桑原樟味・桑原高井・桑原小石原遺跡がある。さらに西に広がり、東本・小坂並ノロ・中村一・二丁目遺跡が現在知られている遺跡である。これらは近接する遺跡であるだけに、おのおの共通する文化的遺物を伴出する一方、これらの遺跡はまた各々が独立した集落形成を樹立しているいくつかの生活共同体があるやに思考される。本報告書の内、桑原高井遺跡と東本II・III遺跡は、いずれも共伴する土器においては、同時期かもしれないに先行する遺跡としての出土遺物である。

一方、竪穴式住居址に見る遺構構造は、明らかに桑原高井遺跡における生活を主体とした住居構築に対して、東本II遺跡における2基の竪穴式住居址では、集落のよって立つ祭祀的・集合的遺構としての性格が濃厚である。更に、同遺跡内で検出された東本II遺跡における竪穴式住居址SB01とSB02である。両者は共に、特殊な規格を探る炉址と位置については共通しているが、住居址の平面プランは円形と長方形で異なり、住居の空間の造りにも大

きく異なった構造が採られている。更にまた、出土遺物については円形竪穴式住居址では、僅少ではあるが文化遺物が検出されたが、長方形の竪穴式住居址では文化遺物は皆無であった。

斯様に共に近接し、しかも同一的目的を持つ遺構と推察されながらも、竪穴の規格や主柱の相違が見られる。また、長方形の炉址を囲む形に円形の杭穴列を持つSB01の炉址とSB02の炉址では明らかに異なる。この違いが都辺にあるかは、今後より多くの遺構が検出されることにより解明される興味ある遺構であろう。桑原高井に検出された竪穴式住居址SB02では、東本II遺跡のSB01とは共に共通する住居規格を持つ構築物であるが、住居址内にベッド状遺構と明らかに入口を示す位置がある。また、炉址は最も効率のよい中央部に位置している。さらに同様、円形竪穴式住居址で主柱数を同じくする遺構としては、小坂益ノ口第I次調査におけるSB03の遺構^①があり、中村町1丁目遺跡の1号住居址^②がある。また、石手川の北方（松山北部）においては、文京遺跡にみるSB06・SB07の住居址^③がある。また堀江方面における潮見ラドン温泉開発中に発見された遺構があり、先学者における見聞では円形で、しかも直径10m内外であったと教示されている。

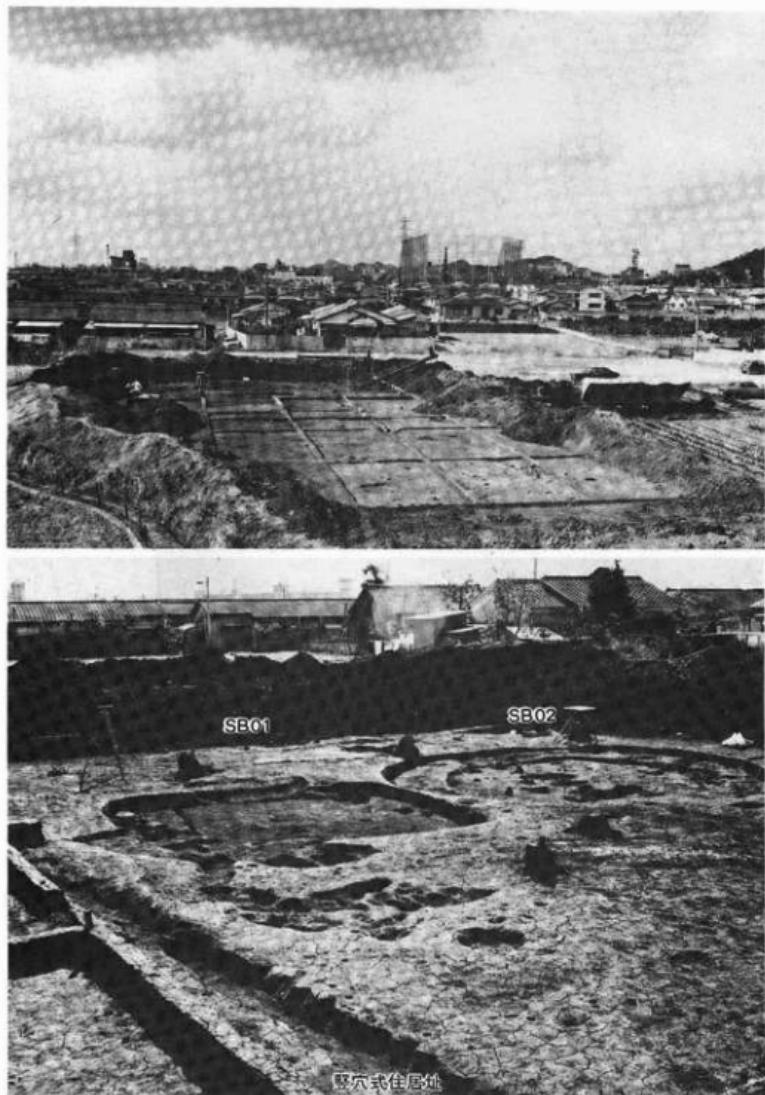
弥生後期における松山平野での住居形態は大きく2分類される。一つは、方形を基本形態とする住居址と、いま一つは、円形を母形態とするものとがある。前者は長方形と隅丸形に変化を生じるとともに、隅丸においては方形と長方形にも見られる。ただ、現在までに調査をみた限りにおいては、弥生後期にみられる床面を一段と高めた造り出しを有するベッド状プランは、方形または長方形の竪穴式住居址には検出例がない。これに反して、円形または梢円形の住居址においては、幅1m以内の10~20cmの有段のベッド状床面をもち、床面は二段構成となった床面が相反する検出数値を示す。一方、炉址の位置については、方形及び長方形の住居遺構において、中央位置よりいずれかの壁面に片寄を見るが、円形及び梢円形の住居址においては、東本II遺跡で検出された遺構以外では検出例がなく、初見の炉址であるとともに位置からもまた初見である。

方形及び長方形の住居址におけるベッド状遺構は、弥生終末期に大きく変化を見る可能性が土器様相から推測される。ベッド状遺構は、円形及び梢円形に見られる。壁面を利用した造りをなすものと、室内的床面を横割にする形をとるものとの二様式がある。

以上、検出された遺構より若干の考察を試みたが、何分にも検出例が限られることにより、今後より多くの遺構をもって再度考察の必要性あるを渴望する次第である。

注 ① 小坂益ノ口発掘報告書 ② 墓藏文化財発掘調査報告 ③ 文京遺跡発掘報告書

図 版
桑 原 高 井 遺 跡

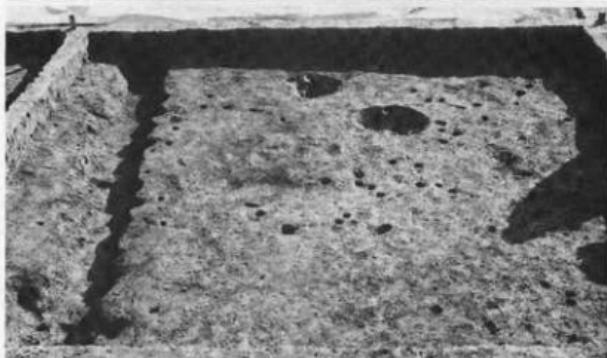


図版第34図 発掘区全景

(桑原高井遺跡 I)



S B 04の全景



焼土遺構と小
規模な杭穴群



溝幅80cm
深さ40cmの
溝状遺構
S D 01

(桑原高井遺跡 2)

図版第35図 発掘状況

S D01と
DK 6の
ようす



上図の地
層断面の
アップ



左
TP 6の
石枕

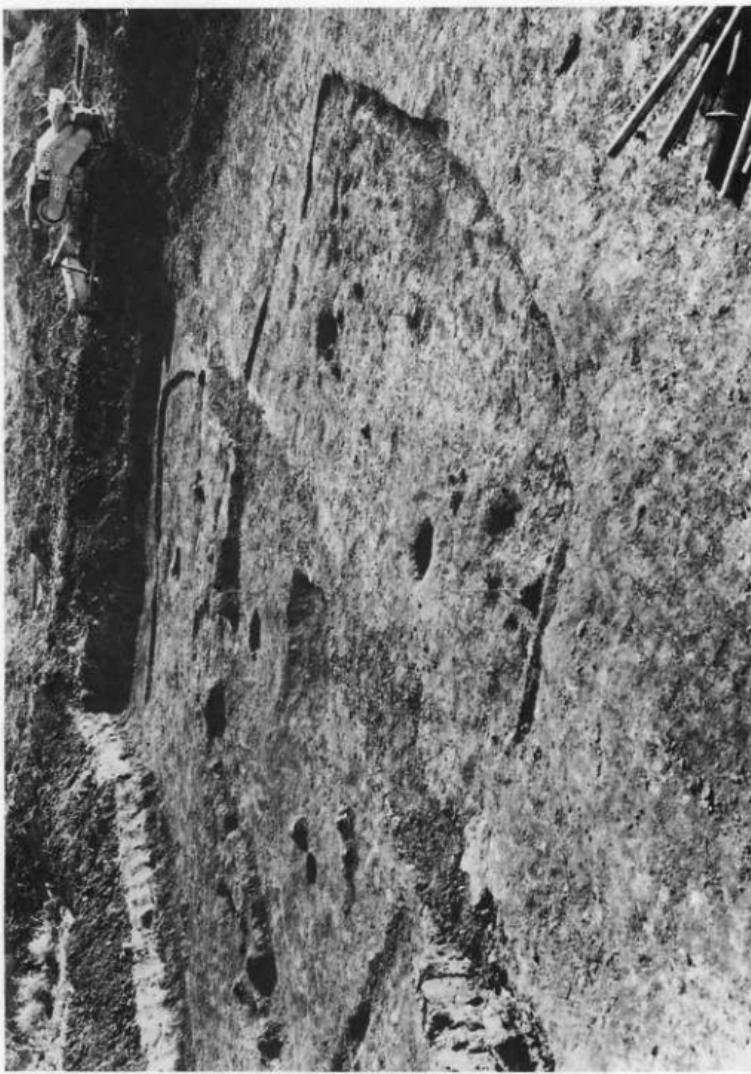


右
SB02の
作業石



(桑原高井遺跡 3)

図版第36図 造構の状況



SB04と05の竪穴式住居址

(桑原高井遺跡4)

図版第37図 造構と遺物 1



SB02内の
出土状況



手前SB02に続くSB01—東方にてTPを検出

(桑原高井遺跡 5)

図版第38図 造構と遺物 2



S B01の
全景



D K 6出
土の支脚
形土器



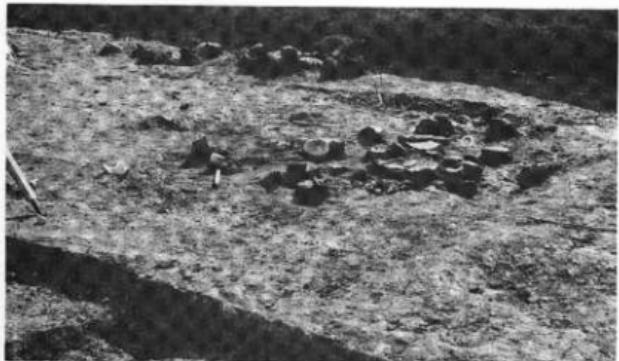
S B01の
遺物出土
状況

(桑原高井遺跡 6)

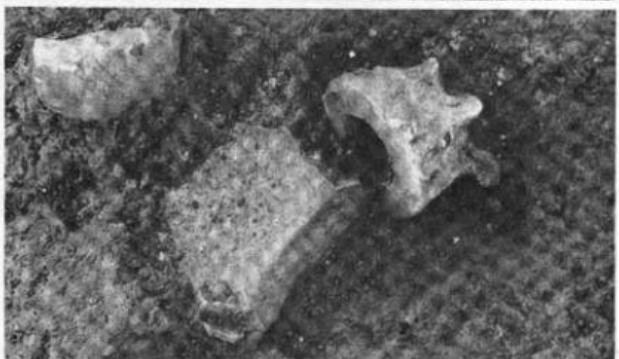
図版第39図 造構の出土状況と遺物

土壤状遺構
DK4とDK5
(手前)

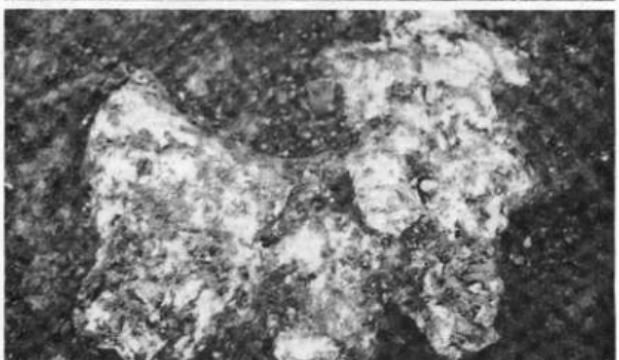
掘り込み部分は
S B02である。



DK5出土の砾石と
香炉形土器

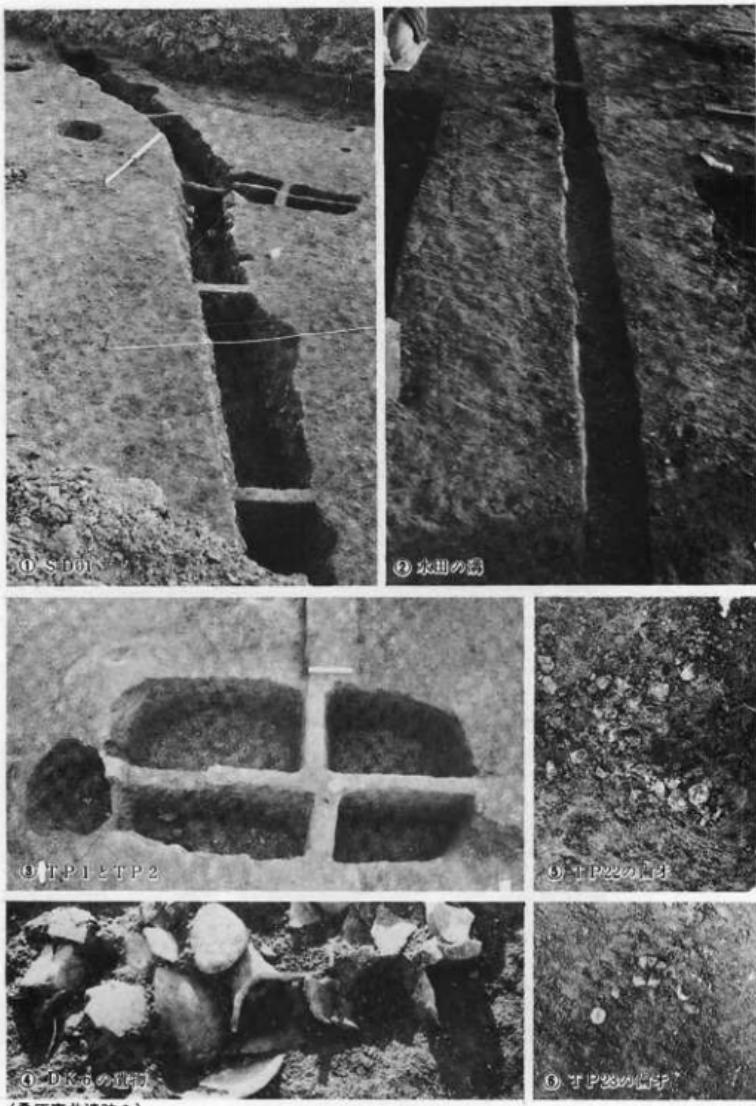


DK4で検出された
粘土塊



(桑原高井遺跡 7)

図版第40図 遺物の出土状況



図版第41図 遺構と遺物の状況

TP6における石枕



TP3の掘り方の状況

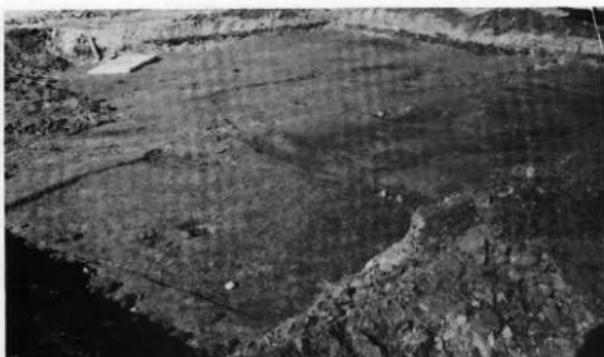


中央部のくばみから歯牙を検出



(桑原高井遺跡 9)

図版第42図 土壙墓と遺物



SB04とSB05の遺構を南東位置より



SB05とSB04関係位置をアップ

SB05とSB04の接点付近に壁をおもわせるものがある。

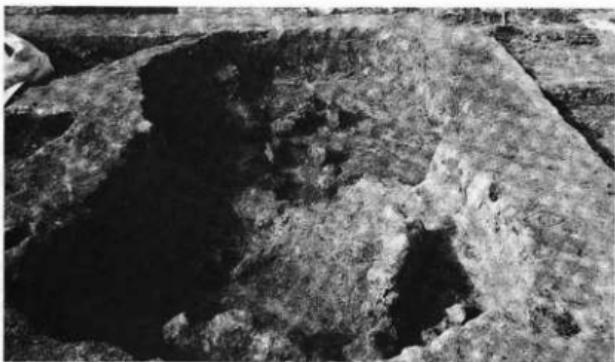


焼土遺構に群がる火葬墓群

(桑原高井遺跡10)

図版第43図 遺構の出土状況

中央部に見えるものは粘土塊



3個所に採集穴あり北面より写す。

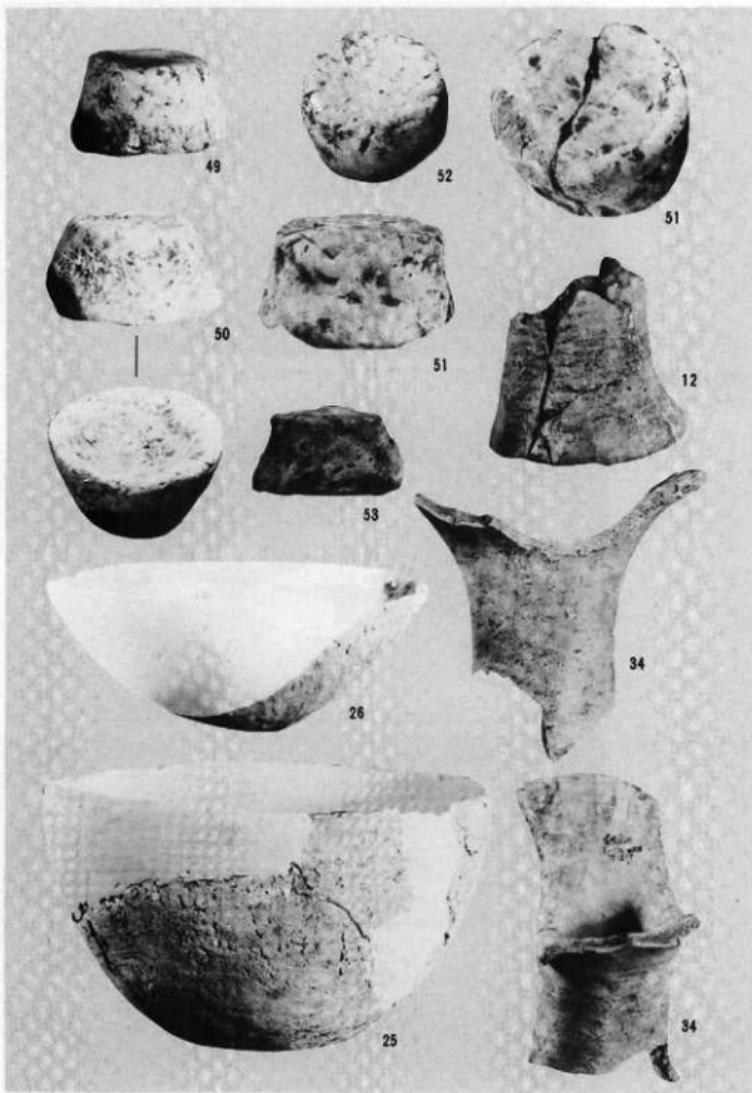


北東より同遺構を写す



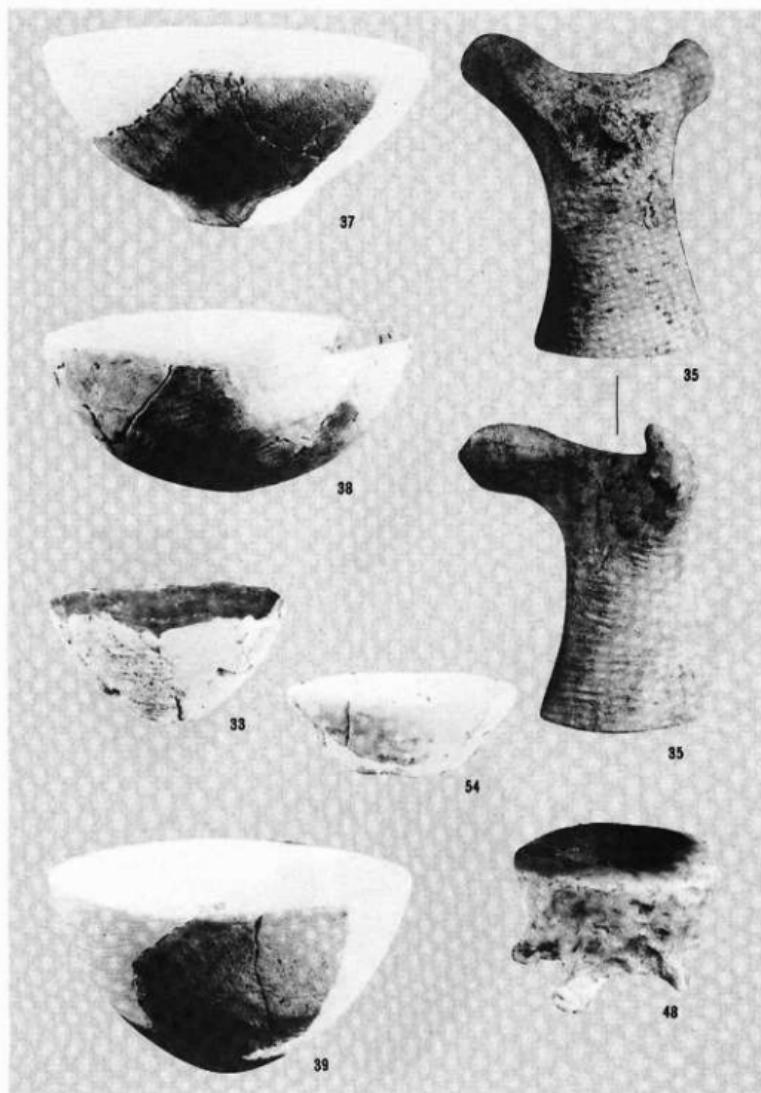
(桑原高井遺跡II)

図版第44図 粘土採集遺構



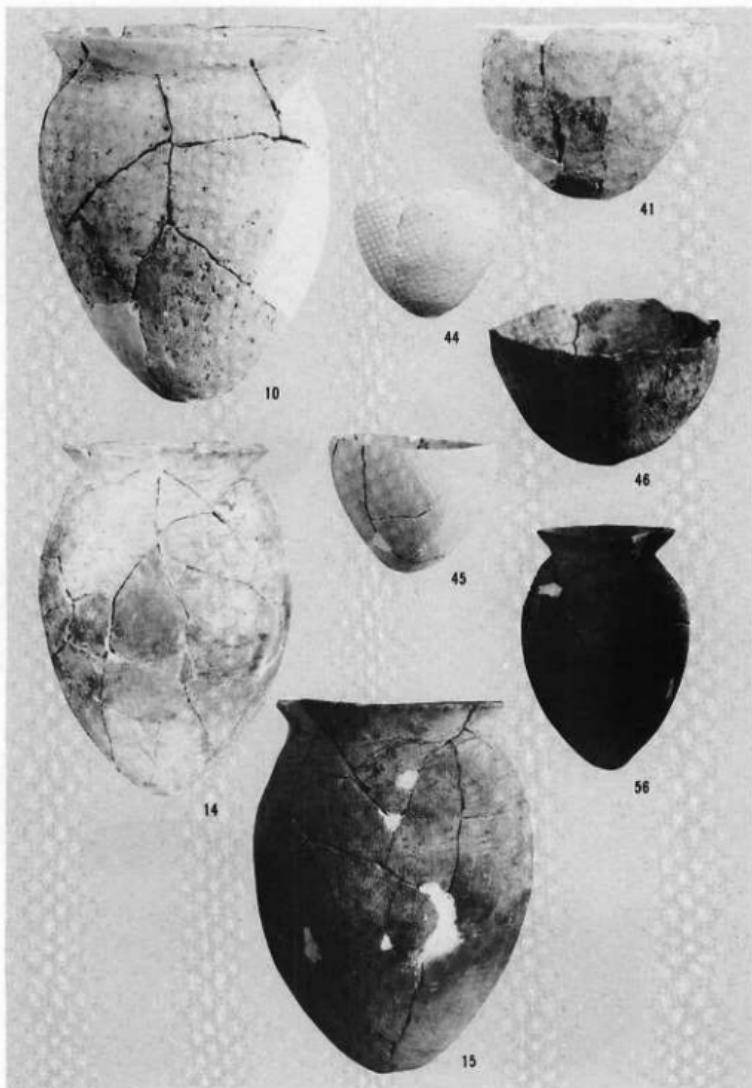
(桑原高井遺跡12)

図版第45図 遺 物 1



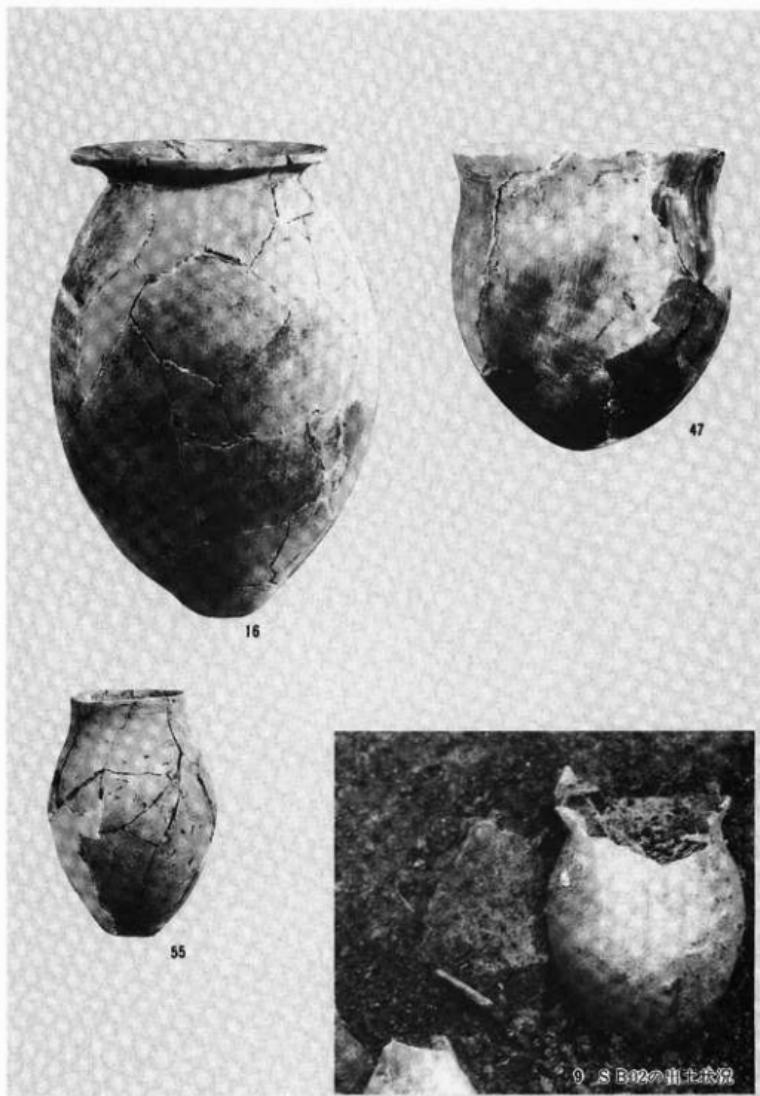
(桑原高井遺跡13)

図版第46図 遺 物 2



(桑原高井遺跡14)

図版第47図 遺 物 3



図版第48図 遺物 4

(桑原高井遺跡15)

松山市文化財発掘調査報告書

- | | |
|--|-----------|
| 1. 三島神社古墳 | 昭和47年（絶版） |
| 2. 天山・桜谷古墳 | 昭和48年（〃） |
| 3. 長隆寺廃寺跡 | 昭和49年（〃） |
| 4. 古黒遺跡 | 昭和49年（〃） |
| 5. 釜ノ口遺跡 | 昭和49年（〃） |
| 6. かいなご・松ヶ谷古墳 | 昭和50年 |
| 7. 国道バイパス概報 | 昭和50年（〃） |
| 8. 岩子山古墳…（人物埴輪） | 昭和50年 |
| 9. 御産所11号墳・忽那山古墳 | 昭和51年（〃） |
| 10. 古黒遺跡II | 昭和51年（〃） |
| 11. 文京遺跡—弥生式土器編年図付 | 昭和51年（〃） |
| 12. 来住庵寺跡 | 昭和54年 |
| 13. 五郎兵衛谷古墳 | 昭和54年 |
| 14. 松山市文化財発掘調査報告書（浮穴、西石井荒神堂、東本II・III、桑原高井遺跡） | |

松山市文化財調査報告書 第14集

（浮穴、西石井荒神堂、東本II・III、桑原高井遺跡）

昭和56年3月31日

編集行
発行 松山市教育委員会
松山市教育委員会

〒790 松山市二番町4丁目7番地2
TEL (0899) 48-6520

印刷 岡田印刷株式会社